

教育年報 2013



はじめに

岡山県立大学評価委員会
委員長（学長） 辻 英明

わが国は、少子・高齢社会を迎え、グローバル化が進展するのに伴い、社会及び産業構造は大きく変革しています。わが国では、国公立を合わせると 770 の大学が存在（平成 25 年）し、未だに文部科学省は新大学の設置を認可しています。このように、大学を取り巻く環境はますます厳しく、各大学の存在意義が強く求められ、それに応えることができなければ淘汰される状況にあります。

本学は 1993 年に開学し、2007 年度に独立行政法人化すると同時に 6 年間にわたる第 1 期中期計画を策定して本学の基盤づくりを行ってきました。昨年 4 月に第 2 期中期計画がスタートしました。私は、昨年 4 月、三宮信夫前学長の後任として学長に就任しましたが、就任にあたり、「本学が地域から期待される大学をめざす」という目標を掲げ、「全学教育を見直し、教養教育を導入し」、「国際交流を通してグローバル教育を推進し」、「戦略的な地域貢献に取り組む」という 3 つの基本方針を提案しました。2013 年度における教育研究はこの基本方針に従って活動を行いました。

本学の教育研究活動は毎年発行されます教育年報にまとめられています。教育年報 2013 は、昨年度と同様に 2 章からなります。本年度の教育研究活動は 2014 年度から始まる本格的な改革のための始動期間と位置付けられますが、第 1 章は 2013 年度に実施した教育研究活動ならびにその成果を総括したものであり、全学教育の見直し、入学者受入れ、全学教育・学部教育における学習支援、学生生活・キャリア形成支援、国際交流ならびに入学試験における選抜方式に関する活動をまとめています。第 2 章は本学の教育研究活動の改革に関する活動を総括したもので、FD 活動及び教育改革につながる目的で設置された教育力向上支援事業の活動状況をまとめています。

現在、上述の 3 つの基本方針に従って、本学は改革を進めていますが、教育研究年報 2013 の成果を踏まえ、地域から期待される大学を目指してさらなる改革が求められています。

本学の教職員一同は、豊かな教養を身につけ、国際的な視野をもった人材の育成を目標にして本学の教育改革に取り組みますので、引き続き皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

2014 年 5 月

目次

はじめに	
第1章 教育活動と成果	
1. 概要	1
2. 入学者受入	1
2-1 ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー	1
2-2 アドミッション・ポリシー	10
2-3 選抜方法	11
2-4 入学前教育	12
2-5 留学・転学受入等	15
2-6 高大連携	17
2-7 まとめと課題	17
3. 全学教育における学生の学習支援	18
3-1 概要	18
3-2 全学教育研究機構	18
3-3 留学生・転学生	22
3-4 教育力向上支援成果	23
3-5 大学コンソーシアム岡山	24
3-6 まとめと課題	26
4. 専門教育における学生の学習支援	27
4-1 概要	27
4-2 保健福祉学部	27
4-3 情報工学部	29
4-4 デザイン学部	30
4-5 まとめと課題	37
5. 附属図書館	38
5-1 概要	38
5-2 活動	38
5-3 まとめと課題	39
6. 学生の生活支援	39
6-1 概要	39
6-2 キャンパス・マネージャーの活動	39
6-3 学生相談室の活動	40
6-4 学友会活動	43
6-5 まとめと課題	44
7. 学生のキャリア形成支援	44
7-1 概要	44
7-2 フレッシュマン特別講義	44
7-3 全学講義	45
7-4 インターンシップ	45
7-5 就職支援活動と実績	46
7-6 まとめと課題	47
8. 国際交流と教育活動	47

8-1	概要	47
8-2	国際学術交流協定校	47
8-3	語学・文化研修	48
8-4	まとめと課題	48
9.	選抜方式の評価について	48
9-1	概要	48
9-2	保健福祉学部	49
9-3	情報工学部	50
9-4	デザイン学部	51
9-5	まとめと課題	52
10.	大学院における研究活動と国際交流	53
10-1	概要	53
10-2	大学院のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー	53
10-3	アドミッション・ポリシー	60
10-4	保健福祉学研究科	60
10-5	情報系工学研究科	61
10-6	デザイン学研究科	62
10-7	国際学術交流協定校	62
10-8	まとめと課題	63

第2章 教育改革活動と成果

1.	概要	65
2.	FD活動	65
2-1	概要	65
2-2	授業参観	66
2-3	授業評価アンケート	84
2-4	FD研修会・講習会	87
2-5	学外研修	92
2-6	卒業時アンケート	94
2-7	まとめと課題	96
3.	教育力向上支援事業	97
3-1	目的	97
3-2	本年度実施事業及び来年度実施予定事業	97
3-3	まとめと課題	100

付録

A	入試統計（学部・大学院）	101
B	卒業時アンケートの詳細	103
C	全学的就職支援の実施状況	105
D	国際交流	107
E	高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入	109
F	高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）	110
G	学生・クラブの表彰	111
H	委員会等協議事項	114

編集後記

第1章 教育活動と成果

1 概要

平成19年(2007年)4月に本学は法人化を果たし、平成25年(2013年)に6ヵ年の第一期中期計画を終えた。本年度の教育年報は第二期中期計画の1年目を終えて、初めて発行される教育年報となる。

本年度は、従来の年報をさらに充実させるために積極的に目次構成を改めた。それらの一つとして、第2章が‘FD活動’であったところを、‘教育改革活動と成果’と改め、そこに従来「教育力向上支援事業」が第1章3項に単独で存在していたのを、第2章でFD活動と一体的に見ることができるようにした。「教育力向上支援事業」は教員、学部、学科等が自ら行う教育の工夫や改善を支援する大学の補助事業であり、FD活動との関連性も高く、支援対象項目の中にはFD関連活動も含まれていることが大きな理由である。また、今後の大学の教育改革の中で、FD活動と「教育力向上支援事業」はさらに比重を増してゆくであろうことが想定されるのもその一因になっている。

他の大きな目次変更としては、第1章10項「大学院における研究活動と国際交流」を新設したことが挙げられる。これは本学が目指す大学のグローバル化における大学院の比重が増えつつあるためである。従来対象となっていなかった「教育力向上支援事業」は平成26年度事業から大学院も含めることとし、海外での授業、セミナーの学生旅費も補助対象となった。今後外国からの院生の積極的な受け入れが行われることも勘案して新たな項目とした。

その他の小変更としては、各項目について冒頭に‘概要’を、末尾に‘まとめと課題’を置き各項目で完結させて内容を把握しやすくしたことが挙げられる。

また、本年度(2013年)は、全学的なディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの大幅な見直し作業と新設が行われたので掲載することとした。また教養教育の系統化についても重点的に検討され、GPA(Grade Point Average)についても次年度導入を図るための準備作業が行われ、次年度の年報において示される予定である。このように、教育面では、改革に向けて大きな一歩が踏み出された年となった。

2 入学者受入

2-1 ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

大学のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーは、共通教育と専門教育全体にかかる大学の教育方針とその実施方法を示すものであり、大学にとって非常に重要なものである。

本年度は、新学長を迎え、また第二期中期計画の初年度でもあるため、従来学部毎に独立で作られていた両ポリシーを、新学長の示す教育理念に照らし、全学的に検討することとした。両ポリシーは、入学者受け入れの考え方(アドミッション・ポリシー)を示す基盤として、また入学志願者に対してどのようなポリシーでカリキュラムを組み、実施しているか、またそのようなカリキュラムを系統的に受講することによってどのような教養、専門性が身につくかを示すために欠くべからざるものであり、大学におけるキャリア形成の考え方にもつながっている。本年度まとめるディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを元に、次年度に向けたアドミッション・ポリシー作成を行う予定である。

以下に本年度改正された大学、学部、学科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを示す。

2-1-1 大学のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

【大学ディプロマ・ポリシー】

本学は、建学の理念である「人間尊重と福祉の増進」の具現化に向けて、地域社会や他の教育研究機関との自由かつ緊密な交流連携のもとに、人間・社会・自然の関係性を重視した実学を創造し、それを研究教授することによって知性と感性を育み、豊かな教養と深い専門性を備えて新しい時代を切り拓く人材の育成を図り、もって地域の学術文化の進展及び産業の振興に寄与することを目的としています。

したがって、次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 豊かな教養と高い人間性を身に付けている
- 専門性を修得し、課題を発見し解決できる能力を身に付けている
- グローバルに活躍し得る企画提案力とコミュニケーション力を身に付けている

【大学カリキュラム・ポリシー】

本学は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 カリキュラムは、全学教育科目、学部教育科目及び教職教育科目に区分しています。
- 2 全学教育科目では、価値領域の多様性の理解、課題探求に必要な基礎知識とその活用法の修得、実践的な情報処理能力とグローバル化の時代に役立つ外国語基礎能力の修得、異文化理解とコミュニケーション力の修得及び専門基礎知識の修得を柱とする、知的自律性の確立を目指した教育を全学生に実施します。
- 3 学部教育科目では、所属学科・専攻等ごとに専門の学術を学ぶとともに、全学教育科目との間で教育内容の連携を図りつつ、さまざまな社会的要請に的確に対応できる実践的能力を育成します。
- 4 学部教育のカリキュラムは、所属する学科等のカリキュラム・ポリシーに基づいて専門性・問題解決能力の修得に向け編成しています。
- 5 全学教育科目及び各学部教育科目を通じて、地域課題を知り、それを解決に導くための理論と基礎及び実践的方法を修得します。
- 6 教職教育科目では、栄養学科に栄養教諭一種免許課程、保健福祉学科子ども学専攻に幼稚園教諭一種免許課程を設けています。

2-1-2 保健福祉学部及び3学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

【保健福祉学部ディプロマ・ポリシー】

保健福祉学部は、地域の人々の健康維持と増進に積極的に貢献できる保健、医療、福祉に関する基本的知識と技術を修得し、健康課題に対して科学的な思考や分析に基づいた課題解決能力を備え、高い倫理観と豊かな人間性にあふれ、さらに社会の変化やグローバル化に柔軟に対応できる力とコミュニケーション能力を有する人材を養成することを目指しています。

したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 看護、栄養、福祉のそれぞれの分野における十分な専門的知識と技術を身に付けている
- 科学的、論理的思考に基づいた課題探究と解決に必要な多様な基礎知識とそれらを活用する能力を身に付けている
- 豊かな感性、倫理観を有し、人を支援する心を身に付けている
- 外国語を含めたコミュニケーション能力を身に付けている
- 将来にわたって応用知識・技術を積み上げていける力を身に付けている

【保健福祉学部カリキュラム・ポリシー】

保健福祉学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 幅広い教養、豊かな感性、論理的な思考能力、コミュニケーション能力、グローバルな視点並びに専門教育を学ぶために必要な基礎知識を身に付けるための全学教育科目を、すべての学科で初年次から履修します。
- 2 専門教育においては、現場で活用できる実践力を養成するために、基礎から専門にかけて講義科目を体系的に配置するとともに、豊富な演習・実験・実習科目を設置しています。
- 3 同時に、幅広い専門性を身に付けることができるように、選択履修できる他学科の科目を用意しています。また、看護・栄養・福祉の3分野からなるチーム医療における各専門職の重要性を学ぶ選択科目を設置しています。
- 4 課題発見・解決能力を育成するための卒業研究を、いずれの学科においても1年以上履修します。

【看護学科ディプロマ・ポリシー】

看護学科は、人々が健康で豊かなその人らしい人生が実現できるように、看護の専門知識と技術を活かして、地域におけるあらゆる健康レベルの人々（家族・集団・地域）の生涯を通じた健康を支援し地域社会に貢献できる看護専門職の育成を目指しています。

したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 看護の専門知識・技術を用いて、人々の生涯にわたる多様な健康レベルの人々の健康課題を科学的・論理的に判断し、解決方策を提案できる能力を身に付けている
- 豊かな教養と人間理解を基盤にしたヒューマン・ケアリングが実践できる能力を身に付けている
- 保健医療福祉チームにおける看護の役割を理解し、連携・協働できる能力を身に付けている
- 看護専門職としてのアイデンティティを形成し、専門職業人の持つべき知識・価値観・倫理観を自ら継続・発展させていく能力を身に付けている
- グローバルな視点を持ち、将来は看護の実践・教育・研究領域におけるリーダーやスペシャリストとして社会に貢献できる能力を身に付けている

【看護学科カリキュラム・ポリシー】

看護学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 1・2年次の全学教育科目の履修を通して、人間や社会を理解するための素地となる豊かな教養と倫理観を身に付け、専門基礎へ導入を図るための基盤を育成します。それに加えて、科学的思考の基盤となるクリティカルシンキングやグローバル化に対応した看護活動ができる基礎的な知識と技術を育成します。
- 2 3年次はライフステージ（母性・小児・成人・老年）別の特性を踏まえた看護や精神保健看護、在宅看護、看護政策、マネジメントについて履修し、主要な健康課題と健康増進のための理論を修得します。その上で、健康問題を持つ個人・集団・地域を対象に看護診断をし、解決に必要な知識と技術を育成します。
- 3 3年次後期から4年次前期に、各領域別の臨地実習を行います。この実習を通して人間の尊厳や多様性を学び、科学的根拠に基づくアセスメント及びヒューマンケアリングが実践できる基盤を育成します。
- 4 4年次には統合実習並びに卒業研究を行います。これまでに学んだ専門的知識や実践力を広い視点で統合し、研究的な方法を用いて健康課題を特定し解決策を論理的に説明できる能力を育成し、保健医療分野でのリーダーとして必要な基盤を育成します。
- 5 本学科は、看護師国家試験受験資格を満たす科目を卒業要件とし、一部の者には助産師国家試験受験資格に必要な科目が選択できるように配置しています。

【栄養学科ディプロマ・ポリシー】

栄養学科は、超高齢社会の到来や生活習慣病予防が重要視されている現代社会において、食と健康の相互関係を科学理論によって理解し、未知なる事象の解明に向けて研究する姿勢を身に付け、栄養学を人の健康の維持・増進、病気の予防・治療へと応用し、広く地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。

したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 食と健康の専門家として必要な基本的知識と技術を身に付けている
- 多様な対象者に対して、科学的思考に基づいて適切かつ高度な食・栄養支援を実践する技術を身に付けている
- 専門分野における問題発見・解決能力を身に付けている
- グローバルな視野を持って地域に情報発信できる能力を身に付けている
- チーム医療の重要性を理解し、他職種や患者とのコミュニケーションを円滑に進める能力を身に付けている

【栄養学科カリキュラム・ポリシー】

栄養学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 1年次から2年次までに全学教育科目を履修します。その履修を通して広範な知識の修得と異文化理解によるグローバルな視点や自然科学での科学的視点を含めた豊かな教養と高い倫理観の涵養、食と健康の専門家として活躍できるための学修基盤を育成します。
- 2 1年次から2年次までに学部教育（専門基礎分野）科目を履修します。この履修を通じて、食と健康の専門家としての健康・健康管理、医学領域、食品・加工・衛生・調理における知識や技術の基本的能力を育成します。
- 3 3年次には学部教育（専門分野）科目を履修します。この履修を通じて、専門職業人として必要な高度な専門的知識を修得し、総合的能力、コミュニケーション能力、サービスマネジメント能力、栄養指導能力、教育能力を備え、他の医療専門職と協働して、リーダーシップを発揮できる力を育成します。
- 4 4年次には卒業研究を履修します。この履修を通じて、研究課題に対して主体的に取り組み、科学的に探求する態度、論理的に思考する態度、計画的に実行する態度を身に付け、問題解決能力、実践能力を育成します。
- 5 教職教育科目を履修することで、教育の意義や食教育実践に必要な知識と技術を育成します。
- 6 全学教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には栄養士免許並びに管理栄養士国家試験受験資格が取得可能となるほか、食品衛生管理者並びに食品衛生監視員の任用資格の取得が可能となります。また、教職教育科目を修得することで栄養教諭一種免許状が取得可能となります。

【保健福祉学科ディプロマ・ポリシー】

保健福祉学科は、深い教養と豊かな人間性を兼ね備え、福祉的視点と方法に基づいて、子ども、障害者、高齢者等すべての人々の自立と自己実現を支援し、健康と幸福の増進に寄与することのできる人材を育成することを目指しています。社会福祉学専攻では、特に社会における多様な福祉課題に対処する問題解決能力と共感力をもった人材を、また子ども学専攻では、教育的視点と方法を併せ持った、子どもの育ちと学びに関わる人材を育成することを目指しています。

したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

<両専攻に共通した能力>

- 多様な文化や価値観を受け容れ、福祉的・国際的視野を持って問題解決できる力を身に付けている
- 自ら学び続ける姿勢と習慣を持ち、保健福祉学の創造に貢献できる力を身に付けている

<社会福祉学専攻>

- 社会福祉学の基盤となる、人間、健康、社会に関する幅広い知識と論理的な思考力を身に付けている
- 社会福祉学と健康科学の知識・理論を身に付けている
- ソーシャルワークの方法及び実践的な支援技術を身に付けている

<子ども学専攻>

- 子ども学の基盤となる、人間、健康、社会、教育における幅広い知識と論理的な思考力を身に付けている
- 子どもに対して具体的・実践的な指導・支援ができる力を身に付けている
- 子どもの育ちと学びを家庭や地域との関係の中で捉える力を身に付けている

【保健福祉学科カリキュラム・ポリシー】

保健福祉学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため次のような教育課程を編成しています。

- 1 社会福祉学専攻、子ども学専攻の2専攻を設置しています。
- 2 両専攻の学生が履修する科目として、「保健福祉学Ⅰ・Ⅱ」「社会福祉原論」「人体の構造と機能Ⅰ」など保健福祉学や関連諸科学の基礎知識を修得するための科目を設置しています。
- 3 1年次から2年次までに全学教育科目を履修します。その履修を通して広範な知識の修得と異文化理解によるグローバルな視点、深い教養と豊かな人間性や高い倫理観の涵養、専門職業人としての基本的な能力を育成します。
- 4 1年次は「入門ゼミナール」、2年次は「基礎ゼミナール」、3年次は「専門ゼミナール」、4年次は「研究ゼミナール（卒業研究）」を履修します。この履修を通じて、問題の解決力や実践力を身に付け、保健福祉学の創造に貢献できる能力を育成します。
- 5 1年次から4年次まで、専門職として必要な専門科目を履修します。この履修を通じて、専門職業人として必要な高度な専門知識と論理的思考力を修得します。
社会福祉学専攻では、ソーシャルワークの方法や実践的な支援技術、介護支援の方法や技術、諸外国の保健福祉制度・政策を学び、多様な福祉課題に対処できる能力を育成します。
子ども学専攻では、子どもや家庭・地域を理解し指導・支援するための福祉と教育の方法や実践的な支援技術を学び、子どもの育ちと学びを支えるための能力を育成します。
- 6 社会福祉学専攻においては、全学教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には社会福祉士及び介護福祉士国家試験受験資格取得が可能となります。
- 7 子ども学専攻においては、全学教育科目及び学部教育科目の中から履修し、卒業時には幼稚園教諭一種免許状及び保育士資格取得が可能となります。

2-1-3 情報工学部及び3学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

【情報工学部ディプロマ・ポリシー】

情報工学とは、情報の伝送・認識・処理・利用にかかわるハードウェアとソフトウェアの技術を研究開発するための学問です。情報工学部は、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に貢献できる技術者の育成を目指しています。

したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 情報工学とそれに密接に関連する工学と技術，すなわち一つは通信工学，電子工学と結びつく情報通信工学，一つは機械工学，インタフェース工学と結びつく情報システム工学，いま一つは人間工学，機器設計工学と結びつくスポーツシステム工学のいずれかを身に付けている
- 論理的思考に基づいた，日本語による記述力，口頭発表力，討議能力，技術英文の読解能力，外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている
- 情報工学の技術者に求められる高い倫理観，多面的な思考力，それらに培われた実行力や行動力を身に付けている
- 得られた知識を融合的に活用して社会の発展に貢献できる能力を身に付けている
- 工学・技術の発展と裾野の広がりに関心をもち，新しい知識や価値観を継続的に学修，吸収する態度を身に付けている

【情報工学部カリキュラム・ポリシー】

情報工学部は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています。

- 1 全学教育では，グローバル化や個々の学生の価値観の多様性に対応できるよう，選択科目を多く設けています。
- 2 専門基礎科目である情報系科目については，3学科横断型の科目配置を行い，教育の均等化と統一化を図っています。
- 3 専門科目については，各学科のカリキュラム・ポリシーに準拠した独自の教育課程を用意しています。
- 4 実験・演習を重視し，与えられた課題に対する工学的解決の能力を涵養します。
- 5 1年を通じて卒業研究を行い，研究対象に関する深い知識の獲得や，自らが発見した問題を解決に導くための計画立案・遂行能力を養います。

【情報通信工学科ディプロマ・ポリシー】

情報通信工学科は，日々進歩し続ける情報通信技術（ICT）を支えている情報工学，通信工学，電子工学の3つの学問領域を共通の基盤として，各種情報システムの智能化等に必要となるソフトウェア技術及びシステムの超高速化等に欠かせないハードウェア技術を有し，情報通信技術（ICT）の利用者視点を理解するとともに，グローバルな視野に立って社会に貢献できる人材の育成を目指しています。

したがって，本学科では次の能力を身に付け，かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 情報工学・通信工学・電子工学の幅広い知識と応用力を身に付けている
- 技術者倫理や社会環境を理解したうえで，情報通信技術（ICT）に関する知識を活用して現実の問題に柔軟に対処する能力を身に付けている
- 論理的な記述力や発表能力及び社会に寄与するためのコミュニケーション能力を身に付けている

【情報通信工学科カリキュラム・ポリシー】

情報通信工学科は，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています。

- 1 1年次及び2年次を中心に，4年間で全学教育科目を履修します。その履修を通してグローバルな視点を持った豊かな教養と高い倫理観を涵養するとともに，専門教育の準備を行います。
- 2 1年次から段階的に学部教育科目を履修します。
 - ・数学系の科目をはじめとして情報工学，通信工学，電子工学の3分野に共通する基礎知識を修得する，
 - ・情報系技術者に求められる基礎知識を修得する，

- ・情報工学，通信工学，電子工学の各分野の専門知識を修得するとともに，3分野にわたる幅広い知識をバランスよく修得し，問題解決に応用できる能力を修得することを目的とした講義，実験・演習のカテゴリーを配置しています。
- 3 全ての年次において実験・演習科目を履修します。この履修を通して，情報通信技術（ICT）に関する与えられた課題や自らが発見した問題を解決に導くための計画立案・遂行能力を育成するとともに，技術文書作成能力及び発表能力を育成します。
- 4 4年次には卒業研究を履修します。この履修を通じて，情報通信技術（ICT）に関する最先端の研究テーマを設定し，1年にわたる系統的な研究指導を受けることにより技術英文読解能力，技術文書作成能力，口頭発表能力等のコミュニケーション能力を育成し，継続的な学修態度を涵養します。

【情報システム工学科ディプロマ・ポリシー】

情報システム工学科は，コンピュータの発展に貢献できる情報工学，力学に基礎を置くものづくりのための機械工学，人間と機械やコンピュータを結びつけるインタフェース工学などの学問を身に付け，領域横断型のエンジニアとしてのセンスを持って，新たな工学的価値の創出に積極的に参加できる人材の育成を目指しています。

したがって，本学科では次の能力を身に付け，かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 多くの機器設計の基盤領域である情報工学，機械工学，インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力を身に付けている
- コンピュータや機械をインテリジェント化した機器や実用的なソフトウェアシステム，組込みシステム，機械システムを設計する基礎能力を身に付けている
- 社会の変化を多面的な視点から受け止めつつ物事に柔軟に対応できる能力を身に付けている
- 技術が人間・社会・自然に与える影響を正しく認識し，技術者として社会への貢献と責任の自覚をもって行動できる能力を身に付けている
- 論理的思考に基づいた，日本語及び外国語によるコミュニケーション能力を身に付けている
- 問題の探求，解決等を自主性と協調性とグローバルな視点を持って，創造性を発揮して計画的に遂行できる能力を身に付けている

【情報システム工学科カリキュラム・ポリシー】

情報システム工学科では，学位授与の方針に掲げる人材を育成するため，次のような教育課程を編成しています。

- 1 全学教育では，幅広い分野の学問を通じて豊かな教養を涵養するとともに，多面的思考力及び外国語によるコミュニケーション能力を育成し，技術者としてグローバルに活躍できるための学修基盤を形成します。
- 2 学部教育は，工学基礎，情報工学基礎，情報工学，機械工学，インタフェース工学及び総合・創造のカテゴリーで構成しています。
 - ・工学基礎及び情報工学基礎では，工学及び情報工学のコアとなる基礎知識を養成します。
 - ・情報工学，機械工学及びインタフェース工学では情報工学，機械工学，インタフェース工学に関する幅広い知識と応用力，そして機器設計の基礎能力を養成します。
 - ・総合・創造では，実験・演習により，講義で学んだ知識を応用する能力，課題を自主性と協調性を持って計画的に遂行する能力，レポート作成やプレゼンテーションなどの技術的コミュニケーション能力を養成します。特に，卒業研究では，最先端の研究を通じて，知識を融合的に活用し，かつ独創性を発揮して問題の解決に取り組み，社会の発展に貢献できる能力を養成します。

【スポーツシステム工学科ディプロマ・ポリシー】

スポーツシステム工学科の教育研究のキーワードは「人間中心の設計思想」です。身体とその「うごき」を扱う人間系のサイエンス並びに情報・コミュニケーションと密接に関連する情報系のエンジニアリングを融合的に学び、使う人の様々な特性やニーズの視点に立った「もの」や「サービス」の設計能力を身に付けた人材の育成を目指しています。

したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 人体機能と人間の動作・行動を解析する能力を身に付けている
- 地域や社会、自然などの人間環境の変化を認識する能力を身に付けている
- 人間の感性や生活に適合したソフトウェアを設計する能力を身に付けている
- 人体機能と環境変動の特性をシステム設計に活かす能力を身に付けている
- 他者と協調して多様な課題を柔軟にかつグローバルな視点で解決できる能力を身に付けている

【スポーツシステム工学科カリキュラム・ポリシー】

スポーツシステム工学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 1年次から2年次までは全学教育科目を中心に履修します。価値観の多様性、学問の体系性と総合性、基礎知識の活用、コミュニケーションスキルなどの教育を通じて、多様かつグローバルな視点で問題解決できる能力の基盤を育成します。
- 2 学部教育科目（専門基礎科目及び専門科目）は1年次から配置し、学年進行に伴い深化と分化、さらに体系化が図れるように編成しています。
- 3 人体機能と人間の動作・行動を解析する能力、人間環境の変化を科学的に認識できる力等を育てるために、応用数学、人間系の科学・工学の分野の科目を履修します。
- 4 人体機能と環境変動の特性をシステム設計（機器・ソフトウェアの設計）に活かす能力を育てるために、情報系の工学、機器の設計の分野の科目を充実させています。
- 5 修得した知識をもとに、他者と協調して多様な課題の解決能力を養うために、実学的な実験・演習（インターンシップを含む。）系の科目を関連科目の進行にあわせて重点的に履修します。
- 6 卒業研究では、研究対象に関する深い知識の獲得や自らが発見した問題を合理的に解決に導くための研究デザイン力・研究遂行能力を養います。

2-1-4 デザイン学部及び2学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

【デザイン学部ディプロマ・ポリシー】

デザイン学部は、情報化、グローバル化など刻々と変化する社会にあって、社会動向を的確に把握することにより課題を自ら発見し、それをデザインによって表現・解決することを通じて、豊かで新しい生活と文化の形成に必要なデザイン専門力とマネジメント能力を有する、地域と世界に貢献できる人材の育成を目指しています。

したがって、本学部では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- 人間・社会・自然に関する十分な情報分析ができ、それを応用できる構成力及びデザイン力を身に付けている
- 豊かな教養と高い人間性を基礎として、新たな生活と文化の価値を創造する能力を身に付けている
- 発想・想像力、課題発見・解決力及び企画提案力を身に付けている
- 国際化に対応できる外国語によるコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けている
- 常に知的好奇心を持ち、学習継続意欲を身に付けている

【デザイン学部カリキュラム・ポリシー】

デザイン学部は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 カリキュラムは、全学教育科目と連携を図るべく編成されており、幅広い教養とコミュニケーション能力及びグローバルな視点を身に付けるための全学教育科目と、両学科に必要なとされるデザイン基礎を中心とした科目編成をしています。
- 2 2年次からは両学科とも領域に分かれて、新たな文化価値を創造するために必要な学科専門教育科目及び講義と演習が体系化された領域専門教育科目を履修します。
- 3 学科専門教育科目では、各自の志向に基づき、自主的に選択できる演習科目を中心として編成しています。企画提案力に必要な発想から情報分析、課題解決までのプロセスを身に付けるために、領域専門教育科目は複数の専門領域が用意されており、横断的に学ぶこともできるよう編成しています。
- 4 自ら発見した課題解決のために1年間を通じて卒業研究を履修します。

【デザイン工学科ディプロマ・ポリシー】

デザイン工学科は、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し、持続発展が可能な社会実現のため、デザインの専門力とマネジメント能力により、地域社会や産業界に貢献できるデザイナーや建築家の育成を目指しています。

したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- それぞれ専門領域における必要な論理的思考力及びデザイン基礎力を身に付けている
- 持続発展が可能な社会実現のため、豊かな生活を創造できる能力を身に付けている
- 発想・想像力、課題発見、解決力を総合的に活かし、グローバルかつローカルに活躍し得る企画・提案能力とコミュニケーション能力を身に付けている

【デザイン工学科カリキュラム・ポリシー】

デザイン工学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 十分な情報分析・構築力及びデザイン基礎力をベースとして、発想・構想力、課題発見・解決力及び企画提案力を涵養し、グローバルな視点を持って地域社会や産業界に貢献できるデザイナーや建築家の育成を目的に、「製品・情報デザイン領域」と「建築・都市デザイン領域」の2つの領域を置いています。
- 2 1年次は、全学教育科目及び造形デザイン学科と共通となる「学部基礎教育科目」を学び、広範な知識や理論を養います。また、「学科専門教育科目」では、両領域に共通するデザイン技法などの科目を提供します。
- 3 2年次からそれぞれの領域に進み、「学科専門教育科目」と並行して各領域の独自性を織り込んだ「領域専門教育科目」を学びながら、専門の知識・技能修得と実践的かつ論理的な思考力を身に付けると同時に、地域社会における課題を発見し解決できる能力を養います。各デザイン領域においては、段階的かつ横断的な科目選択ができるようにキャリア・ポートフォリオ（進路分野別）を準備し、専門領域への科目選択のガイドラインを提供します。
 - ・製品・情報デザイン領域では、プロダクトデザイン及び情報デザインの講義・演習を横断的に選択できるよう編成し、将来のキャリアプランへの判断が早期かつ柔軟にできるよう編成しています。
 - ・建築・都市デザイン領域では、建築計画・デザイン・技術・法規から都市計画に至るまで、多岐にわたる分野を総合的に学ぶための体系的なカリキュラムを準備しています。また、一級建築士・二級建築士・木造建築士の受験資格を得るために必要な選択科目を提供します。
- 4 将来の進路に関して、1年次より卒業生やプロデザイナーによる「フレッシュマン就業

力セミナー」や「キャリアゼミナール」などを設けています。3年次以降では、市役所、企業やデザイン事務所でのインターンシップやデザイン実習、産官学連携授業など社会との接点の機会を提供します。

- 5 4年次には、1年間を通じて卒業研究に取り組みます。卒業研究は3年次までのカリキュラムの集大成として位置付けられており、中間発表会や最終発表会では他領域の教員も参加して活発な意見交換を行います。

【造形デザイン学科ディプロマ・ポリシー】

造形デザイン学科は、デザインによって地域特性を考慮した問題及びグローバルな視点で課題解決に取り組み、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し地域社会や国際社会に貢献できるデザイナー及び造形のスペシャリストの育成を目指しています。

したがって、本学科では次の能力を身に付け、かつ卒業の要件を満たした者に学位を授与します。

- それぞれの専門領域に関する十分な知識と情報分析・構築力及びデザイン基礎力を身に付けている
- 個々の自由な発想に基づき、新たな視点と文化の価値を創造する能力を身に付けている
- ビジュアル・造形力を活かしたコミュニケーションデザインによる企画提案力を身に付けている

【造形デザイン学科カリキュラム・ポリシー】

造形デザイン学科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 あらゆる分野に求められる快適で美しいデザイン環境を創り出すため、十分な情報分析・構築力及びデザイン基礎力をベースとして、発想・構想力、課題発見・解決力及び企画提案力を涵養し、グローバルな視点を持って社会に貢献できる人材育成のために、「ビジュアルデザイン領域」と「造形デザイン領域」の2つの領域を置いています。
- 2 1年次は、多様なデザイン理論や、デザイン基礎科目群を学びます。
また、プレゼンテーションの基礎となる理論や演習、デザイン発想・表現の基礎となる演習、実習科目に取組み総合的に基礎力を養います。
- 3 2年次からそれぞれの領域に進み、多様な専門講義科目を学ぶとともに、さらに充実した演習、実習科目への取り組み、豊かな知識を基にデザイン力とプレゼンテーション力を養います。
また、演習などではチーム編成による課題においてコミュニケーション力も育みます。
・ビジュアルデザイン領域では、グラフィック、写真、映像、CG、Webなど、さまざまな分野を組み合わせたビジュアルデザインを学修するとともに、社会に通じるデザインビジネス展開に向けた企画提案を行います。
・造形デザイン領域では、木工、陶磁、染織、印刷など伝統技術に芸術的視点を意識した新しい発想を組み入れ、さらに立体、空間、メディアを活かし、生活文化に貢献できる企画提案を行います。
- 4 高年次では、著名デザイナーの特別講義や演習、インターンシップやデザイン事務所、企業での学外実習、チームを組んで学内・学外イベントへの出展など、実社会を体感する機会を多く設け、実社会に通用する力を養います。4年次では、自ら発見した課題解決のために1年間を通じて卒業研究を履修します。また、学外で研究成果を発表する場を設定しています。

2-2 アドミッション・ポリシー

本年度は、2-1に示したように大学ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの全面的な見直しを実施した。なお、学長の掲げる教育改革の一環として、教養教育の充実に向けて全学教育科目等の見直しが進行中であるが、それについてもディプロマ・ポリシ

一及びカリキュラム・ポリシーへの反映がなされた。今後、これらのポリシーの改正が次年度のアドミッション・ポリシーにも反映される予定である。

2-3 選抜方法

(1) 入学者選抜の変更に関する予告

学部の入学者選抜において課す教科・科目の変更等が入学志願者の受験準備に大きな影響を及ぼす場合は、2年半前には予告することとしている。その他の変更についても、入学志願者保護の観点から可能な限り早期の周知に努めている。

ア 一般入試

平成 27 年度入学者選抜では、数学及び理科が平成 24 年度から（それ以外の教科は平成 25 年度から）新しい高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）で実施されたことなどを踏まえ、大学入試センター試験の利用教科・科目及び個別学力検査等の一部（主に数学、理科）を変更し、その内容を平成 24 年 10 月及び 12 月に予告した。変更後の配点や旧教育課程履修者に対する経過措置といった詳細は、平成 25 年 7 月の文部科学省通知及び独立行政法人大学入試センター通知を踏まえて決定し、平成 26 年 3 月に予告した。

平成 28 年度入学者選抜では、大学入試センター試験の出題教科・科目の変更に伴い、数学の利用科目から「工業数理基礎」を削除することを平成 25 年 10 月に予告した。

（注）旧教育課程履修者とは、高等学校（特別支援学校の高等部を含む。）又は中等教育学校の後期課程に平成 24 年 4 月に入学又は進級し、数学、理科に関し新教育課程を履修し、平成 27 年 3 月卒業見込みの者以外の者をいう。

イ 推薦入試

平成 27 年度入学者選抜では、適性ややる気のある学生を確保するなどの観点から、次のとおり変更し、その内容を平成 25 年 10 月に予告した。

学部・学科	変更の内容
保健福祉学部 栄養学科	1 高等学校当たりの推薦人数の上限（2 名）を廃止する。
保健福祉学部 保健福祉学科	調査書の学習成績の出願要件を「A 段階」から「全体の評定 平均値 4.0 以上」に変更する。
情報工学部	「面接」と「書類の審査」をそれぞれ 100 点としていた配点を「面接及び書類の審査」で 200 点とする。

平成 28 年度入学者選抜では、新しい高等学校学習指導要領の実施等に伴い、次のとおり決定し、その内容を平成 25 年 10 月に予告した。

学部・学科	変更の内容
保健福祉学部 栄養学科	面接における一般教科に関する試問は、原則として「化学基礎」及び「生物基礎」の 2 科目から出題する。
情報工学部	高等学校において「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「英語表現Ⅰ」を履修していることを出願要件とする。
情報工学部 スポーツシステム工学科	面接における一般教科に関する試問の出題範囲に「理科」を加える。

ウ 第3年次編入学

デザイン学部において、4つの専門領域において第3年次編入学による学生の補充の必要性などを検討した結果、平成27年度入学者の第3年次編入学試験は「建築・都市デザイン領域」のみにおいて実施することとし、平成25年10月に予告した。

(2) 入試事務の見直し

入試の採点事務において、大学入試センター試験の個人データの教員への提供に関するルールを整備したり、採点責任者の役割を具体化したりするなどして、採点の公平性、公正性の一層の確保を図った。

また、平成25年8月に実施した大学院入試における出題ミス（前年度と同じ問題の出題）を受けて、過去の問題との重複の有無を問題の選定と校正の二段階でチェックするようにした。

2-4 入学前教育

(1) 保健福祉学部

保健福祉学部では、学科ごとにそれぞれの課題に対応して推薦入試の入学手続者を対象に入学前教育を実施した。

ア 看護学科

看護学科では、高校から大学における学習への移行を円滑に図るために、①看護学の専門性を理解するセッション及び②大学生になる際に必要とされる基礎学力（英語）の充実と思考力の深化を図るセッションの二様で入学前教育を実施した。

日程及び内容は以下のとおりである。

【第1回】

平成26年2月1日（土） 10:00～12:15 6405 教室

担当教員 住吉和子 教授，名越恵美 准教授，實金栄 准教授

「看護学とは何か」について、入学前の段階で抱いているイメージを可視化することで、「看護」についての理解を深める。3グループに分かれ、ディスカッションをしながら、「看護」についてのイメージを出し合い、KJ法を用いてグルーピングし、「看護」に対して抱いているイメージを具体化した。グループ発表を通して、看護とは、患者さんの心身の健康回復に寄与することであり、良い看護を提供するために、知識と技術を学ぶ必要性、チーム医療のためのコミュニケーション力の必要性が抽出された。さらに、一方的にケアを提供するだけでなく、患者との相互作用を通して看護師も成長すること、看護師の仕事について具体的にイメージをすることができた。

【第2回】

平成26年2月13日（木） 13:00～15:30 6310 教室

担当教員：杉村寛子 教授

前半は、英語による自己紹介というタスクを課した。現在完了の継続用法を用いた文を必ず入れて、趣味、英語という科目についての印象、自分の高校の制服についての印象など、いくつか必須項目を設定し、ペアワークとグループワーク形式で行った。後半は、事前に配付しておいた英文のエッセイを基に、高校卒業時までには習得すべきとされる語彙や文法事項、また英文を正確に読み解くための構文の分析方法など、基礎的なリーディング能力が身に付いているかどうかの確認を行った。そして課題に関する解説を担当者が行うことで、受講者各自が弱点を知り、大学入学後に履修する基礎英語や英会話の演習に備える動機付けとなるように配慮した。

【第3回】

平成26年2月15日(土) 10:00~11:30 6310教室

担当教員 荻野哲也 教授

体表から見た人体の構造について解説し、実際に各人の身体で、体表から触知できる骨格、筋肉、動脈を確認することで、解剖学に対する関心を高めた。また、大学では講義に加え自宅学習も重要であること、自らの身体を観察することで解剖生理学の理解を深めることができること、解剖生理の知識が臨床活動に密接に関連していることを解説した。

イ 栄養学科

栄養学科では栄養学を学習するために、高等学校で化学並びに生物学を習得しておくことが必要となるが、本学科の推薦入学試験における受験科目は小論文と面接のみである。2年前より面接において一般教科、特に理科の基礎知識を面接において尋ねることを始めたが、これのみで十分に化学、生物学の学力が試されているとは言い難い。このような背景から、本学科では過去7年間にわたり推薦入学者への事前教育として、理科の中でも特に化学を重点的に指導してきたが、3年前より生物学の内容も組み入れ、より幅広い基礎学力を身に付けられるような講義内容とした。生物学については、課題を与えて期限までに担当教員に送らせ、添削を行ったものを学生に返送した。また、4年前より始めている化学の演習については、本年度も引き続き実施した。

本年は推薦入学者12名に対して以下の実施要項に基づいて入学前指導を行った。

【第1回及び第2回】

平成26年3月13日(木) 10時~11時30分(第1回) 6117講義室

13時~14時30分(第2回) 6117講義室

講義内容：化学(担当教員：伊東秀之 教授)

物質の成り立ちの講義(第1回)及びその演習(第2回)を行った。「新・化学入門」(関藤祐司・三國均共著)駿台文庫を参考書として使用し、演習では練習問題(15, 47, 65, 77, 88-89, 115, 130ページ)を一緒に考え解答した。

【第3回及び第4回】

平成26年3月14日(金) 10時~11時30分(第3回) 6117講義室

13時~14時30分(第4回) 6117講義室

講義内容：化学(担当教員：伊東秀之 教授)

有機化合物の性質について講義した。

生物学(担当教員：高橋吉孝 教授)

細胞の構造と機能、並びにそれを支える物質について講義した。

本年度も演習や課題学習を取り入れることにより、講義のみの入学前教育と比べると学習効果を高めることができた。また、化学のみならず生物学の講義も取り入れることで、入学後の栄養学の修得に必要な理科の基礎知識をより広範囲にカバーすることができた。今後は、より速やかな栄養学教育への導入を目指して、教育内容と授業時間数についてさらに吟味する必要がある。

ウ 保健福祉学科

保健福祉学科では、保健福祉学・子ども学を学ぶ基礎力を醸成するため、また国際化の進展と本学における英語教育の充実への対応を図るために入学前教育を実施した。具体的には、保健福祉学・子ども学に関する英文和訳等の課題を課し、その内容に関して講義を行った。また、保健福祉専門職・保育職に必要なコミュニケーション力を高めるためにグループディスカッション等を実施し、入学前にどのような学習が有効であるのかを自身で考

えさせ、入学後も継続的な学習が実現できるように配慮した。

日程及び内容は、以下のとおりである。

【第1回】平成26年2月1日（土）13-15時 8901教室

- ① 英文課題の自己添削：保健福祉学・子ども学に係る英文和訳及び小論文を事前に課し、それらを模範解答をもとに自己添削させた。また、英語の継続的な学習が大学教育においても必要であることを説明し、継続的な学習を促した。
- ② ミニ講義：「子どもの権利条約」（担当：周防美智子講師）、「幼児教育・保育の重要性」（担当：佐藤和順教授）と題して担当教員から英文の内容に関連した講義を行った。
- ③ 次回課題の説明

【第2回】平成26年3月14日（金）13-15時 8901教室

- ① 課題の自己添削：第1回に出題した福祉・ボランティアに関する英文課題について、模範解答をもとに自己添削させた。
- ② グループディスカッション：「社会福祉学・子ども学を学ぶ者にとって入学までにできること」について入学予定者に発表を求め、教員を交えた小グループで討議を行った。討議内容については、学科全教員の前での発表を求め、教員から入学前の学習方法及び重要性等についての助言を得た。

（2）情報工学部

情報工学部では、入学者の主な選抜は、推薦入試（11月下旬）、前期日程（2月下旬）、中期日程（3月上旬）の3回に分けて実施される。このうち、推薦入試による合格者は、2月上旬の合格発表から4月の入学までの期間、高等学校での学習内容を維持することにより、入学後の授業に無理なく移行することが可能となる。これをサポートするために、以下の3項目を主眼とし、3学科合同で入学前教育を実施している。

- ・ 高校卒業までの3ヶ月間の時間の使い方へ示唆を与える。
- ・ 大学入学までの心と体の健康維持と教養の深め方を示唆する。
- ・ 身の回りの現象を支配している物理や数学から理工系の勉強に興味を持たせる。

日程と内容は以下のとおりである。

【第1回】

日時：平成25年12月26日（水）13:30～ 約2時間

場所：情報工学部棟2202室

内容：まず、学部長による挨拶が行われ、合格者に英語と数学の課題を配付し、第2回目に提出することとした。その後、学科別（情報通信工学科は2203室、情報システム工学科は2202室、スポーツシステム工学科は2906室）に分かれ、各学科長における講話及び数学の小テストを実施した。小テストの結果は平均点が予想よりも低く、入学までの学習の継続が望まれる。参加生徒数は、情報通信工学科13名、情報システム工学科12名、スポーツシステム工学科16名であった。

【第2回】

日時：平成26年2月27日（木）13:30～約2時間

場所：情報通信工学科(2203室)

情報システム工学科(2202室)

スポーツシステム工学科(2906室)

内容：第1回目に配布した課題を回収した。その後、数学の課題に関する小テストを実施し、各学科の数名の教員で採点を行いながら個別指導を行った。参加生徒数は、情報通信工学科13名、情報システム工学科13名、スポーツシステム工学科14名であった。

(3) デザイン学部

ア デザイン工学科

平成26年3月6日(木) 9:00~17:30 3311/3109室

参加者数 10名

参加教員 福濱嘉宏教授, 津田勢太准教授

実施概要 ワークショップ形式による入学前オリエンテーションを実施

実施目的

- 1) ワークショップ形式での制作体験を通じて, 大学教育へのスムーズな導入を図る.
- 2) 大学教員や在学生とのフェイス・トゥー・フェイスの交流を通じて, 大学への親近感を向上させる.
- 3) 特にパソコンによるデザインワークの基礎的プロセスを体験させる.

実施詳細

1限~2限 課題1 紙でつくる構造(福濱教授)

3限~5限 課題2 3D CADモデリング(津田准教授)

イ 造形デザイン学科

造形デザイン学科では, 推薦入試による入学予定者に対して, 入学までの期間においてデザインに対するモチベーション維持と学習を継続することで入学時への移行がスムーズに行われるよう実施した.

◆事前課題

テーマ: 「私の好きなデザイナー」

提出物: 英文によるレポートとデザイナーの参考作品1~2点を添付. A4サイズ.

※当日, 英語による3分間プレゼンテーションを行った.

◆開催日: 平成26年3月14日(金) 9:30~16:30

参加教員: 学科長 桑野哲夫, 教授 難波久美子, 教授 山下明美, 准教授 佐野真一郎

参加学生: 13名

授業概要: ワークショップ形式による入学前教育を実施した.

- ・プレゼンテーション力, コミュニケーション力を意識させる.
- ・英語によるデザインへの関心度を高める.
- ・大学への親近感を向上させる.

◆スケジュール

- ・午前の部: 9:30~11:30

オリエンテーション 9:30に3305教室に集合

事前課題「私の好きなデザイナー」について

英語によるプレゼンテーション・講評

英語担当教員による「英語のすすめ」について講義

- ・午後の部: 12:30~16:30

12:30~「ワークショップ」図書館において行う.

15:30~「プレゼンテーション・講評」

2-5 留学・転学受入等

(1) 外国人留学生の受入状況

本学では, 国際社会に開かれた大学として外国人留学生の受け入れを進めており, 主としてアジア諸国を中心に留学生の受け入れを行うとともに, 国際交流協定を締結している韓国又松(ウソン)大学校からは学部への転学生や短期の交換留学生の受け入れを行って

いる。

平成 25 年度は、韓国又松大学校から 2 名の留学生（保健福祉学部）に 2 名の交換留学生）が、学部と大学院で合わせて 13 名の留学生が在籍している。

留学生の受け入れは、留学生にとっては、専門知識や技術の修得、本学学生にとっては留学生からの異文化の新鮮なインパクトの享受や国際交流が図られるなど、双方の学生に大変有意義なことであり、国際化に対応する人材の育成を進めていく上でも重要である。

今後、留学生の受け入れを積極的に進めるために、受入体制の整備を進めるとともに、良好な環境で学習できるよう各種支援の充実に取り組む予定である。

〔留学生の在籍状況〕

単位：人

年度	人数	学部・院別	所属学部等別	国籍別人数
20	16 (2)	学部 4 (2)	保健福祉学部 3 (2) 情報工学部 1 デザイン学部 0	韓国 2 (1) カンボジア 1 フィリピン 1 (1)
		大学院 12	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 2 デザイン学研究科 6	中国 8 韓国 3 ベトナム 1
21	18 (2)	学部 7 (2)	保健福祉学部 3 (1) 情報工学部 1 デザイン学部 3 (1)	韓国 5 中国 2 (2)
		大学院 11	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 6	中国 6 韓国 4 カンボジア 1
22	14 (2)	学部 6 (2)	保健福祉学部 2 (1) 情報工学部 1 デザイン学部 3 (1)	韓国 5 (1) 中国 1 (1)
		大学院 8	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 3	韓国 4 中国 3 カンボジア 1
23	7 (0)	大学院 7	保健福祉学研究科 5 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 1	韓国 5 中国 2
24	10 (0)	学部 4	保健福祉学部 2 情報工学部 2	韓国 4

		大学院 6	保健福祉学研究科 4 情報系工学研究科 1 デザイン学研究科 1	韓国 4 中国 1 ネパール 1
25	12 (2)	学部 6(2)	保健福祉学部 3(1) 情報工学部 2 デザイン学部 1(1)	韓国 4 中国 1(1) ベトナム 1(1)
		大学院 6	保健福祉学研究科 5 デザイン学研究科 1	韓国 3 中国 2 ネパール 1

※ () 内は留学生のうち研究生の数

(2) 外国人留学生の受入促進

外国人留学生については、国際的言語である英語圏の大学に有為な人材が流出しているとの指摘もあり、本学に留学しやすい環境を整えるため、今後は大学院において英語のみで単位が取得できる授業科目を増やすことなどが課題として挙げられた。

また、募集段階では、大学院保健福祉学研究科において、主に国際交流協定校からの留学生受入を進めることを目的に、英語版の学生募集要項と研究科紹介パンフレットを作成した。情報系工学研究科及びデザイン学研究科でも、平成 27 年度入学者から英語版の学生募集要項を作成することとした。

2-6 高大連携

本学と岡山県高等学校長協会との懇談会及び本学と県内の高等学校等進路指導担当教員との意見交換を以下のとおり実施した。

(1) 本学と岡山県高等学校長協会との懇談会

日 時：平成 25 年 7 月 25 日（木）14:00～16:00

場 所：本学本部棟 2 階大会議室

出席者：高等学校側 11 名，本学 11 名

内 容：各学部及び入試概要の説明，議題協議，意見交換等

(2) 本学と県内の高等学校等進路指導担当教員との意見交換会

日 時：平成 25 年 6 月 27 日（木）13:30～16:00

場 所：本学本部棟 2 階大会議室他

出席者：高等学校側 52 名，本学 19 名

内 容：各学部の説明，平成 26 年度入学者選抜，高等学校等からの事前質問・要望事項に対する本学の回答，個別の質疑応答（学科ごと）

高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入に関するデータは付録 E を、高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）に関するデータは付録 F を参照されたい。

2-7 まとめと課題

本年度は、本学で初めて統一的なディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの改

正が行われ、大学の教育方針・手段の明確化が図られた。また、アドミッション・ポリシーについては、本年度検討された全学的なディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及び全学教育研究機構において学長の掲げる教育改革の一環として行われている教養教育の充実に向けたカリキュラムの見直しが行われており、今後その検討結果を受けて、大学・学部・学科のアドミッション・ポリシーについても再検討が行われる予定である。

入試については、平成 24 年度～平成 25 年度から新しい高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）が適用されたことから、平成 27 年度入学者の、大学入試センター試験の利用教科・科目の一部変更を行い、予告措置を行った。また平成 27 年度入学者選抜の推薦入試では、適性や‘やる気’のある学生を確保するなどの観点から、保健福祉学部栄養学科、保健福祉学科及び情報工学部で試験方法や出願要件等の変更を行った。

推薦入学者に対する入学前教育は、各学部で独自の工夫を凝らしながら実施した。今後推薦入学者の特性や期待する学科内での役割も踏まえた入学前教育の在り方の検討が必要と思われる。

本学では、主に国際交流締結校からの転学生を受け入れているが、それを継続するとともに、主に国際交流協定校から本学大学院への留学生を受け入れるための準備を進めた。そのため、保健福祉学研究科では英語版の学生募集要項と研究科紹介パンフレットを作成した。

高大連携は今後の入学者獲得において重要な役割を果たすと考えられるため、教職員が積極的に高校に講師派遣や受け入れを行ってきた。今後の高大連携促進に向けて大学として一丸となって当たるような体制作りが望まれるところである。

3 全学教育における学生の学習支援

3-1 概要

学長の掲げる教養教育改革の指針である「教養教育における基礎知識とその活用法の修得を通じた思考力及び課題探求力の育成、数量的スキルを含む実践的な情報処理能力の育成、外国語基礎能力や異文化理解力の修得を通じたコミュニケーション力の育成」、ならびに全学教育 25 年度計画における「全学教育研究機構内に全学教育改善委員会を発足させ、本学における全学教育の指針やコア科目について検討する」に沿って、機構内部に教養教育改革企画立案チームを編成し、コア科目及びサブ科目からなる教養教育フォーク型科目群の編成、汎用的スキル科目や社会連携科目等からなる平成 27 年度対応のカリキュラム素案を作成し、機構教授会に報告の上、学長に答申した。当該カリキュラム素案は、26 年度に設置予定の大学教育開発センターに引き継がれ、年度半ばにおける策定をめざすこととしている。

また 25 年度計画における「平成 26 年度からの中級英語の必修化に合わせ、中級英語Ⅰ、Ⅱ及び英会話Ⅲ、Ⅳのシラバスの整備」について語学センター英語教員チームにてこれを実施した。「韓国語Ⅰ、Ⅱにおける 1,500～2,000 の語彙習得（韓国語能力試験（TOPIK）2 級程度）」については、引き続き指導方法の検討を実施するとともに、26 年度シラバスにおいて TOPIK 受験に向けた内容を加味することとした。

3-2 全学教育研究機構

（1）共通教育

共通教育としての全学教育は 7 つのカテゴリーからなるハコ型カリキュラムをなしており、各学科にて卒業要件単位ならびに必修・選択科目等の指定を実施、履修に供している。各

カテゴリー名及び科目数ならびに全学的に必修としている科目の状況は以下のとおり。

カテゴリー名	開講科目数	全学的な必修科目
大学でどう学ぶか	8	フレッシュマン特別講義
コミュニケーション	22	基礎英語 I, II, 英会話 I, II, 中級英語 I, II
人間と文化の理解	19	
現代社会に生きる	16	
科学技術と環境	10	
健康の維持・増進	7	
学部教育への準備	22	※総計 104 科目 ※教職関係 10 科目を含む

必修科目のうちフレッシュマン特別講義(1 単位)は、学長による本学の教育・研究理念の紹介をはじめ、図書館ガイド、語学・情報教育・健康スポーツ推進の各センター長講義、ならびに学外講師による古代吉備文化や人間力に関する講義等で構成され、新入生に対する地域や大学における学業・生活をスタートさせる上で重要な役割を担っている。また必修の英語 6 科目に関しては、充実した少人数教育の必要性から何れも 12 クラス編成で実施することとしている(1 クラス平均 20 名程度)。さらにグローバル化をにらみ、従来正課外であった「語学・文化研修(3 科目)」を 26 年度より授業科目化することとした。

以上のほか、26 年度における共通教育の充実に向けた計画を以下のとおり策定した。

- 1) 中級英語Ⅱ履修期間における TOEIC IP テストの全員受験(従来は任意受験)の実施
- 2) 全学的なアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの策定作業にともない、27 年度全学教育カリキュラム改訂に向け、26 年度カリキュラム・ポリシーの過渡的改訂を実施し、26 年度履修案内に反映することとした。

以上であるが、25 年度の各種立案・計画作業の背景にある課題については 3-6 に記述する。

(2) 語学センター

昨今、国際社会に生きる次世代の人材を育成するために、英語を主とする語学力の向上と、幅広い教養の涵養が求められているが、語学センターにおいても、このような必要性に応え、語学力向上支援の事業を展開し、また国際的な視野を育てるための講演などの文化的事業も開催している。以下では、まず語学教育関連の成果を、次に文化事業に関しての報告を行いたい。

① 利用状況

語学センターでは、学生の(英語を主とする)語学学習支援事業の一環として、授業での使用がない平常時ならびに夏季・春季の長期休暇中に、CALL 教室(以下、8122 教室)の開放を行い、学生に自主学習の機会を提供している。具体的には、本学で導入しているオンライン自主学習システム ALC NetAcademy2 を利用した TOEIC 対策などを促し支援するのみならず、本年度より本格的に開始した学習プロジェクトである多読学習推進のために書籍を選書し充実させ、その貸出を行い、必要に応じて助言や指導を行っている。またティーチングアシスタントを月曜日から木曜日までの週に 4 日間配備し、個人あるいはグループに対してスピーキングの指導を行っている。これらの学習支援事業に関する利用者総数は下表に示すとおりである。なお、表中の「自主学習」としては、ティーチングアシスタントによるスピーキング指導を受ける者、ALC NetAcademy2 の利用者、語学センター所蔵の書籍を利用して TOEIC 受験のために自主学習する者を含め、多読書籍の貸出や学習相談など各種問い合わせについては「その他」に含まれる。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
自主学習	134	145	126	123	20	38	179
その他	338	417	373	252	82	167	319
計	472	562	499	375	102	205	498
11月	12月	1月	2月	3月	前期計	後期計	合計
130	100	92	5	0	586	506	1,092
233	210	257	108	35	1,629	1,162	2,791
363	310	349	113	35	2,215	1,668	3,883

そのうち自主学習者の学部別人数は以下のとおりである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
保健福祉学部	17	28	25	34	9	18	50
情報工学部	94	98	74	60	7	13	90
デザイン学部	23	19	27	29	4	7	39
計	134	145	126	123	20	38	179
11月	12月	1月	2月	3月	前期計	後期計	合計
33	26	25	0	0	131	134	265
75	65	55	4	0	346	289	635
22	9	12	1	0	109	83	192
130	100	92	5	0	586	506	1,092

8122 教室以外の、情報教育センターと共用する 8120 教室、8211 教室、各学科演習室をも含めた、学内からのオンライン自主学習システム ALC NetAcademy2 の利用者数は以下のとおりである。なお次年度からは、学外から本システムへのアクセスが可能となるため、これを目的とした教室の利用者数は激減すると予想される。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
保健福祉学部	238	609	276	480	96	43	551
情報工学部	430	600	363	850	66	59	322
デザイン学部	277	262	173	299	3	31	169
計	945	1,471	812	1,629	165	133	1,042
11月	12月	1月	2月	3月	前期計	後期計	合計
291	181	467	7	0	1,742	1,497	3,239
451	167	514	50	0	2,368	1,504	3,872
87	95	156	19	0	1,045	526	1,571
829	443	1,137	76	0	5,155	3,527	8,682

就職活動や進学上の必要性から TOEIC の受験を希望する学生がいるため、TOEIC IP を学内で3回実施した。その実施状況は以下のとおりである。平均点はほぼ前年並みであった。

通算回数	実施年月日	受験者数(人)	最高(点)	最低(点)	平均(点)
27	平成25年 5月30日	63	620	205	377.0
28	平成25年 10月18日	21	800	215	444.8
29	平成26年 2月20日	15	630	280	452.0
	計	99	800	205	402.7

②スピーカーズコーナー

毎年大学祭第1日目、本学の学生が外国語（日本人学生は英語、留学生は日本語）を用い、自身の経験に基づくスピーチを披露している。本年度は10名の学生（留学生1名含む）が参加し、大学主催のバンガー大学語学文化研修での経験、自主計画した海外への旅、ボランティア活動などについて、また韓国からの留学生は岡山での生活について語るなど、多様性に富む発表が揃った。

③国際教養講座

午前のスピーカーズコーナーに引き続き、午後からは主に語学センターの教員が講師をつとめる「国際教養講座」を開催している。本年度は9月に着任したデザイン学部の佐野真一郎准教授が自身の専門分野である言語学に関連した「社会・文化と言語」と題する講演を行った。所与の文化に固有のものを見方が言語（活動）に反映されており、例えば雪と密接な関係のあるイヌイト（エスキモー）の人びとの間では雪を表す単語が数十もあるなど、英語以外にもいくつかの言語を例に挙げつつ、言語現象を概説するという、興味深い内容であった。

④カルチャー・ランゲージ・テーブル

今年度より各学期に1回の予定で、国際文化事業として「カルチャー・ランゲージ・テーブル」を開催することとなった。前期には7月12日にアメリカ・インディアナ州ローズハルマン工科大学教授ウェイン・サンダース氏による‘Airplane Building for Non-professionals’と題した自作の飛行機に関する講演を開催した。そして後期には1月10日に、本学の保健福祉学部看護学科教授高橋徹氏によって、‘Giving a Presentation at an International Conference: My Experience in Crete, Greece’と題した、国際学会での発表の経験などについてお話いただいた。

*なお、②、③及び④の行事は一般にも公開されたもの

(3) 情報教育センター

学生の情報活用能力の向上を図り、情報教育演習や自主学習利用の目的のため、語学センターと協力の下、インターネットに接続されたPCを備えた情報処理演習室を年間163日開放した。各月の延べ利用者数及び開放日数は下表のとおりである。延べ人数は17,829名であり、前年度比約4%の利用者増であった。学部別では、保健福祉学部（保健福祉学研究科を含む）が全体の約69%、情報工学部（情報系工学研究科を含む）が約8%、デザイン学部（デザイン学研究科を含む）が約23%であった。保健福祉学部が突出している原因は、情報工学部及びデザイン学部はそれぞれ学部教育用の計算機演習室を整備しているが、保健福祉学部にはそれらに相当する演習室がないためと考えられる。

・ 延べ利用者数

月	4月	5月	6月	7・8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	合計
H24	1,087	2,024	2,381	2,858	2,516	2,145	1,749	2,014	448	17,222
H25	1,315	2,650	2,432	3,660	2,525	1,432	1,629	1,814	372	17,829

・ 開放日数

月	4月	5月	6月	7・8月	9・10月	11月	12月	1月	2月	合計
H24	11	16	17	20	27	19	14	16	6	146
H25	14	20	20	27	27	19	15	16	5	163

また、学内ネットワークにおいて以下に示す環境改善を図った。

- ・平成 20 年度に導入した迷惑メール対策サーバ、L2 スイッチ等を更新した。
- ・ネットワーク環境の強化として、また、本学が避難場所であることを考慮して、岡山県と連携し公衆無線 LAN サービス「おかやまモバイル SPOT」のアクセスポイントを設置した。
- ・ネットワーク・セキュリティ向上のため VPN (Virtual Private Network) を導入した。
- ・さらに、全学的な情報セキュリティー体制の基本部分の見直しと関連マニュアルの整備を行った。

(4) 健康・スポーツ推進センター

学生の健康の維持と増進を目的として、またさらに運動を日常生活に取り入れることの大切さ・必要性を深く理解させるために、実技科目「スポーツⅠ」「スポーツⅡ」、講義科目「スポーツの科学」「運動と健康」を開講した。

実技科目では、前期 5 種目（フィットネス的トレーニング・ソフトボール・テニス・バドミントン・エアロビクス）、後期 6 種目（バレーボール・ゴルフ・サッカー・多種スポーツ・テニス・エアロビクスⅡ）の中から選択させ、種目ごとに進めた。前期のトレーニング履修者には、「新体力テスト」で現状の自己体力を把握させながら授業を行なった。また後期の多種スポーツのクラスでは、学生はペタンク、グラウンドゴルフ、バドミントン、バスケット、サッカーの各種目を次々と経験した。

今年度の履修学生は、スポーツⅠ：317 名(昨年度 363 名)、スポーツⅡ：266 名(同 338 名)、スポーツの科学：161 名(同 184 名)と、大幅に増加した昨年度に比べると、実技科目・講義科目ともかなりの減少を見た。2 学科において卒業要件の変更があり、スポーツⅠ、Ⅱが必修科目でなくなった等の事情が考えられるが、今後さらにスポーツの重要性を周知していく取り組みが必要となる。

また今年度より、新入生向けのフレッシュマン特別講義を 1 回分担することとなった。今年度は、まず本学のスポーツ関連施設や体力測定機器等についての説明をした後に、「スポーツを楽しもう!」という題で講義を行なった。その内容は、まずスポーツという語は元来「気晴らし(ディスポート)」に由来し、主にイギリスで肉体を行使する気晴らしを意味するようになったこと、最初は貴族の間での娯楽であり、したがってアマチュア精神が尊重されたが、徐々に広く各層に浸透して行ったこと、そしてやがて日本へも伝わり、日本では独自の遊びの伝統があったので、スポーツは武士道的に精神修養ととらえられたこと、学生の間から広がって日本独特の発達を遂げたこと、とりわけ野球に人気が集まり、その過熱ぶりに「野球害悪論」のキャンペーンもなされたが、それでも一向に人気は衰えず、そのキャンペーンの推進役が一転して全国大会の主催者となり、現在に至る野球人気は定着したこと等である。また日本においてはスポーツが武士道的精神と、そして一時的には軍事的なもの結びついたため、ヨーロッパにおけるような豊かなスポーツ文化がまだ十分に発展しているとは言い難い面のあることにも言及した。

3-3 留学生・転学生

本学では、日本の生活に不慣れな留学生（韓国又松大学校からの転学生、短期留学生を含む）が、いち早く日本の生活・文化に慣れ、学習・研究活動に励むことができるようにするため、本学学生の中から学業や生活の相談相手を選定し、留学生のサポートを行うチューター制度を設けるなど学業・生活面の両面において支援を行っている。平成 25 年度は、留学生に対して、各学科における学習支援のほか、授業料減免制度や奨学金募集等の情報提供及び活用の支援などを行った。

なお、平成 25 年度の留学生数は、学部生 6 人、大学院生 6 人の計 12 人で、2 人の留学生

に対しチューターを配置した。これまでにチューターを利用した留学生数は次のとおりである。

[チューターの必要な留学生数]

年 度	21 年度	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度
留学生数	5 人	0 人	0 人	4 人	2 人

3-4 教育力向上支援成果

平成 25 年度教育力向上支援事業における全学教育関係分は語学関係の 2 件である。何れも平成 25 年度計画とリンクしたものとなっている。概要及び成果は以下のとおり。

(1) 英語教育

事業名	中級英語必修化に向けての多読教育プログラムの再検討
代表者	杉村 寛子
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> TOEIC IP テスト結果分析に基づきリーディング教育の重要性を再確認 書籍貸出数調査から starter, beginner 向けで authentic な図書を選定 中級英語(選択)授業において学生による英語での図書紹介課題を実施 学習習慣確立のため有志による「多読学習プロジェクト」を企画, 実施 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> 英語での図書紹介課題の取組により, リーディングとスピーキングのリンクによる技能向上を図ることができた。 「多読マラソン 2000 mins. per 1 semester」プロジェクト (1 日 15 分で約 4 ヶ月 2000 分の多読学習) に 10 名の有志学生が参加し, 英語の学習習慣確立に寄与することができた。

平成 26 年度における中級英語必修化にともない, 全学教育研究機構では全学的な協力のもと, 中級英語履修者に対する TOEIC IP テストの全員受験を計画している。本研究は同テスト受験者におけるリーディングスコアが相対的に低いとする調査結果に基づいており, これを改善するとともに, 恒常的に英語に親しむ習慣形成に寄与すると期待される。26 年度 TOEIC IP テスト実施結果に基づき, より有益な成果と改善策の検討が見込まれる。

(2) 韓国語教育

事業名	使える役に立つ実践的な韓国語を身につける学習支援
代表者	朴 貞淑
概要及び成果	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> 韓国語能力試験 (TOPIK) 受験意欲の涵養と能力に応じた基礎作りのための段階的学習方法及び演習上の工夫を求める。 韓国語に親しめる内容及び理解を助ける視聴覚教材の選定を行う。 正課内外におけるネイティブとの交流機会を活用する。 <p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 26 年度における TOPIK 受験希望者の増加をみた。 「基礎韓国語」履修生における自信の表れとして授業中の挙手回数が増加した。 授業において韓国人留学生 TA との会話等の実践的トレーニングを加えることにより, 正しい発音のできる履修者が増加した。 26 年度シラバス作成に成果を反映することができた。

平成 25 年度計画において「1,500～2,000 の語彙習得（韓国語能力試験 TOPIK 2 級程度）を目指す」としているが、平成 25 年度においては TOPIK 受験に向けたモチベーションを高めるための工夫について多様な観点から実践した。26 年度 TOPIK テスト受験状況に基づき、より有益な成果と改善策の検討が見込まれる。

語学教育には、文法等の正しい理解などアカデミックな言語教育の基礎面及び、実践的なコミュニケーションのため五感等を慣らすことを通じて異文化を取り込む応用面の両面があり、この種の学習支援の研究的かつ実践的取組は今後とも求められる。

3-5 大学コンソーシアム岡山

大学コンソーシアム岡山では、文科省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」選定事業を受け、16 大学が参加して平成 21 年度から始まった旧岡山オルガノン事業について 23 年度の補助金交付終了を受け、24 年度から継承して実施しているものである。

主な取り組み 3 項目— (1) 連携校への講義の配信、(2) 学生と連携した取組、(3) 地域に貢献した取組—について以下に説明し、最後に現状の課題と今後の展望について述べる。

(1) 連携校への講義の配信: 21 年度及び 22 年度はライブ型講義及び VOD 型講義の学習環境を整えるため、テレビ会議システム及び e-Learning 用のパソコンの導入並びに当該機器の動作試験など、23 年度からの配信に向けて準備をした。その結果、23 年度は計 5 大学、24 年度は計 4 大学、25 年度は計 4 大学へ配信し、本学の特徴ある講義内容を連携校間で共有することができた。なお、連携校からの配信は、本学学生が 23 年度は 4 科目、24 年度は 2 科目、25 年度は 1 科目を受講した。

(2) 学生と連携した取組: 学生主体で行われる七夕フェスティバルにおいて、22 年度からエコナイトを実施しており、写真 1 のとおり、エアコン等電気製品に頼らず涼をとるといったコンセプトでイベントを企画運営し、多くの学生にその取組の意図や内容を伝え、エコ啓発活動につなげることができた。

(3) 地域に貢献した取組: 6 月に県生涯学習センター主催の「京山祭」の中で開催された「日ようび子ども大学」に出展し、高齢者の疑似体験ができる道具を用意した(保健福祉学科教員協力)。多くの親子連れで賑わい、大学と地域の方々との連携を深めた。(写真 2)

現状の課題: ライブ型講義及び VOD 型講義の受講生数については、今後さらに増加させていくという課題があり、現在、教職員が一体となってその課題に取り組んでいる。

今後の展望: 他大学で実施している優れた取組や本学での地域連携の取組・イベント等を、16 大学の連携を深めることにより、さらに発展させていく必要がある。また、本学では総社市との連携事業を継続的に実施しており、地域密着型の協働活動も多く、それら活動を他大学に発信し連携を図ることで、地域連携取組の発展に寄与することが考えられる。

〔事業展開〕

平成 21 年度

平成 21 年 11 月～	双方向コンテンツ委員会をはじめとする、岡山オルガノンに係る各種委員会に参加し、各校との連携を図った。
11 月～12 月	ライブ型遠隔講義における学内環境整備のため、テレビ会議システムを導入し、多地点接続装置等の設置を行った。
平成 22 年 2 月～ 3 月	VOD 型遠隔講義における学内環境整備のため、e-Learning 用のパソコンを導入した。

平成 22 年度

平成 22 年 6 月	「第 1 回 大学連携シンポジウム」に参加し、本学開催のイベント等について周知した。
7 月	本学学生が企画運営する「七夕フェスティバル 2010」において、エコナイトを実施した。
9 月	e-Learning 著作権セミナーにテレビ会議システムを利用して参加した。

平成 23 年度

平成 23 年 4 月～7 月	VOD 遠隔講義「解析学 I」について、連携校への科目提供を実施した。
6 月	「大学連携による地域活性化シンポジウム」において、「日ようび子ども大学」に出展した。
7 月	「七夕フェスティバル 2011」において、エコナイトを実施した。
9 月～2 月	対面及びライブ型遠隔講義「音楽の鑑賞」について、連携校への科目提供を実施した。

平成 24 年度

平成 24 年 4 月～8 月	対面講義「比較文化」, 「造形文化論 II (現代美術)」について、連携校への科目提供を行った。VOD 遠隔講義「解析学 I」について、連携校への科目提供を実施した。
6 月	県生涯学習センター主催の「京山祭」において、「日ようび子ども大学」に出展した。
7 月	「七夕フェスティバル 2012」において、エコナイトを実施した。
9 月～2 月	対面講義「現代の思想」, 「ヨーロッパ文学」, 「造形文化論 I (美学)」, 対面及びライブ型遠隔講義「音楽の鑑賞」について、連携校への科目提供を実施した。

平成 25 年度

平成 25 年 4 月～8 月	VOD 遠隔講義「解析学 I」について、連携校への科目提供を実施し、3 大学延べ 4 名の履修者をみた。また 3 大学の 4 授業科目に延べ 5 名の本学学生を派遣した (デザイン学部 3 名, 情報工学部 1 名)。
6 月	県生涯学習センター主催の「京山祭」において、「日ようび子ども大学」に出展した。(写真 2)
7 月	「七夕フェスティバル 2013」において、エコナイトを実施した。(写真 1) また「おかやまからエコの輪を広げよう」(岡山駅東口広場)に参加した。
9 月～2 月	対面及びライブ型遠隔講義「音楽の鑑賞」について、連携校への科目提供を実施し、2 大学延べ 2 名の履修者をみた。



(写真1) 七夕フェスティバル ライブ風景



(写真2) 日ようび子ども大学 実習風景

3-6 まとめと課題

現在の全学教育は過去10年間の経緯の中で、多様な学部学科の要望に添いつつ、いわば折詰弁当方式のハコ型カリキュラムを形成し、豊富なメニューのもと運営されてきた。

一方で、今日的な課題に対応するため多岐にわたる視点で改善を施す必要も生じてきた。

(1) 教養教育改革の視点からみた全学教育の検討課題

全学教育は発足以来こんにちまでの10年間において、各学部学科のニーズに対応しつつ科目メニューの多様性確保に努めてきた。一方で近年の中教審答申等にみられる学士力養成の観点から、共通教育における教養教育を見直すべく、全国の大学において改革の取組が進められている。本学でも25年度より学長主導のもと「基礎知識とその活用法の修得を通じた思考力及び課題探求力の育成」を通じて知的自律性をもちかつ批判力を発揮できる学士の養成に向け、教養教育の見直しを進めている。

以上に関連する教養教育上の現状及び検討課題は以下のとおり。

- ① 全学共通の必修科目は「フレッシュマン特別講義」及び「基礎・中級英語及び英会話」の、大学教育導入科目ならびに語学（英語6科目）のみであり、偏りがある。
- ② 7つのカテゴリーのうち、5カテゴリーにおいて全学共通必修科目がなく、本学の教育目的にある、「人間・自然・社会の関係性」理解の基礎となる教養について、全学的な取組が不十分であり、これについてコア科目設定の必要がある。
- ③ コアの柄として、より具体的ないし実践的に学修内容の定着を図るものとしてサブ科目を設定し、科目間の関係性がみえる「フォーク型」カリキュラムへの移行が望ましいと考えられる。

(2) 共通スキルの必要性周知の視点からみた全学教育の検討課題

- ④ 今日学問分野を問わず必要とされる、情報や数量を扱うスキル（統計処理など）について、現在開講中の科目を再編し、全学的に初学者向けの必修科目として新たな設定を施す必要がある。
- ⑤ 以上に加えて、語学やスポーツなど広い意味での基礎的コミュニケーション・スキルについて、総合的な視点から適切な科目群の再配置がなされる必要がある。

(3) グローバル化の視点からみた全学教育の検討課題

- ⑥ 英語の基礎教育（「基礎英語」「中級英語」）を充実し、学生のスキルアップや意欲の向上を図るとともに、統一的な指標を得るため TOEIC IP テストの全学的取組を実施し、課題を抽出、改善に備える必要がある。
- ⑦ グローバル・コミュニケーションに活かせる英語力等の涵養のため、「英会話」授業等の充実とともに自学自習方法の工夫改善を総合的に計画、実施する必要がある。

(4) その他の検討課題

- ⑧ 全学教育開講科目数が104科目(クラス数換算で延べ239科目)に上っており、かつ学科卒業要件単位(124～134単位)のうち全学教育が占める単位数が27～43単位に留まることから、学生の履修や時間割編成上の課題を有しており、より効果的な履修に向けて、科目の選択と集中を実施する必要がある。
- ⑨ 全学教育と学部教育の連携のあり方が必ずしも明確ではなく、共通教育の視点から履修モデルの改善に向けて、見直す必要がある。
- ⑩ 地域連携や産学官連携など、学外シーズを生かした社会連携関連の科目を充実し、まとめよく配置する必要がある。
- ⑪ 学修内容の定着や活用をうながすため、双方向型授業などFD活動の推進を計画する必要がある。

4 専門教育における学生の学習支援

4-1 概要

本学は、看護学科、栄養学科、保健福祉学科を擁する保健福祉学部、情報通信工学科、情報システム工学科、スポーツシステム工学科を擁する情報工学部、デザイン工学科と造形デザイン学科を擁するデザイン学部というユニークな学部構成になっている。それぞれの学部において平成5年の開学以来、各専門領域における有能な指導的な立場で活躍する人材を県内外に送り出してきた。日進月歩の昨今の科学技術の進歩や社会のニーズ変化に対応すべく、各学部、学科では科目の新設、統廃合、カリキュラム編成の工夫等々によって果敢に対応している現状である。しかし、社会の大学に対する期待は増々高まりつつあり、高い教養に裏付けられた様々な課題解決に結びつくような高度の専門性を有する即戦力人材が求められている。このような社会の要求に対応するためには上記の従来教育手法の改善、改良のみでは十分と言えない状況である。本年度は全学教育研究機構において共通教育に系統的な教養教育を導入すべく取り組んできた。それは、各学部における専門教育を従来以上に促進させるための取り組みの一つである。また、専門教育については、本年度はディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを策定することで各学部における教育の道程、目標等を明確にするとともに、その過程で各学部、学科が目指すさらに高い専門性とそれぞれの分野における課題解決能力育成及び岡山県立大学ならではのユニークな教育と人材育成について、将来展望を持つに至っている状況である。

4-2 保健福祉学部

4-2-1 看護学科

看護学科では24年度に保健師養成課程の大学院化を行ったが、それに伴い学部教育のカリキュラムの改正を実施した。また、備中県民局「地域における保健医療従事者育成支援事業」を受託し、3年次生全員と4年次生有志が離島の保健医療・看護の現状と課題について住民とともに地域の健康課題を明らかにし、課題解決に向けた提案を行った。なお、カリキュラム改正に対する継続的評価を行うために、新たに看護学科全教員による学生の看護実践能力向上に向けたシステムづくりを開始した。特に、専門知識・技術力・判断力を養うために倫理性、フィジカルアセスメント能力を重視し、学生個々の評価が適切にできる評価項目と基準作りに着手した。また、学生自身が自己の課題を見出し課題解決するプ

ロセスが可視化できるポートフォリオの導入に向けて準備を行った。

また、グローバル人材育成に向けて、大学院前期課程の国際保健看護論におけるネパールの医師の英語による講義を1年次生も聴講した。さらに災害看護論ではAMDAスタッフによる講義を受け、総社市/AMDAとのトライアングル協定による災害訓練にも3年次生有志が参加した。

留学生の受け入れは、留学生としては専門知識や技術の修得、本学学生としては留学生からの異文化の新鮮なインパクトの享受や国際交流が図られるなど、双方の学生に大変有意義なことであり、国際化に対応する人材の育成を進めていく上でも重要である。25年度は看護学科では、国際交流協定を締結している韓国又松（ウソン）大学から後期に2名の交換留学生を受け入れたが、日本の生活に不慣れな留学生が、いち早く日本の生活・文化に慣れ、学習・研究活動に励むことができるようにするため、学生の中から学業や生活の相談相手を選定し、留学生のサポートを行うチューター制度を設けるなど学業・生活面の両面において支援を行った。また、授業料減免制度や奨学金募集等の情報提供及び活用面の支援などを行った。

国家試験対策として、毎年学生の自主的な運営による国家試験模試の支援を行うとともに、学生からの要望の多い病態学に関する講義を行った。模試結果は教員も共有し個別指導等に活用した。

4-2-2 栄養学科

栄養学科では、平成20年に本学と中国南昌大学ならびに韓国又松大学校との間で締結したトライアングル協定に基づき、3大学から学生が5名ずつ参加し、各大学を巡回して食品科学に関する研鑽を積む日中韓コンソーシアムを24年度から実施している。平成25年度は南昌大学で実施され、本学からは1年次生2名、2年次生2名、4年次生1名の計5名が参加し、中国の食文化に関する講義、中国の発酵食品や加工食品製造に関する演習、また韓国の食文化に関する講義を英語で受講した。また南昌の食品会社の工場見学を行った。学生への経済的支援として、国際交流推進助成費より渡航費の1割が補助された。

平成25年度から新規に開講されたスポーツ栄養学は、2年次生の受講生が多く、熱心に聴講していた。オープンキャンパスにおいてもスポーツ栄養学を学びたいとの声も多く聞かれ、受験生確保において効果があったと考えられた。

国家試験対策としては例年どおり、栄養学科国試対策委員が中心となり、校内模試を年2回（6月、9月）実施し、さらに業者模試（6回／年）を斡旋した。各模試における成績を学生ごとに集計し、その推移を解析することにより学習の効果を分かりやすくした。これらの資料を卒論担当教員ならびに国試対策委員が学生の個人指導に活用した。

4-2-3 保健福祉学科

保健福祉学科では、平成25年度より社会福祉学専攻（定員40名）と子ども学専攻（定員20名）の2専攻体制となった。それに伴ってカリキュラムの大幅な改正を実施した。

社会福祉学専攻では、新カリキュラムとして医療的ケアに関する講義と演習を開講した。また、平成24年度まで非常勤講師で担当していた「就労支援制度」は、学科の教員が担当することにより内容を充実させ、実践力を備え新しい福祉ニーズに対応できる専門職の育成を図った。平成26年度からはソーシャルワーク演習と実習指導の時間数増加を計画しており、その準備を行った。また、グローバル人材の育成を目指す多文化介護論の授業の一部として、25年度は国際交流推進事業（多文化介護・社会福祉交流プロジェクト）による海外研修（韓国）を実施し、3名の学生が参加した。ソウル市立西部老人専門療養センター、ウリ麻浦福祉館、社会福祉法人幸福創造の施設見学を行い、ソウル神学大学校では、社会福祉学科の学生たちと日韓高齢者福祉に関する意見交換など活発な交流が行われた。

国家試験対策としては、社会福祉士国家試験及び介護福祉士国家試験対策を行った。4月の学年オリエンテーション時には、社会福祉士国家試験委員及び介護福祉士国家試験委員が全学年を対象に国家試験の概要と対策について説明し、模擬試験や社会福祉士の国家試験に合格した卒業生による国家試験対策講演会を開催するなどの対策を実施した。介護福祉士国家試験対策としては、介護福祉士国試対策 e-learning システムを活用した学習環境を整えた。

子ども学専攻では、幼保一体化に対応し、保育士と同時に幼稚園教諭一種免許を取得するための新カリキュラムを実施した。新規に開講した「子ども臨床基礎論」の授業などで、1年次から外部施設見学や現場実践者の特別講義を取り入れ、実践的な指導・支援の力量の涵養を図った。教職課程に必須の「履修カルテ」について、より充実した学生指導のためにコンピュータシステムを導入した。

4-3 情報工学部

4-3-1 情報通信工学科

情報通信工学科の専門教育における学習支援は、推薦入試合格者に対しては第1章 2-4で述べた入学前教育から開始される。その後、一般入試合格者を含め、入学式後の新入生オリエンテーションを通じ、計画的な受講と学習を促す。1年次前期のフレッシュマン・セミナーでは、1泊2日の学外オリエンテーションを含め、7～8人のグループで活動を行う。活動内容は、コミュニケーション能力を陶冶する目的でのテーマ別調査・研究と、プレゼンテーションである。このときのグループ編成は、そのままアドバイザーグループとなり、卒業研究での研究室配属決定まで、学生はフレッシュマン・セミナー活動での教員に対して学生生活上の相談を受けることができる。また、オフィスアワーあるいは授業の空き時間を利用して、全ての学科教員に自由に相談できるようにしている。各学生の成績は、学科教務専門委員が管理し、成績不振者に対して注意・指導を行っている。卒業研究を行う研究室配属は、通常3年次11月と4年次4月の2回に分け、希望をもとに成績を考慮して行う。

4-3-2 情報システム工学科

情報システム工学科での専門教育における学習支援は、先ず推薦入試に関しては第1章 2-4で述べた入学前教育がある。入学生一般については新入生オリエンテーションを通じ、計画的な受講と学習を促す。1年次前期にフレッシュマン・セミナーを設け、ここでは新入生全員に高校での数学・物理について徹底的なリメディアル教育を施す。またアドバイザーグループを編成し、それぞれ担当の教員を配置し、学生は3年次になるまで、これら教員に対して学生生活上の相談を受けることができる。各学生の成績は、学科教務専門委員が管理し、成績不振者に対して、呼び出しを行い注意・指導する。卒業研究を行う研究室配属は卒業研究有資格者に対し、研究室訪問での面談などを通じて、本人の適性や興味などを勘案して研究室配属を行う。

4-3-3 スポーツシステム工学科

スポーツシステム工学科における学習支援は、先ず推薦選抜合格者に関しては第1章 2-4で述べた入学前教育がある。入学生全員を対象に新入生オリエンテーションを通じて計画的な受講と学習を促す。1年次前期のフレッシュマン・セミナーでは、学科の人材育成像を

説明するとともに、高校物理の力学をテーマに据えて高等学校で獲得した数学と物理の知識を融合的に使いこなす方法の体験、人間情報工学系テーマの発掘体験等により専門教育に対する動機付けを行っている。アドバイザーグループには担当教員を配置し、学生は3年次になるまで、これら教員から学生生活上の相談を受けることができる。また、学年単位で学期はじめに履修オリエンテーションに機会を設けて履修指導を行っている。学生の成績は、学科長と教務専門委員が連携して管理を行い、成績不振者に対する指導を行っている。卒業研究における研究室配属は、卒業研究着手有資格者を対象に研究室紹介や研究室訪問の機会を設けて研究テーマの紹介を行い、本人の適性や興味・関心などを勘案して配属を行っている。

4-4 デザイン学部

4-4-1 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

(1) はじめに

1) 「仕事をデザイン創造する産学官連携人財育成教育」プログラム全体概要

「仕事をデザイン創造する産学官連携人財育成教育」プログラムは、産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業（文部科学省）選定取組である。

本取組は、中四国18大学の連携取組「産業界等との連携による中国・四国人材育成事業」におけるテーマ3「フィールド系教育の改善・充実」（14校参加）内のサブグループ3テーマ「産業界のニーズに対応した自律的な技術者養成プログラム」に位置づけられ、サブグループ3テーマは、本学、岡山理科大学、山口東京理科大学の3校の協同取組である。

取組期間は平成24年度から26年度までの3年間の予定で、補助経費の上限は本年度12,000千円である。本取組では上限額を申請し、満額が交付された。

2) 取組の目的

今日、大学の実学的デザイン教育は基礎教育における幅広い知識の修得、造形スキルの鍛錬及び社会提案に向けた企画提案力の涵養から構成されると考えられる。「企画提案力」は言い換えれば「(商品開発等)仕事を創造する力」であり、学生における課題発見・解決力やマネジメント力等の涵養が求められているが、本学では十分に育っていない。

一方で、地域産業界の側では、未だに造形意匠を扱うのがデザイナーであるという認識が強く残っており、「自律心をもって」仕事を創造する総合力としてのデザイン力についての社会的認知は十分ではない。

そのため、地域において仕事の創発に意欲がある企業が多い中で、学生が「デザインマネジメント」の考えと巡り会う機会が少ないのが実情である。

そこで、以上のギャップを埋めるため、本取組ではサテライト・ラボにおける連携的な企画提案取組等を活用し、産学官連携教育を拡充させていく。



■デザイナーの巣づくりネットワーク：学生が授業での学習及び産学官連携活動を通して、主体的に「仕事をデザイン創造」する力を向上させることを目的とし、それを支援する組織と場を設定している。

(2) 連携会議等の経過

1) 中国・四国地域連携会議

- ・9/24 岡山市 「産業界ニーズに対応した人材育成に関する研修会」

「若者の社会人基礎力は、いつ、どのように鍛えられるのか？」というテーマに基づき、若者の社会人基礎力がいつ、どのように鍛えられるのかについて、大学側と企業側がそれぞれどのように考えているのか、ワークを通じて明らかにし、相互不理解（ミスマッチ）の解消を図るとともに、今後の社会人基礎力の育成について、対応策を探った。人材育成の強化を図るため、本学からも教職員計3名が参加し、理解を深めた。

- ・9/24 岡山市 「中国・四国地域連携会議 第1回会議」

島根大学肥後副学長の司会で議事が進行された。(1) アンケート調査の概要について (2) 人材育成フォーラムの企画概要と運営協力について (3) テーマ別分科会 (10月24日開催)の事前調整について討議された。

- ・10/23 広島市 「中国・四国地域連携会議 第2回会議」

連携会議では、公益社団法人中国地方総合研究センター・地域経済研究部長・主任研究員の本郷満氏による「大学・短大生の就業能力形成に関するアンケート」の結果報告を中心に、報告があった。この報告によると、大学及び経済界において、卒業生及び新入社員に本来備わっているべき社会人としての基礎能力について、送る側と受ける側でのミスマッチがあることが仮報告された。この最終報告は平成26年2月19日に高松で開催された連携会議で報告された。

引き続き、人材育成フォーラムが開催され、「働き続けるために～企業等に望むこと、学生に望むこと」というテーマで各大学より学生2名、経済界からも9名が参加し、9テーブルを囲んで各人が予め考えてきた「キーワード」を発表し、セッションが行われ、双方の考え方を深めることができた。

- ・10/24 広島市 「中国・四国地域連携会議 分科会」

第1分科会、第2分科会、第3分科会に分かれ、それぞれのテーマ（第3：フィールド系教育の改善・充実）に沿って代表による報告が行われた。

- ・2/19 高松市 「中国・四国地域連携会議 第3回会議」

今年度のまとめ、そして次年度の方向性について全体会議と分科会が開催された。

2) サブグループ3 連携会議

・7/30 山口東京理科大学 「第3回（平成25年度第1回）サブグループ3会議」

グループ会議の前に山口東京理科大学の施設を見学し、連携3校で共同使用が可能な設備の説明を受けた。また、「学生フォーミュラー」と呼ばれる自動車の制作を行っている貴島研究室の「ものづくり工房」の紹介があった。

グループ会議は岡山理科大学の松浦准教授が司会となり、(1) サブグループ3としての平成25年度活動内容と幹事校経費の使途について (2) 連携項目について (3) 評価基準についてなどが討議された。

・12/25 広島市 マツダ株式会社 「合同企業見学会」山口東京理科大学の貴島教授のご手配と、マツダ株式会社のご協力のもとに、連携3大学によるマツダ株式会社の宇品工場、及びデザインセンターの見学会が開催された。本学からは教員3名・学生12名の計15名が参加、山口東京理科大学からは計17名、岡山理科大学からは計10名、合計42名が最先端の自動車組立工場などの見学を行い、大変有意義な見学会となった。

・2/18 岡山理科大学 「第4回（平成25年度第2回）サブグループ3会議」

(1) 今年度の実績について (2) 来年度の計画について (3) その他「評価シートの作成」等について討議された。

グループ会議の他に、合同授業参観として岡山理科大学工学部知能機械工学科3年次実践科目の「機械創造工学Ⅱ」で、ロボコン授業を参観した。この授業には教員のほか、各大学の学生が参加し、発表の様子を視察した。産業界の方2名にロボコンの審査・講評と意見をいただいた。）

3) サブグループ3 連携シンポジウム

・11/30 「自律的な技術者養成に向けて」（山口東京理科大学主催）

東京理科大学特命教授（元 経済産業省 地域経済産業審議官）塚本 修様による基調講演「わが国の成長戦略と地域の活性化～時代が求める産業人材とは」から始まり、午前終了後の休憩時間には、3大学による取組紹介のポスター展示が催された。

午後からは、3大学による活動状況の報告、その後は山口東京理科大学の学生による2つのプロジェクトから学生代表による取組発表があった。① 山口東京理科大学「自動車開発プロジェクト」② 山口東京理科大学「電力システム開発プロジェクト」発表後、一般企業の方による講評を受け、閉会とした。

(3) 本学の取組概要

1) 産学官連携事業（SPU活動取り組み／産学官連携授業）

本年度実施の産学官連携事業は、プログラム内容がバラエティに富むことに加え、県内だけでなく中国・四国地方広域（愛媛、鳥取、高知、徳島）にわたる活動となった。各プログラムの取組内容は以下のとおりである。

① SPU活動取り組みの実施（9件）

*SPU (Small Project Unit) 活動とは：学生が学外連携先よりテーマを請け、そこから課題発見や解決策を探り企画提案活動を実施し評価を得ることで、「仕事をデザイン創造する力」を高めるプログラム

・テキスタイル産業界との連携による教育プログラム（モデル事業）

連 携 先：四国タオル工業組合

実施期間：平成25年10月7日～平成26年2月28日

担当教員：難波久美子、島田清徳、樫尾聡美

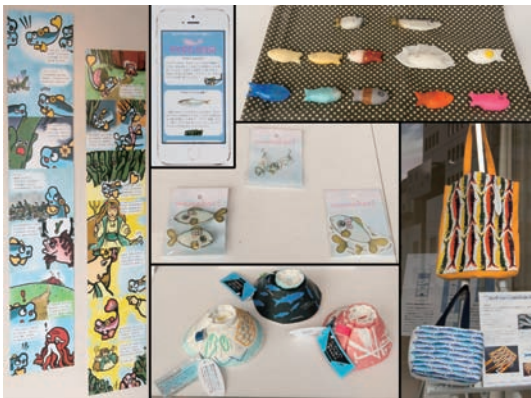
・おかやまの観光グッズ観光ポスタープロジェクト企画提案事業（モデル事業）

連 携 先：公益社団法人 岡山観光コンベンション協会、岡山後楽園

実施期間：平成25年6月4日～平成26年1月22日

担当教員：吉原直彦、西田麻希子

- ・造形ワークショップ企画提案事業
連 携 先：岡山美術館
実施期間：平成25年7月11日～8月19日
担当教員：関崎 哲
- ・岡山まちの夢プロジェクト
連 携 先：潮田真有子
実施期間：平成25年10月19日～10月20日& 平成26年2月15日
担当教員：金丸敏彦
- ・国吉ミュージアムグッズプロジェクト企画展示「そこにクニヨシ展」
連 携 先：岡山観光コンベンション協会, 福武教育文化振興財団
実施期間：平成25年5月7日～5月12日
担当教員：吉原直彦
- ・株式会社キャットアイとの産学共同事業
連 携 先：株式会社キャットアイ
実施期間：平成25年4月12日～7月26日
担当教員：三原鉄平
- ・ママカリ消費促進を目的としたコンテンツの開発
連 携 先：岡ビル市場 伊藤鮮魚店代表 林宗男氏
実施期間：平成25年11月13日～平成26年1月22日
担当教員：中西俊介
- ・LED光源を利用した照明機器のデザイン開発
連 携 先：あおや和紙工房
実施期間：平成25年10月4日～平成26年1月10日
担当教員：森下眞行
- ・そうじゃ水辺の楽校のサインデザイン提案
連 携 先：そうじゃ水辺の楽校, 総社市
実施期間：平成25年11月13日～平成26年1月29日
担当教員：野宮謙吾



ママカリの消費促進を目的にしたコンテンツ



おかやまの観光グッズ例

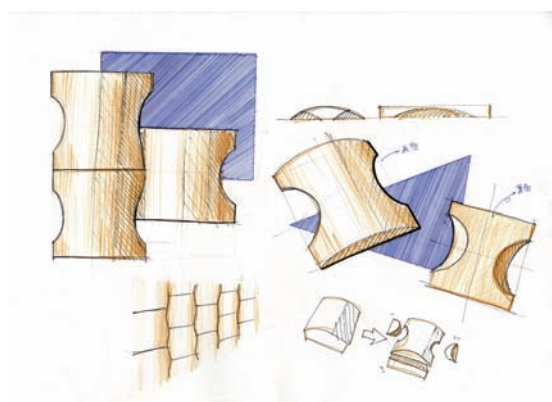
②産学官連携授業の実施（9件）

- ・ハーバード大学との協働スタジオによる倉敷市活性化事業
連 携 先：ハーバード大学デザイン大学院(米国マサチューセッツ州)
実施期間：平成26年2月27日～平成26年3月5日
担当教員：助川たかね

- ・木造建築の設計と施工（モデル事業）
連 携 先：あらい建設 洗井健一氏
実施期間：平成25年10月1日～平成26年1月28日
担当教員：津田勢太
- ・産学連携授業「ミロクテクノウッド+ビッグウィル」（モデル事業）
連 携 先：1) 株式会社 ミロクテクノウッド（高知県南国市）
2) 株式会社ビッグウィル（徳島県三好郡東みよし町）
実施期間：平成25年5月15日～12月1日
担当教員：森下眞行
- ・竹尾ペーパー見本市見学会，及び特別授業の実施
連 携 先：株式会社竹尾
実施期間：平成25年6月24日～25日
担当教員：関崎 哲
- ・製鉄工場見学と建築への応用
連 携 先：新日鐵住金八幡製鉄所
実施期間：平成25年9月24日～9月24日
担当教員：岩本弘光
- ・特別講義「木材に関する知識と工作技能について」
連 携 先：川月清志（家具デザイナー・非常勤講師）
実施期間：平成25年7月23日5～6時限
担当教員：森下眞行
- ・グラフィックデザインの現場
連 携 先：株式会社矢野デザイン事務所
実施期間：平成25年7月3日・10日
担当教員：野宮謙吾
- ・岡山のモノ作り視察と現場の人々との交流
連 携 先：株式会社テオリ
実施期間：平成25年11月14日～11月14日
担当教員：山下明美
- ・県産木材活用ニーズに対応した新技術による木造建築の可能性
連 携 先：稲山正弘（東京大学教授）ほか5名
実施期間：平成25年11月7日～11月7日
担当教員：岩本弘光



柿渋塗装した木壁と銅版屋根の設置



最先端の加工技術による竹製タイルの設計案

2) 初年次キャリア教育の拡充

■キャリアゼミナール(電子カルテシステムの活用プログラム) 取り組み

キャリアゼミナールは、デザインを学ぶ学生の社会的・職業的自立の促進を目的とした初年次教育プログラムである。受講生は授業初回時に、デザイン学部就業支援システム(電子カルテシステム)にプロフィールや現時点でのキャリアプラン等の入力及び登録を行う。次に、学部内の複数の教員と直接対話(Walk to Talk!活動)することにより、自己の認識と実際とのギャップを確認しながら多角的に自身のキャリアプランを検討し、デザイン学部就業支援システムのアップデートを行う。授業の評価は、Walk to Talk!活動の回数やシステム更新回数、また自身のキャリアプランに関するレポートをもとに行う。

Walk to Talk!活動は、電子カルテシステムを活用した、教員との柔軟なキャリア育成プログラムである。教員は、自分の時間が取れる時に「Walk to Talk!」サインを研究室の扉に掲げ、面識のない学生も訪ねやすいよう意思表示を行う。学生はそのサインを確認して教員を訪ね、「Walk to Talk!」パスポートを提示することで、前置きなく相談することができる。その時に既に入力してある「電子カルテ」を確認しながら話すことで、自分の作品や志向等について簡潔に共有でき、対話や対話を通じた気づきなどにより多くの時間を割くことが可能となる。デザイン学部は、様々な専門や経験を持った教員によって構成されているが、これまで授業を除けば、学生は所属コース教員以外との接点は限られていた。

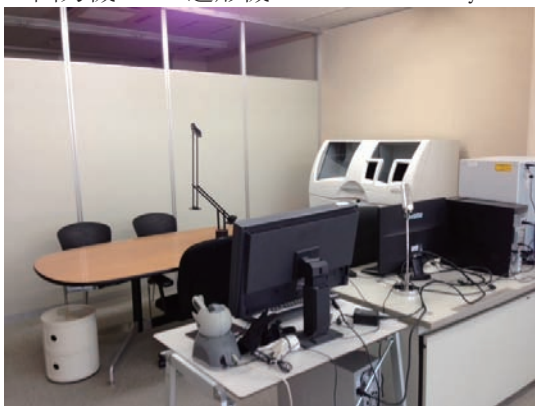
このような取組を行うことで、ゼミやコースの担当教員だけでなく、組織全体で学生の教育に取り組むことができる。本年度において1年次生の履修人数は77名であった。(昨年度は75名)

3) サテライト・ラボeggの活用(産学官連携によるものづくり教育プログラムの開発等)

サテライト・ラボ eggは、岡山市中心部に位置しており(岡山市北区蕃山町1-20岡山県開発公社ビル1F)、開設の趣旨は、学生自らが企業等連携する地域の方々に向けて企画提案を行い交流することにある。その形態は3Dプリンタによる各種モデル制作の実演や、プロダクト・情報・建築・グラフィック・ITコンテンツ・セラミック・テキスタイルなどの分野を通じた実社会へのデザイン提案展示など多様である。以上について学生が連携する方々と交流を深め、将来に向かって「仕事を上流からデザイン創造できる人財」となるべく、企画提案イベント・ワークショップに臨み、その評価に基づいて新たな課題発見や将来展望ができるようながす教育上のねらいをもっている。

3Dプリンタ及び周辺機器の使用は以下のとおり。

- ・入力ソフト(ソリッド型): Free Form Modeling (Omini 社)
- ・入力ソフト(サーフェース型): Rhinoceros 4.0 (AppliCraft 社)
- ・3D編集ソフト: 3D Pixform Pro II (Roland 社)
- ・非接触型3Dスキャナ: LPX-R600R (Roland 社)
- ・データ変換: STLデータ修正ソフト (Materialise 社)
- ・出力機: 3D造形機ZPrinter 350 System (3D Systems/ZCorp 社製)



サテライト・ラボeggの室内



3D造形機ZPrinter 350 System

サテライト・ラボegg取り組み紹介

① 3Dプリンタを活用したものづくりワークショップ

県内外より3Dプリンタに精通した学外特別講師を招き、ものづくりワークショップを実施した。バレンタインデーのチョコレート制作をテーマに、チョコレートの造形（自分の顔など）クレイを使って制作、次にその原型を3Dスキャナーでデータ化し、3Dソフトを利用して、3Dプリンタに出力出来るデータに修正の後、出力、これを原型にして、食品用シリコンで型を作り、最後にチョコレートを流し込んで整形した。



サテライト・ラボ egg でのワークショップ



サテライト・ラボ egg でのワークショップ

② 産学官連携事業の成果等発表

サテライト・ラボeggは、ウインドウスペースを活用したギャラリー機能を有している。産学官連携事業の成果が現れてきた12月以降において、本ギャラリーにて活動紹介や成果作品展示を継続的に行った。展示スケジュール及び内容は以下のとおりである。

- ・12月9日～20日 株式会社キャットアイとの産学共同実習
- ・1月9日～15日 SPU活動（スタンプ作りのワークショップ）報告
- ・1月22日～29日 産学連携授業成果の展示（ミロクテクノウッド+ビッグウィル）
- ・2月4日～13日 「そうじゃ水辺の楽校」のサインデザイン提案／「ママカリ消費促進を目的にしたコンテンツの開発」展示
- ・2月16日～21日 「手作りタンブラー」ワークショップ
- ・3月7日～14日 おかやまの観光デザインプロジェクト
- ・3月18日～23日 倉敷市児島地区ジーンズストリートの活性化



サイクルコンピュータの提案成果



サテライト・ラボeggの展示風景（外観）

(4) まとめ

「仕事をデザイン創造する産学官連携人財育成教育」プログラムは本年度をもって2年目が終了する。本学が当初計画した活動を概ね計画どおりに実施することができたが、下記に関しては十分とはいえ課題が残されている。

- ・ サテライト・ラボeggの活用
- ・ 地域に向けた本活動の情報発信
- ・ 地域人材育成の観点による学生の成長確認
- ・ 連携校との共同事業開発

これらについては具体的な改善策を検討し、最終年度となる次年度（26年度）がさらに充実した取組となるよう図りたい。

4-4-2 デザイン工学科

デザイン工学科では、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し、持続発展が可能な社会実現のため、デザインの専門力とマネジメント能力により、地域社会や産業界に貢献できるデザイナーや建築家の育成を目指し、専門教育における学生の学習支援として学生に企画提案力をつけさせる目的で、様々な教育プログラムを提供した。これは、4-4-1 の文部科学省選定の取組である「仕事をデザイン創造する産学官連携人財育成教育」のプログラムの一環として実施したものである。また、教育力向上支援事業として「三次元造形システムを活用したモノづくり造形教育プログラムの開発」「社会連携による建築まちづくり教育の実践」「新しいエコエネルギーのデザイン教育」「ものづくり工房運営についての調査研究」「専門英語を通して学生の英語力を活性化させる」の5プログラムを実施した。さらに、インターシップ、学外実習により、デザイン関連企業や地域関連のデザインプロジェクトに取り組み、実社会におけるデザインワークなど体験的に理解を深めた。

4-4-3 造形デザイン学科

造形デザイン学科では、デザインによって地域特性を考慮した問題及びグローバルな視点で課題解決に取り組み、人間・社会・自然の関係性に十分配慮し地域社会や国際社会に貢献できるデザイナー及び造形のスペシャリストの育成を目指し、専門教育における学生の学習支援として学生に企画提案力をつけさせる目的で、様々な教育プログラムを提供した。これは、4-4-1 の文部科学省選定の取組である「仕事をデザイン創造する産学官連携人財育成教育」のプログラムの一環として実施したものである。また、教育力向上支援事業として「クラフト系デザインにおける高大連携プログラム」「ITコンテンツデザインコースにおけるプロジェクトを用いた教育プログラムの実施」「課題発見能力の涵養に向けた双方向ケース教育推進を支えるシステムの設計と実践」の3プログラムを実施した。さらに、学外演習により、デザイン関連企業や地域関連のデザインプロジェクトに取り組み、実社会におけるデザインワークなど体験的に理解を深めた。

4-5 まとめと課題

4-5-1 保健福祉学部

保健福祉学部では、グローバル人材育成をめざして、中国・韓国の連携協定先の大学を中心とした学生ならびに担当教員による交流を積極的に行った。また、幼保一体化や栄養教諭の再教育などにも柔軟に対応し、これらはカリキュラム改革にも反映されたが、今後少子化による受験生の減少が見込まれる中、広報活動を充実するとともに、さらなる地域

貢献に向けて、地域との連携を目に見える形で教育に取り入れていくことも課題となる。

4-5-2 情報工学部

情報工学部においては、3学科の方針は若干異なるものの、基礎学力の補強を軸に学生支援を行う点では一致しているといえよう。課題としては、学科の特徴と教育目的を、広報を通じてより周知に努めることと、来年度から開設される大学教育開発センター（仮称）と十分な連携をとり、専門教育に対するより良い支援を検討する必要がある。

4-5-3 デザイン学部

デザイン学部では、特に「仕事をデザイン創造する産学官連携人財育成教育」プログラム、産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業（文部科学省）、により学生に企画提案力をつけさせる目的で各種教育プログラムを積極的に実施した。今後、今回の試みによる教育効果の評価検討が課題である。

5 附属図書館

5-1 概要

本学図書館は大学設置基準第38条に示す大学附属図書館として、学部の種類、規模等に応じ、図書、学術雑誌、視聴覚資料等の教育研究上必要な専門的資料を系統的に備えるべく努力してきた。またグローバル化の中で学生に必要とされる広い視野と教養を涵養すべく、一般教養図書についても各学部の教員の視点で選書し充実を図っている。そして近年の学術情報や検索システムの電子化を視野に入れながら多様な手法で積極的に、学生、教員、地域に向けたサービスの維持・向上を目指し取り組みを進めている。

運営については、各学科選出の図書館専門委員で構成する図書館専門委員会を通して、附属図書館と各学科の連携による図書館活動活性化を図るのみならず、副館長2名を配置し、各学部からの専門的ニーズが大学全体として効果的に図書館運営指針に反映される様、体制を整えている。また副館長はスペースの制約による蔵書収容限界への対応策として、除籍候補図書を選定し新規購入図書とのバランスを図る役割や、本学授業科目「情報リテラシー」担当を通して学生の学術情報の電子化への対応を行っている。

5-2 活動

(1) 学生を対象とした図書館利用教育

図書館ガイダンスの実績は22件で、内訳は次のとおりである。

分 類	件数	参加学生数
新入生ガイダンス	11	354名
学生及び地域の小学生、高校生へのガイダンス	11	339名

※内容：図書館の案内及びOPAC（蔵書検索）の利用方法等

(2) データベース利用講習

分 類	件数	参加学生数
データベースの使い方※	7	217名
サイエンス・ダイレクト講習会※※	1	16名

※学生・履修生対象

対象データベースは医中誌 Web と CiNii, PubMed であった。

医中誌 Web : 医学中央雑誌刊行会が提供する保健・医療・福祉系のデータベース

CiNii : 国立情報学研究所が運営する学術論文や図書・雑誌などデータベース

PubMed : 米国医学図書館が提供する医学系のデータベース

※※学生・教員対象

サイエンス・ダイレクト : エルビージャパン社の電子ジャーナルでヘルスサイエンスなどの洋雑誌
約 900 種が閲覧できるデータベース

(3) 公衆無線 LAN サービス

岡山県公衆無線 LAN サービス「おかやまモバイル SPOT」を設置し、館内で高速なインターネットサービスが無料で利用できるよう環境整備を行った。

(4) 機関リポジトリへの対応

本学の研究成果を学内外の方に広く活用してもらうため、国立情報学研究所の提供する「JAIRO Cloud」を利用し、岡山県立大学学術情報リポジトリを立ち上げた。

(5) 認定看護師教育課程（糖尿病看護分野）への対応

認定看護師教育課程の学生を対象としたガイダンス及び医中誌 Web の検索指導を行った。

5-3 まとめと課題

図書館の利用形態等の変化に対応して、次の取組を行う。

- ・地域貢献活動を通して、学外者への認知度と利用を促進させる。
- ・研究閲覧室の整備を行い、グループ学習等の利用形態の拡充を図る。
- ・学術コンテンツの電子化など、IT 化を推進する。
- ・新入生図書館ガイダンスの徹底、教員・職員そして学生との連携による選書、授業での活用等により、学生の利用促進を図る。
- ・配架計画や除籍等により、蔵書収容限界への対応を図る。

6 学生の生活支援

6-1 概要

学生の意見等を大学運営に反映させるためキャンパス・マネージャーの委嘱や精神的な悩みを抱えた学生にカウンセラーが相談に応じる学生相談室の設置のほか、学生の組織である学友会や部・サークルの活動を支援した。

6-2 キャンパス・マネージャーの活動

本学には、広く学生の自主的建設的な意見を大学運営に反映させるため、キャンパス・マネージャー（学生生活企画提言委員）の制度が設けられており、平成 25 年度は 19 名の学生が学長から委嘱されている。学生生活全般に亘る企画、提言を行っており、25 年度は、学内点検ツアーにおける危険箇所等の改善提案や自転車等安全運転マナーの向上に対する取組などにおいて、学生の視点からの提案が行われ、学生生活の充実に向けた対応が図られた。

[キャンパス・マネージャーの活動状況]

名 称	日時・場所	出席者	主 な 内 容
辞令交付式	H25. 7. 17 17:40～17:50 本部棟2階 中会議室	キャンパス・マネージャー12名 事務局3名	○キャンパス・マネージャーの辞令交付 ○事務局からの活動内容説明
第1回打合せ 会議	H25. 7. 17 17:50～18:10 本部棟2階 中会議室	キャンパス・マネージャー12名 事務局2名	○平成24年度キャンパス・マネージャーの活動実績報告 ○平成25年度キャンパス・マネージャーの活動計画
学内点検ツアー	H25. 7. 17 18:10～18:40 (大学構内)	キャンパス・マネージャー12名 事務局2名	○学内安全点検ツアーの実施 [点検ツアーによる主な改善事項] ・学生会館2階ラウンジのゴミ箱の設置など
第2回打合せ 会議	H25. 10. 21 12:00～12:40 本部棟2階 中会議室	キャンパス・マネージャー14名 事務局2名	○学内点検ツアーでの意見・要望に対する回答 ○今年度の取組内容の決定
第3回打合せ 会議	H25. 11. 27 12:00～12:40 本部棟2階 中会議室	キャンパス・マネージャー14名 事務局2名	○後援会からの依頼により、卒業記念品案について検討（候補4品を決定） ○自転車等安全運転マナーの向上に関する取組 ※講演会の開催（H26. 1. 23） 講師：総社警察署 交通課長 参加者：学部生43名

6-3 学生相談室の活動

(1) 相談体制

学生相談室は平成6年5月に開設された。開設当初は本部棟1階事務室横にあったが、平成8年からは図書館2階個人閲覧室の一室、平成24年度からは学部共通棟（西）へ移動し、学生がより相談しやすい環境を整えた。

相談室のスタッフは平成6年度から9年度は学内カウンセラー2名（臨床心理士）により週2日、平成10年度からは臨床心理を専門とする学内カウンセラー1名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）1名が新たに配置され、4名体制で週4日開室していた。

平成11～12年度は学内カウンセラー2名と学外嘱託カウンセラー1名の週3日、平成13

～16年度は学内カウンセラー（臨床心理士，心理学専門）3名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）1名の4名で週4日開室していた。

平成17年度からは学内カウンセラー（臨床心理士，心理学専門）3名と学外嘱託カウンセラー（臨床心理士）3名の計6名体制となり，月～金曜日まで毎日開室できる体制となった（ただし，休業期間中を除く）。平成25年度の開室時間は週24～26時間である。

〔平成25年度 開室時間と運営スタッフ〕

曜日	時間	氏名	備考
	相談室長	田内 雅規	学生部長
	学校医（精神科）	中田 謙二	高梁病院精神科医
月	16:30～18:30	京林 由季子	保健福祉学部准教授
火	10:00～14:00	津川 美智子	学外カウンセラー
	15:30～17:30※	迫 明仁	情報工学部教授
水	9:30～13:30	斉藤 弘美	学外カウンセラー
	13:30～18:30	疋田 基道	学外カウンセラー
木	9:00～12:00	疋田 基道	学外カウンセラー
金	12:00～16:00	津川 美智子	学外カウンセラー
	17:00～19:00	谷口 敏代	保健福祉学部教授

※第1週,第2週のみ

平成20年度から，精神科医である中田謙二先生が学校医として加わり，学生への面談や相談室カウンセラーへのコンサルテーションを行っており，学生相談室長（学生部長）を含め，計8名のスタッフで構成され，この他に保健室及び学生支援班と連携を図りながら運営している。

（2）相談室の取組

月～金曜日の開室時間内のカウンセリング以外に様々な取組を行っている。

入学式当日には，学生相談室（愛称：ほっとルーム）のパンフレットを配布し，カウンセラーの自己紹介や学生相談室のPRを行い，気軽に来室できる雰囲気作りを行っている。同時に「ちらっとほっとルームキャンペーン」を実施した。また，相談室会議やカンファレンスを年3回開催した。

〔相談室の取組〕

前期	概要
4月	入学式オリエンテーション （ほっとルームパンフレット配布及び掲示）
	こころの健康調査 （ほっとルームカード配布）
	ちらっとほっとルームキャンペーン
6月	相談室会議・カンファレンス
後期	概要
11月	相談室会議・カンファレンス
2月	相談室会議・カンファレンス

また、各学部教員からの要請やカウンセラーが重要ケースと判断した場合、相談室長や複数のカウンセラー、関係する学部長や教員で対応について協議することとし、学生への緊急対応及び危機介入時には岡山県精神保健福祉センターに相談・協力を得ることとしている。

平成 23 年度からは、平成 22 年度に構築した「こころの健康管理システム」(別図参照)を活用し、「こころの健康調査 (UPI: University Personality Inventory)」の結果や学生指導における事例等の情報管理を行い、学生個々のニーズに応じた効果的な相談を行っている。

(3) 学生相談内容及び相談件数

学生相談室は来談者(クライアント)との秘密保持の遵守が必要である。相談の内容は、①対人関係(友人・親・教職員・アルバイト等の上司や同僚等)、②修学や進路に関すること、③情緒的な問題、④教員へのコンサルテーション等である。件数は少ないが保護者からの相談もある。相談内容は多岐にわたり、中には病理水準域の学生も来室する。

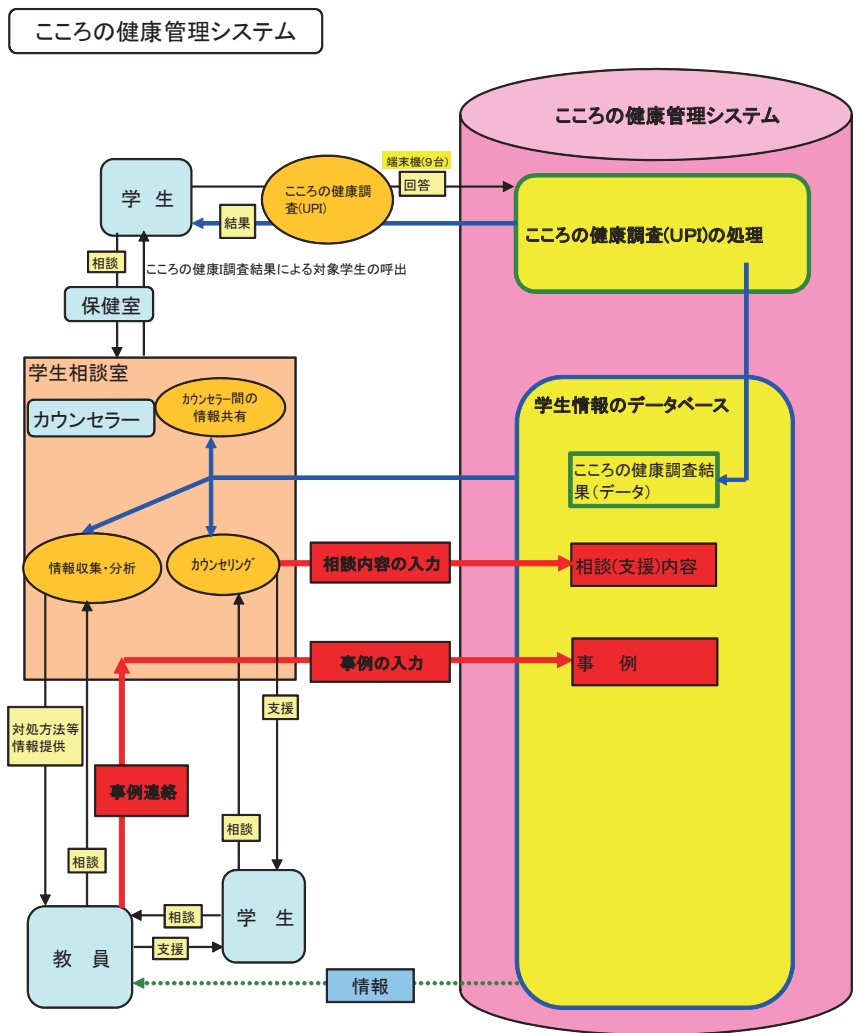
来室のきっかけは、①学生の自発来談、②保健室からの紹介、③学生友人からの紹介、④教職員からの紹介に分類される。電話やメールでの相談は原則として行わないが、学生の状況によっては電話によるカウンセリングを行うこともある。

相談の基本的なスタンスは、学生に個別に会い、ゆったりと時間をとり、学生が語る内容を聴いて、心理臨床の専門家として必要な支援を行い、また、学生が自己を語り、自己を理解し、自己をまとめていく過程を大切にして、個々の学生の発達や成長という視点から心理教育的な関わりを行っている。危機介入が必要な場面を除いては学生本人が自ら解決できるように支援をしていきたいと考えている。

来談者の平成 24 年度及び平成 25 年度の月別人数は、下表のとおりである。

〔月別延来談者数〕

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	うち学生来談者数		
														うち実数	延数	実数
24年度	30	30	47	32	11	21	25	28	21	28	33	8	314	64	296	53
25年度	28	43	37	44	12	35	60	37	39	34	33	21	423	52	383	42



6-4 学友会活動

授業以外の活動である課外活動は、学生にとって、多くの人々と交流を重ね、自己の才能を新たに発見・発展させ、豊かな大学生活を送る上で欠かせない。

本学には、本学学生全員を会員とした組織「学友会」があり、大学祭や新入生歓迎会、七夕フェスティバルなどの学生行事の企画・運営や部・サークル活動の調整や取りまとめを行っている。

[学友会の年間の活動状況]

実施年月日	行事・イベント名
平成25年 4月 7日(日)	新入生歓迎会
平成25年 4月 8日(月), 9日(火)	新入生履修登録相談コーナーの設置
平成25年 5月 20日(月)	ボーダーの日

平成 25 年 6 月 1 日(土)	第 7 回球技大会(バレーボール)
平成 25 年 7 月 5 日(金)	七夕フェスティバル 2013
平成 25 年 7 月 30 日(火)	又松大学校と南海大学の交流会
平成 25 年 10 月 30 日(水)	ハロウィンイベント
平成 25 年 11 月 2 日(土), 3 日(日)	第 21 回岡山県立大学大学祭
平成 25 年 12 月 16 日(月)	クリスマスイベント
平成 26 年 1 月 14 日(火)~20 日(月)	新年イベント

平成 25 年度の学友会に所属している部・サークルの数は、体育系 26 団体、文化系 29 団体の計 55 団体であり、所属学生は延べ約 1,750 人で多くの学生が部・サークル活動に参加している。

学友会活動に対する支援については、本学からは活動に関するアドバイスを行うほか、施設・設備の貸出や使用に関する補助を、また、後援会からはイベント開催や部・サークル活動などの経費の補助を行うなど大学と後援会が連携して取り組んでいる。

6-5 まとめと課題

引き続き、学生生活の支援のため、学生の意見を大学運営に反映させるとともに、学生相談室のカウンセラーと教職員の連携により、支援が必要な学生の早期把握と適切な対応を行うこと、また、学友会や部・サークルの活動に対し、後援会と協力し支援を行うこと等が必要である。

7 学生のキャリア形成支援

7-1 概要

フレッシュマン特別講義は大学における学びのスタートになる重要な講義としての位置付けであり学長以下、主要な大学機関の長、及び学外の識者に講義をお願いしている。本年度も昨年度とほぼ同様に実施した。

全学講義は全学生を対象に社会の第一線で活躍している著名人を招聘しているが、今年度は岡山県立大学-総社市-AMDA が「世界の命を救う」三者連携協定を結んだことから、国際的な医療保健活動で知られる AMDA 代表の菅波 茂氏に特別講義を依頼した。

また、学生のキャリア形成のためのインターンシップ及び各種就職ガイダンスの開催など学生の就職活動全般について支援を行った。

7-2 フレッシュマン特別講義

平成 25 年度全学教育科目「フレッシュマン特別講義」は以下のとおり実施した。出席数は表のとおりである。

[平成 25 年度 フレッシュマン特別講義]

回	講 師	テーマ	出席者数
第 1 回	辻 英明 学長	本学の教育・研究の基本理念について	402
第 2 回	渡辺 富夫図書館副館長	情報活用方法, 図書館の活用方法	398
第 3 回	臼井 洋輔氏 (元吉備国際大学教授)	古代吉備文化 ーその栄光と破綻とリベンジの軌跡ー	399
第 4 回	菊井 情報教育センター長	情報社会のルールとマナー	401
第 5 回	子野日 健康・スポーツ推進 センター長, 犬飼教授	スポーツを楽しもう	398
第 6 回	片岡 聡一氏 (総社市長)	人間力	397
第 7 回	星野 語学センター長 杉村 副センター長	今, なぜ英語なのか?	397
第 8 回	田内 学生部長	未来を育むー大学を懸け橋にー	392

7-3 全学講義

全学講義は、広く本学学生の教養を高めるため、社会の第一線で活躍している著名人を招聘し、全学生を対象として、特別講義を行うものである。

平成 25 年度は、平成 25 年 12 月 13 日 (金) に本学学部共通棟 (東) 8902 教室において、AMDA グループ代表 菅波茂氏をお迎えして、「これからのグローバル人材育成 ～三者連携協定を通じて～」という題目で、今後ますますグローバル化する世界に対応した人材育成などについて講演が行われた。

7-4 インターンシップ

本学では、学生のキャリア形成を支援するため、自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うため、NPO 法人 WIL や総社市、病院や民間企業等との連携を図り、インターンシップ参加希望学生への支援を行った。なお、情報工学部とデザイン学部においては授業科目として取り組んだほか、保健福祉学部においては、特定の資格取得を目的に各種実習として取り組んでいる。

平成 25 年度の NPO 法人 WIL 及び総社市におけるインターンシップの実施状況は次のとおりである。

(1) NPO 法人 WIL との連携

本学では、厚生労働省が行っていたインターンシップ事業 (平成 14 年度～21 年度) を引き継いだ NPO 法人 WIL のインターンシップ支援サイトを利用してインターンシップを実施した。平成 25 年度の WIL のインターンシップ事業への参加学生は 51 人で、実習先は県内 34 企業 (団体) であった。

〔厚生労働省及びNPO法人WILの行うインターンシップ実績〕

単位：社，人

年度	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	計
受入企業社数	5	10	12	7	11	9	12	11	13	19	10	34	153
参加学生数	17	19	17	13	15	12	17	15	25	25	18	51	244

〔平成25年度実習先〕

実習先企業・団体
岡山市立中央図書館，備前市，倉敷市自然史博物館，倉敷市水道局，倉敷市少年自然の家，おかやま信用金庫，(株)山陽新聞社，井原放送(株)，テレビせとうち(株)，興南設計(株)，ダイヤ工業(株)，ナカシマメディカル(株)，(株)両備システムズ，丸五ゴム工業(株)，石川工業(株)，倉敷繊維加工(株)，倉敷レーザー(株)，コアテック(株)，ゼノー・テック(株)，富士ベークライト(株)，瀬戸内エンジニアリング(株)，トヨタカローラ岡山(株)，(株)ハーバー・ソフトウェア，(株)ワールドワイドシステム，両備テクノカンパニー，両備バスカンパニー，(株)山陽マルナカ，農マル園芸グループ，(株)タカラ教育事業部，(株)イー・ネットワークス，(株)エイチ・エス・ピー，(株)天満屋ホテルズアンドリゾーツ，(株)ファジアーノ岡山スポーツクラブ，(株)テイクオフ

(2) 総社市との連携

総社市のインターンシップは、本学と総社市の連携協力に関する協定の一環として平成21年度から実施しているもので、平成25年度は、秘書室、市民課、企画課、商工観光課、こども課、建築住宅課、環境課、総社市消防本部など多部署にわたり、15名の参加があった。また、インターンシップで体験した結果をもとに、学生が市に政策提言することを義務づけ、市はその提言の中から独創性や実現可能性などを評価して、1名の学生を選び表彰した。

〔総社市インターンシップ参加者〕

年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
人数	11	19	23	21	15

7-5 就職支援活動と実績

全学部を対象として、就職活動の時期に合わせ就職ガイダンスや自己分析検査、各種模擬テストを実施するとともに、大規模な合同企業説明会へ就職活動バスを運行するなどの支援を行った。また、専門の相談員による就職相談を週3日（休業期間等を除く。）実施

し、学生への個別指導等を行った。（詳細は付録Cを参照のこと。）

各学科においても、就職担当教員が中心となり、学科の特性に応じた就職指導やセミナー、企業説明会等を開催し、就職活動の支援を行った。

7-6 まとめと課題

本年度のフレッシュマン特別講義も内容的に充実したものであった。本講義における効果測定は難しい課題であるが、90分の講義では集中を欠く場合もあるため、二分割して関連複数講義を行う、課題レポートを提出させる等が対応として考えられた。

全学講義については充実した内容で順調に行われたが、事前情報をさらに積極的に提供することで学生の出席意欲を高めることが可能と考えられる。

また、昨今の厳しい雇用情勢の中で学生の就職活動を支援するため、学生がインターンシップや就職ガイダンス等へ積極的に参加するよう促すとともに、学生のニーズに沿った内容となるよう継続して充実を図ることが必要である。

8 国際交流と教育活動

8-1 概要

国際交流等による大学のグローバル化は、地域貢献と並び本学においても重点的に促進を図っているところである。本学はこれまで、海外の7つの大学と国際学術交流協定を結び、教職員や学生の研究と教育に関する交流を行ってきた。本年度も既に交流協定を結んでいる各大学との連携、交流の強化促進を図るとともに、学術交流や学生研修、交換留学等をさらに発展させるために、新しい大学との交流協定等について可能性を検討した。その成果として、今年度は学生の語学・文化研修を、従来から継続している英国国立バンガー大学に加え、オーストラリアのアデレード大学でも実施し、さらに新しい試みであるスタディツアーを香港で行った。

8-2 国際学術交流協定校

本学は中期目標において「海外の大学との間で、国際共同研究を行っている教職員や学生の幅広い分野での相互交流を推進する。」「国際交流協定を締結する大学を必要に応じて拡大する。」「学生の海外研修を推奨するとともに、留学生の受入と派遣を進める。」としている。これまで英国国立バンガー大学（平成8年）、英国セント・アンドリュース大学（平成8年）、韓国又松大学校（平成17年）、中国四川大学（平成19年）、中国南昌大学（平成19年）、中国延边大学（平成20年）、中国東北師範大学（平成23年）と国際学術交流協定を締結している。本年度は、従来の協定校との交流を活発化させること、またオーストラリアの大学（アデレード大学、TAFE）と学術交流を行うための協議を行った。

8-3 語学・文化研修

これまで英国国立バンガー大学、韓国又松大学校及び中国四川大学の学術交流協定校へ短期語学・文化研修として学生を派遣してきた。また、平成 19 年度から海外から日本語・文化研修の目的で学生を受け入れている。

本年度は、英国国立バンガー大学が実施する研修（8 月 29 日～9 月 20 日）に 9 名を派遣、また、本年度から新たにオーストラリア連邦南オーストラリア州アデレード大学が実施する研修への派遣及び海外で企業視察や文化体験などを行う香港スタディツアーを企画し、それぞれ 14 名、5 名が参加した。

一方、本学で開催した日本語・文化研修（7 月 30 日～8 月 7 日）に韓国又松大学校及び韓国南海大学から 16 名の学生を受け入れた。

【研修全体について】

- ・参加者への助成制度を従来の定率（経費の 1 割）より、定額（経費が 300,000 円を超える場合は 50,000 円を上限、300,000 円以下の場合は 30,000 円を上限）とし、参加費の低廉化を図ったが、中国と韓国については申込者が少なく、成立しなかった。
- ・研修内容を魅力的なものにするとともに、参加しやすい価格設定とし、積極的に周知を図り、研修を成立させる必要がある。
- ・英国バンガー大学の研修、南オーストラリア州アデレード大学での語学研修とも、同行した事務局職員、教員が内容評価を行ったが、それぞれ工夫が凝らされており、有効な授業が行われていることが受講生の反応からも窺えた。また、ホームステイも良質であり、授業のみでなくホストファミリーとの交流が学修を促進すると考えられ、今後もホストファミリーの質の保証を確認していくことが重要である。
- ・今年度初めて実施した香港のスタディツアーは、日本人商工会議所訪問、香港大学での授業参観や学生との交流、日系企業訪問と見学など、参加学生は大いに刺激を受けたとの感想が聞かれた。
- ・韓国からの語学文化研修生の受け入れも、日本語授業も好評で最後の発表会でも相当数の学生が流暢に日本語を使う例が認められた。また、ホストファミリーも大変努力してケアをしていただき、非常に良い友好関係が築かれていたのは幸いであった。

（詳細は付録 D を参照）

8-4 まとめと課題

従来からの学術交流協定校との関係性は、学長訪問等により強化されるとともに学術交流、留学生受入れ等、今後につながる素地ができつつある。また、新規の学術交流協定についても東南アジア、オーストラリアの大学と締結される方向で進んでいる。

語学・文化研修においては、本年度から開始したアデレード大学が好評であり、今後の発展が期待できる成果が得られた。学生への旅費援助も促進要因として働くと考えられ、今後しばらく継続することが有効と思われる。今後の語学文化研修のあり方の一つとして、研修先の大学で専門領域の講義を受講したり、実習・演習、施設等見学を行うなど、専門性を加味する方向で検討する余地があると考えられる。

9 選抜方式の評価について

9-1 概要

本学では、平成 23 年度より、入学時の選抜方式のあり方の検討に資する基礎資料を得ることを狙いとして、入学形式と入学後の成績推移との関連を調査・評価する活動を開始した。

9-2 保健福祉学部

9-2-1 看護学科

(1) 方法

看護学科では、平成 19 年度～平成 21 年度入学生の代表的授業科目でかつカリキュラム変更のない 4 科目の素点を入試形式ごとに比較した結果、統計学的有意差を認められなかった。また、国家試験合格率との関係も見られなかったことから、同一方法による継続的なデータ分析は行わなかった。

9-2-2 栄養学科

(1) 方法

栄養学科では、前期・後期入試とも二次試験に小論文と面接のみを行っていた平成21年度入学生と、前期二次試験に理科を導入し、後期入試をセンターのみに変更した平成22年度以降の入学生について、学部教育必修講義全科目（再受講となった科目については1回目の成績）の平均点を入試日程ごとに比較した。

(2) 結果

入試形態ごとの入学後の成績の平均値に有意な差は認められなかった。

入試形式	卒業生	4年次生	3年次生	2年次生
	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
推薦入試	77.5±3.3	74.9±4.4	76.5±3.1	73.2±6.6
一般入試（前期）	78.5±5.9	79.8±5.6	78.2±5.0	74.6±5.7
一般入試（後期）	77.4±5.6	80.1±6.2	72.8±4.9	74.7±0.8
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

9-2-3 保健福祉学科

(1) 方法

保健福祉学科では、平成 25 年度においては、平成 19 年度入学生（平成 22 年度卒業生）、平成 20 年度入学生（平成 23 年度卒業生）、平成 21 年度入学生（平成 24 年度卒業生）、及び平成 22 年度入学生（現 4 年生）の代表的授業科目 4 科目の素点を入試形式ごとに比較した。また、社会福祉士国家試験の合格率を入試形式ごとに比較した。

(2) 結果

【授業成績】

入試形式	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
推薦入試	326.7±15.7	331.6±10.9	322.6±14.2	324.8±19.7
一般入試（前期）	329.2±16.6	329.4±17.3	317.1±20.6	331.2±12.8
一般入試（後期）	334.5±20.6	335.0±24.3	320.0±17.1	330.6±16.8
統計学的有意差	なし	なし	なし	なし

※平成 19・20 年度と 21 年度以降とでは指標とした授業科目が異なるのでその比較はできない。

【社会福祉士国家試験合格率】

入試形式	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
推薦入試	55. 6%	83. 3%	52. 9%
一般入試（前期）	88. 9%	74. 1%	54. 2%
一般入試（後期）	91. 7%	90. 9%	46. 7%
統計学的有意差	あり (p<0. 05)	なし	なし

授業成績については、いずれの学年においても入試形式による統計学的有意差は見られなかった。社会福祉士国家試験合格率については、平成 19 年度入学生において推薦入試のそれが他に比べて有意に低かった。しかし、平成 20 年度以降の入学生においてはそのようなことはなく、推薦入試のそれは学年全体の平均以上であった。すなわち、推薦試験入学者が他より劣っているとはいえず、推薦試験の定員や選抜方法（高校からの書類、小論文、面接）も概ね妥当なものと考えられる。

（3）特記事項

一般入試に関して、保健福祉学科ではセンター試験利用科目を長らく 6 教科 6 科目としてきたが、他の福祉系大学に比べて科目数が多く、受験の阻害要因になっているとの指摘を受けるようになってきた。そこで平成 25 年度入学試験から、公立大学福祉系学科の標準的な科目数に準じた 3 教科 3 科目に変更した。

その結果、平成 25 年度入学試験の志願者数は前年に比べ、前期日程で 2. 4 倍、後期日程で 1. 2 倍になり、変更が社会からの要請にも対応した適切なものであったことが示唆される。

9-3 情報工学部

（1）方法

平成 23 年度に 3 学科共通の方法で分析を行った。平成 18～21 年度入学生全員を対象とした（ただし編入生、再入学生を除く）。入学後の成績については、全科目を対象に、1 年次終了時、2 年次終了時、3 年次終了時の取得単位数を対象とした。入学後の成績の順位付けは、成績評価 A, B, C にそれぞれ 3, 2, 1 の重みを付け取得単位数で総和した。選抜方式ごとに上記スコアの相関をチェックした。また入学後の成績順位の推移を選抜方式ごとに分析した。情報システム工学科においては入学試験の順位を、センター試験と個別試験（数学）に分けた分析も行った。

（2）結果

3 学科とも同じ傾向で、学科による違いは認められなかった平成 20 年度入学生に対して、平成 23 年度入学生の分析結果を掲載する。このデータにおいても各入試区分における成績スコアに関して有意な差はみられない。しかしながら平成 20 年度入学生と平成 23 年度入学生の推薦入試における分散比をとると 3. 10 となり、これは 5%棄却点 2. 60 を超えて有意差が確認された。

平成 20 年度情報通信工学科入学生の状況
各入試区分における基本統計量

	推薦入試	前期日程入試	中期日程入試
標本数	14	16	38
平均	184. 86	181. 19	185. 16
不偏分散	1336. 83	1680. 69	1550. 17
標準偏差	35. 25	39. 69	38. 85

平成 23 年度情報通信工学科入学生の状況
各入試区分における基本統計量

	推薦入試	前期日程入試	中期日程入試
標本数	13	12	32
平均	195. 77	221. 00	222. 44
不偏分散	4140. 89	2621. 16	2601. 02
標準偏差	61. 83	49. 02	50. 20

9-4 デザイン学部

9-4-1 デザイン工学科

(1) 方法

デザイン工学科では、平成 21 年度入学生（平成 24 年度卒業生）、平成 22 年度入学生（現 4 年生）及び平成 23 年度入学生（現 3 年生）について、代表的な科目であり、かつカリキュラム変更のない 12 科目の平均点を入試形式ごとに比較した。12 科目の内訳は、（全学）フレッシュマン・セミナー I, II, 基礎英語 I, II, 英会話 I, II, （学部）造形計画演習, デザイン史 I, II, デザインドローイング I, II, デザイン工学演習である。

(2) 結果

抽出した 12 科目の平均点に入試形式ごとの差異はほとんど見られない。また標準偏差をみても有意差は見られない。

入試形式	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
推薦入試	79. 0±5. 1	79. 6±5. 7	80. 1±4. 9
一般入試（前期）	78. 8±7. 3	77. 4±6. 8	78. 8±3. 1
統計学的有意差	なし	なし	なし

一方、抽出した科目の平均点を見ると、基礎英語 I, II と実技を伴う科目（造形計画演習, デザインドローイング I, II, デザイン工学演習）との比較において各年度を通じて、推薦入試の入学者は一般入試の入学者よりも基礎英語がやや低く、実技を伴う科目はやや高い傾向にある。今回の調査の範囲では、入試形式グループ間での質的な差異を、プロフィールとして抽出することができなかった。

9-4-2 造形デザイン学科

(1) 方法

造形デザイン学科では、平成 21 年度入学生（平成 24 年度卒業生）、平成 22 年度入学生（現 4 年生）及び平成 23 年度入学生（現 3 年生）について、学科の代表的な科目であり、かつカリキュラム変更のない 12 科目の平均点を入試形式ごとに比較した。12 科目の内訳は、（全学）フレッシュマン・セミナーⅠ、Ⅱ、基礎英語Ⅰ、Ⅱ、英会話Ⅰ、Ⅱ、（学部）デッサン、デザイン史Ⅰ、Ⅱ、造形構成論、平面構成演習、立体構成演習である。

(2) 結果

抽出した 12 科目の平均点は全ての年度で一般入試の方が高く、標準偏差をみても一般入試の方が、ばらつきが小さいが特段の有意差は見られない。

入試形式	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
推薦入試	72.4±8.9	73.8±6.8	79.4±2.2
一般入試（前期）	76.0±6.9	76.0±3.2	79.6±3.0
統計学的有意差	なし	なし	なし

一方、抽出した科目の平均点をみると、英語に関しては年度ごとばらつきがあり、入試形式ごとの経年的傾向は調査の範囲では見られない。これは実技を伴う科目群でも同様である。したがって今回の調査の範囲では、入試形式グループ間での質的な差異を、プロフィールとして抽出することができなかった。

9-5 まとめと課題

9-5-1 保健福祉学部

看護学科では、平成 25 年から保健師・看護師及び助産師国家試験出題基準が改訂され、カリキュラムも改訂され、中級英語も必修となった。また、推薦入学の者で休学等があったことから、今後は入学後の成績の分析とあわせて、看護学履修へのモチベーション等の視点から推薦入試のあり方については検討する必要がある。

栄養学科では、追跡調査を継続し、入学時の学力が入学後の成績に影響するかどうかを今後も注意深く見極める必要がある。

保健福祉学科では、平成 25 年度入学生から、既述のとおり一般入試におけるセンター試験利用科目を大きく変えた。また、それぞれが個別の入学定員を持つ社会福祉学専攻と子ども学専攻の 2 専攻体制に再編成した。これらの大きなシステム変更と今後の学習成果について、注意深く調査を継続していくこととする。

9-5-2 情報工学部

評価の結果より、選抜方式の特段の変更の必要性はないと考える。ただ、推薦入試での入学生については、学業の到達度に関心が生じ始めている傾向がうかがえたので、今後は学習過程を観察し、緻密な対応が求められる。

9-5-3 デザイン学部

近年の傾向として推薦入試の合格者に専門学科生が多く含まれるようになったこと及び、平成 25 年から中級英語が必修となったことから、追跡調査を継続するとともに、並行して行ってきた入学時の成績と履修状況についての検証活動の精度を高める。推薦入試における面接及び一般入試におけるセンター試験利用科目や実技試験のあり方などについて、さ

らなる検討と必要な改善を重ねていきたい。また、学科では中期計画での入学者受入方針等との整合を図っていく必要から、入試形態についても引き続き検討を進めたい。

10 大学院における研究活動と国際交流

10-1 概要

本学は保健福祉学研究科と情報工学研究科が博士前期課程と後期課程を有し、デザイン学部では修士課程を有している。各研究科では教育と研究に熱心に取り組んでいるところであるが、大学院では教育と研究が密接不離の関係にある。そのため、本学では国際的研究活動（国際学会発表、国際交流研究、国際交流締結校との共同研究）を積極的に推進している。

今後の本学の教育面におけるグローバル化は大学院を中心に行われることが想定されるので、各研究科での積極的な取り組みと大学の支援体制の充実が望まれているところである。

大学院が国際化を推進するなど、時代のニーズに応えるために種々の取り組みを行っているが、それらをより明確に打ち出すために、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを改訂して、アドミッション・ポリシーに繋げる作業を行った。

10-2 大学院のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

大学のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが改正される機会に同時に大学院においても両ポリシーの全面的見直しを行うこととした。以下に各研究科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを掲げる。

10-2-1 保健福祉学研究科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

【保健福祉学研究科のディプロマ・ポリシー】

保健福祉学研究科は、保健・医療・福祉分野における問題点を提起してそれを解決し得る研究能力を持つとともに、専門職としての高度な知識・技術を身に付けることにより、健康で夢の持てる地域社会の実現に貢献し得る人材の育成を目指しています。

したがって、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- 保健・医療・福祉分野における問題点を発見し、それを理論的に解決できる研究能力を身に付けている
- 高度な知識と技術を備え、豊かな地域社会の実現に向けて指導者、実践者として活躍できる能力を身に付けている
- グローバルな視野を持った専門職として国際貢献できる能力を身に付けている

【保健福祉学研究科のカリキュラム・ポリシー】

保健福祉学研究科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 広い視野に立って精深な学識を受け、専攻分野における研究能力とグローバルな視野並びに高度の専門性を要する職業等に必要能力を養うための博士前期課程と、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他高度に専門的な業務に従事するために必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識並びにグローバルな視野を養うことを目的とした博士後期課程（保健福祉科学専攻）を置いています。
- 2 博士前期課程は、看護学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、看護技術やケアシステムに関連した諸問題を解決できる人材を育成する看護学専攻、栄養学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連し

た栄養学的な諸問題を解決できる人材を育成する栄養学専攻及び保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる人材を養成する保健福祉学専攻の3専攻を置いています。

- 3 博士後期課程は保健福祉科学専攻からなり、看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と、より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うための3大講座を置いています。
- 4 カリキュラムは、それぞれの専攻のカリキュラム・ポリシーに従って、講義・演習科目と特別研究から編成しています。

10-2-2 保健福祉学研究科（博士前期課程）3専攻（看護学専攻，栄養学専攻，保健福祉学専攻）のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

【看護学専攻のディプロマ・ポリシー】

看護学専攻は、学際的で高い看護の専門的知識と基礎的な研究能力を活かして、保健医療福祉分野における課題を解決し、国内外の看護における実践・教育・研究の場で社会のニーズに応え、貢献できる人材の育成を目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- ヒューマン・ケアリングと科学的根拠に基づく看護実践力を身に付けている
- 看護における現象を科学的根拠に基づいて説明し、課題を提起する能力を身に付けている
- 国際的・研究的視点を持ち看護の質向上に向けて貢献できる能力を身に付けている
- 看護のリーダーやスペシャリストとして、国内外で活躍できる能力を身に付けている

【看護学専攻のカリキュラム・ポリシー】

看護学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 看護学の教育・研究に必要な基礎的理論や研究技法及び外国文献の読解力を学修する「看護学専攻共通科目」と「基礎看護学」「発達看護学」「広域看護学」の各専門分野から構成しています。
- 2 幅広く保健医療福祉に共通する3専攻共通科目では、保健福祉学特論、災害援助特論・演習や国際コミュニケーション特論等を履修できます。
- 3 「基礎看護学」では、生命科学特論や基礎看護学特論等の講義・演習を通して、看護のエビデンス検証や確立を志向します。
- 4 「発達看護学」では、小児・母性・成人・老年期のライフステージ特有の看護に関する課題を探求し、人々の健康と豊かな人生を支援できる看護の方法論やシステム構築に貢献することを目指しています。
- 5 「広域看護学」では、公衆衛生看護学・在宅看護学・国際保健看護特論・精神保健看護学特論を履修し、生涯を通じた人々の心とからだの健康を学際的に探究し、グローバルな視点から根拠に基づく課題解決を図り、看護の質向上にむけて先導できることを目指しています。
- 6 「広域看護学」では、修士論文に加えて保健師国家試験受験資格を満たす科目を開講し、高度な実践力とリーダーシップを発揮して社会に貢献できる保健師を養成します。

【栄養学専攻のディプロマ・ポリシー】

栄養学専攻は、食品の機能や臨床栄養などの人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決できる優れた専門性を備えるとともに、豊かな創造力と問題解決能力を身に付け、それぞれの領域で活躍できる人材の育成を目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- 栄養学領域における理論と技術を身に付けている
- 人の健康に関連した栄養学的な諸問題を解決するための専門性や研究能力を身に付けている
- 栄養学領域における専門的な技術や知識を地域・世界に向けて発信できる能力を身に付けている
- 栄養士のリーダーとして、国内外で活躍できる能力を身に付けている

【栄養学専攻のカリキュラム・ポリシー】

栄養学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 栄養情報学講座、食デザイン学講座、基礎栄養学講座及び食品栄養学講座を置き、教育研究を実施します。
- 2 栄養情報学講座では、情報解析技術を活用したデータ解析法と新しい理論構築を基に、近年急速に問題となってきた肥満、糖尿病、脂質異常症をはじめとする生活習慣病の予防と治療を目指した教育・研究並びにスポーツ栄養学の教育・研究を行い、栄養学の最先端の分野で活躍できる能力を育成します。
- 3 食デザイン学講座では、幼児、児童・生徒、高齢者の栄養指導や調理指導、あるいは一般消費者の食生活全般を対象にした食育において、デザインや色彩の手法を取り入れて効果を得るための教育・研究を行い、食デザイン学の分野のリーダーとして活躍できる能力を育成します。
- 4 基礎栄養学講座では、一連の生命現象を遺伝子、生体分子、個体、集団などのレベルごとに理解し、さらに未知なる理論を展開して発展させる力を養うための教育・研究を行い、栄養学の基礎と臨床を結ぶことができる能力、並びに栄養学分野の教育・研究機関にて活躍できる能力を育成します。
- 5 食品栄養学講座では、栄養学を基盤とした天然物化学、酵素化学、分子遺伝学的アプローチにより、新規機能性食品成分の発見や新たな機能性食品素材の開拓、さらに食中毒の原因解明や予防に基づく食品の安全性の評価方法を開発し、健康増進と疾病予防を目標とした安全かつ高機能を有する食品素材の探求を志向した教育・研究を行い、管理栄養士のエキスパートとして食品関連企業、教育研究機関や行政機関において先導的に活躍できる能力を育成します。
- 6 外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します。

【保健福祉学専攻のディプロマ・ポリシー】

保健福祉学専攻は、保健福祉学の理論と技術を修得する組織的な教育研究を行い、保健福祉に関連した臨床や政策の諸問題を解決できる優れた専門性を備えた人材の育成を目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- 保健福祉領域における高度な知識、理論と技術及び論理性を身に付けている
- 保健福祉領域における諸問題を解決するための研究を計画・遂行・発表する基礎能力を身に付けている
- 生涯にわたって自己研鑽する姿勢と習慣を持ち、国内外の新しい問題に創造的に対応できる力を身に付けている

【保健福祉学専攻のカリキュラム・ポリシー】

保健福祉学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 政策科学講座、社会福祉支援学講座及び保健福祉支援学講座を置き、教育研究を実施します。
- 2 政策科学講座では、社会保障や児童・高齢者・障害者福祉分野等における制度、政策行政などに関する理論やデータの分析・評価方法を追求する科目を設置しています。
- 3 社会福祉支援科学講座では、児童、高齢者、障害者、病者のウェルビーイングを達成するための臨床的方法・技術の開発・評価及びそれらの理論化を追求する科目を設置しています。
- 4 保健福祉支援科学講座では、児童、高齢者、障害者など多様な人々の適応行動に関わる心理的・身体的特性の科学的な分析を基礎にした保健福祉実践につながる理論と方法を追求する科目を設置しています。
- 5 当該講座分野の理論と実践の前進に寄与しうる高度な研究成果を生み出すことができるよう、主指導教員を中心としながら段階的・系統的に研究指導を行います。

10-2-3 保健福祉学研究科（博士後期課程）保健福祉科学専攻のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

【保健福祉科学専攻ディプロマ・ポリシー】

保健福祉科学専攻は、人間の健康問題に関して、生命や栄養、看護・福祉など各方面からアプローチし、保健福祉科学に係る学問をさらに深化させることにより、保健福祉問題の解決策を提案できる高度な見識を備えた各専門職領域の実践者、指導者、研究者及び教育者の育成を目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- 保健福祉科学の学問体系の確立と発展に寄与し、学際的研究を自立して展開する能力を身に付けている
- 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報収集及び発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている
- 保健福祉科学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち、科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている

【保健福祉科学専攻カリキュラム・ポリシー】

保健福祉科学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 保健福祉に関わる学問をさらに深化させ、看護・栄養・福祉のそれぞれの分野において高度の見識と、より専門的な視点から科学的にアプローチする研究を行うために、本専攻に看護学大講座、栄養学大講座、保健福祉学大講座の3大講座を置いています。また、外国人を担当教員とし、英語で講義する科目の設定並びに海外協定校との共同研究の実施により、グローバル教育を行います。
- 2 看護学大講座では、看護実践を通して生じる諸現象やケアそのものを科学的に解明していくため、慢性疾患患者やがん患者及びその家族が抱える諸問題や、高齢者等のケアニーズに対応する看護システムやケア開発、看護の質向上に資する教育・研究を行います。教育課程は基礎看護学、成人看護学、小児看護学、母性看護学、地域看護学、精神看護学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした看護学特別研究からなります。
- 3 栄養学大講座では、食事に伴う栄養現象を分子生物学的アプローチにより解明し、病気の予防に活かすため、食品中の新規有効成分の解明、食品の安全性の追求、慢性疾患における代謝調節系の役割の解明を目指した研究を行います。教育課程は分子生物学、栄養科学、食品科学、病原微生物学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした栄養学特別研究からなります。また、外国人による科目を設定しグローバルな視野を育成します。
- 4 保健福祉学大講座では、児童、障害者、高齢者を主な対象として、その自立支援に関する研究を行います。教育課程は、家族保健福祉学、児童保健福祉学、高齢者保健福祉学、障害者保健福祉学、地域保健福祉学、国際保健福祉学の各分野の講義並びに博士論文指導を中心とした保健福祉学特別研究からなります。

10-2-4 情報系工学研究科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー

【情報系工学研究科ディプロマ・ポリシー】

情報系工学研究科は、情報工学部における学士課程の教育目標の延長線上にその教育目標を置き、情報技術を活用して、人間及び自然との調和を図りながら高度情報化社会の持続的発展に大いに貢献できるグローバル人材の育成を目指しています。

したがって、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- 情報工学とそれに密接に関連する工学について、高度な専門性と技術を身に付けている
- 得られた知識を融合的に活用して、新たな技術開発・理論展開を持って社会の発展に貢献できる能力を身に付けている
- 技術者に求められる高い倫理観、多面的な思考力、それらに培われた実行力や行動力を備えたうえで、自身の専門分野でリーダーシップを発揮できる能力を身に付けている

【情報系工学研究科カリキュラム・ポリシー】

情報系工学研究科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 システム工学という統一した専攻名を用いることにより、一貫した教育・研究体制を敷き、個々の学生が有する価値の多様性に対応できるよう、選択科目を多く設けています。
- 2 博士前期課程は、修士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子通信工学、ヒューマン・ロボティクス、機械プロセス・エネルギー工学、人間情報工学の5つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じた教育・研究ができるようにしています。
- 3 博士後期課程では、博士の学位を取得することを目的として、情報工学及びその関連分野である電子通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの大講座を専攻内に設け、研究分野に応じたより深い教育・研究ができるようにしています。
- 4 カリキュラムは、それぞれの専攻のカリキュラム・ポリシーに従って、講義演習科目と特別研究から編成しています。いずれの専攻においても教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い応用力や研究力を涵養します。

10-2-5 情報系工学研究科（博士前期課程）システム工学専攻のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー

【システム工学専攻ディプロマ・ポリシー】

システム工学専攻は、研究者あるいは技術者の立場から、高度情報化社会の中核となって産業社会の発展を支えていく人材、幅広い技術的基盤を基に「実システム」の創造的な設計ができる人材、豊かな人間性と倫理観を兼ね備えた人材、環境変化や産業構造の変化に柔軟に適切できる判断力とコミュニケーション能力を持つグローバル人材の育成を目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- 工学に対する専門的な知識と応用力を身に付けている
- 現実の複雑かつ困難な問題に柔軟に対処し、解決できる能力を身に付けている
- 急速に発展する高度な技術社会をリードできる研究能力を身に付けている

【システム工学専攻カリキュラム・ポリシー】

システム工学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 情報工学及びその関連分野である電子通信工学、ヒューマン・ロボティクス、機械プロセス・エネルギー工学、人間情報工学の5つの領域を専攻内に設け、研究分野に応じて学生はいずれかの領域に所属します。
- 2 情報工学領域は、高度なソフトウェア技術、ソフトウェア設計技術、計算機の要素技術などを扱います。
- 3 電子通信工学領域は、通信システムの大容量化・高速化、効率化や各種電子機器の高速化・効率化を追求する集積回路技術などを扱います。
- 4 ヒューマン・ロボティクス領域は、知的行動の解明とヒューマンインタフェースへの応用や各種ロボット技術などを扱います。
- 5 機械プロセス・エネルギー領域は、材料・エネルギー・設計をキーワードに、材料製造のプロセスや高効率なエネルギー変換手法、構造物の要素設計技術などを扱います。
- 6 人間情報工学領域は、人間の身体運動や動作・行動を科学的に解明することによって、人間中心設計技術などのさまざまな問題を解決する技術などを扱います。
- 7 所属領域の講義から高度な専門知識、所属外領域の講義から幅広い基礎知識を修得します。
- 8 所属領域内の複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い応用力を涵養します。

10-2-6 情報工学研究科（博士後期課程）システム工学専攻のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー

【システム工学専攻ディプロマ・ポリシー】

システム工学専攻は、今後ますます多様化、複雑化する社会からの要請に応えるべく、公的研究機関のみならず民間企業において、情報系の学術分野を現実課題の解決に適応できる研究者及び高度専門技術者を養成することを目標に、専門領域の深化と統合を通じて、新たな問題を発掘し解決する能力を持つグローバル人材の育成を目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- 工学に対する深い専門的知識と幅広い応用力を身に付けている
- 自らの得た成果を地域・世界に向けて発表するグローバルな情報発信能力並びに地域・国際社会で活躍できる能力を身に付けている
- システム工学の研究に対する理解に基づいた高度な倫理性を持ち、科学的基盤に基づいて研究若しくは教育を実践できる能力を身に付けている

【システム工学専攻カリキュラム・ポリシー】

システム工学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 情報工学及びその関連分野である電子通信工学、機械情報システム工学、人間情報システム工学の3つの大講座を専攻内に設け、研究分野に応じ学生はいずれかの講座に所属します。
- 2 電子情報通信工学大講座は、情報処理学、情報通信工学、電子デバイス工学の3分野を設け、専門領域の深化を図っています。
- 3 機械情報システム工学大講座は、計算システム工学、知能システム工学、プロセスシステム工学の3分野を設け、専門領域の深化を図っています。
- 4 人間情報システム工学大講座は、インテリジェントシステム学、スポーツ・人間行動学、人間生活工学の3分野を設け、専門領域の深化を図っています。
- 5 所属大講座の講義から高度な専門知識、所属外大講座の講義から幅広い専門知識を修得します。
- 6 所属大講座内の複数教員による活発な議論と研究指導により、グローバルな幅広い視野と高い研究能力を涵養します。

10-2-7 デザイン学研究科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー

【デザイン学研究科ディプロマ・ポリシー】

デザイン学研究科は、グローバルな視野と感性を持ち、社会を的確にとらえ時代の変化を洞察することで、将来予想される問題を優れたデザインの創出により解決し、豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材の育成を目指しています。

したがって、本研究科では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- デザインに係る十分な情報分析能力及び理論構築力を身に付けている
- 独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けている
- グローバルな視野と感覚を持ち、独自の優れた個性を発揮できるデザイン制作能力を身に付けている
- 高度な専門性とマネジメント力を身に付けている

【デザイン学研究科カリキュラム・ポリシー】

デザイン学研究科は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 グローバルな視野と感性と独創的で造形性豊かなデザインを発信できる能力を身に付けるために、カリキュラムは、専攻及び領域の連携を図るべく編成されており、専攻共通科目、領域科目に区分しています。
- 2 専攻共通科目は、両専攻に必要とされる美学・美術史系の科目を中心として編成しており、現代における造形文化を考察し、解明するための視座の獲得を図ります。
- 3 豊かで新しい便利な生活と文化に寄与できる人材育成のため、領域科目では、所属する領域での高度な専門知識、能力、技術を養う科目により編成しています。
- 4 各自のテーマに基づき、修士研究を行う上で必要な調査・研究及び作品制作について深く掘り下げて学び、2年間を通じて、修士論文・修士作品に取り組みます。

10-2-8 デザイン学研究科（修士課程）の2専攻（デザイン工学専攻、造形デザイン学専攻）のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー

【デザイン工学専攻ディプロマ・ポリシー】

デザイン工学専攻は、地域社会と産業界の要請に応えられる、高度な専門的知識・技能・技術をベースにした総合的な思考力を有する高度専門職業人として多様な価値創造が可能なデザイナー及び研究者の育成を目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- それぞれの専門領域に関する十分な情報分析力及びデザイン理論による構築力を身に付けている
- 社会動向などを見据えたうえで、創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている
- 高度な専門性を活かし、グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている

【デザイン工学専攻カリキュラム・ポリシー】

デザイン工学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点、高度な専門性を涵養するために、「製品・情報デザイン学領域」、「建築・都市デザイン学領域」の2つの領域を置いています。
- 2 製品・情報デザイン学領域では、工業製品、日常生活品など製品を対象として、技術と感性の調和を図り、同時にヒトと製品のスムーズな協働（インタラクション）のためにユーザインタフェースなど情報を整理し、豊かな生活を創造する製品の実践的、総合的な教育研究に取り組みます。
- 3 建築・都市デザイン学領域では、人間生活の根幹となる建築空間を基軸にして、街づくり、都市や地域環境など広範囲な空間領域を対象として、人と環境の調和を目指した体系的・総合的な建築教育とともに、各分野を深く探究する先進的な研究活動に取り組みます。
- 4 特別研究は、2年間の研究活動を通じて、高度な研究遂行能力を涵養することを目的としています。研究テーマは学生の希望と指導教員の助言により設定され、修士論文及び修士作品あるいは研究科委員会で承認を受けた特定の課題における成果物の作成をします。

【造形デザイン学専攻ディプロマ・ポリシー】

造形デザイン学専攻は、造形デザイン学の理論と技術を修得する教育研究を行い新たな造形デザイン構築において諸問題を総合的な視点から解決し、社会に貢献することのできる高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者を育成することを目指しています。

したがって、本専攻では次の能力を身に付け、かつ修了の要件を満たした者に学位を授与します。

- それぞれの専門領域に関する十分な情報分析・構築力及びデザイン理論構築力を身に付けている
- 社会動向などを見据えたうえで、創造的かつ造形的なデザインを発信できる能力を身に付けている
- 高度な専門性を活かし、グローバル化に対応できるマネジメント力を身に付けている

【造形デザイン学専攻カリキュラム・ポリシー】

造形デザイン学専攻は、学位授与の方針に掲げる人材を育成するため、次のような教育課程を編成しています。

- 1 高度専門職業人としてのデザイナー及び研究者に求められるグローバルな幅広い見識と視点、高度な専門性を涵養するために、「ビジュアルデザイン学領域」、「造形デザイン学領域」の2つの領域を置いています。
- 2 ビジュアルデザイン学領域では、印刷メディアを主体とした造形構成・編集、デジタルメディアを主体としたコンテンツ形成におけるデザイン性、機能性の向上を目指すための高度な専門知識、能力、技術を養うための科目を提供します。
- 3 造形デザイン学領域では、生活空間や展示空間などを構成・演出するセラミックやテキスタイルのデザイン性、機能性の向上を目指すための高度な専門知識、能力、技術を養うための科目を提供します。さらにテーマに基づき必要な調査・分析・研究及び作品制作について探究していきます。

- 4 現代における造形文化を考察し、解明するための視座により造形デザイン理論の構築にも重きを置いています。また、プロジェクト、ゼミナールなど領域横断的な授業の取り組みでは、公共機関、企業などに社会提案を行うことによってデザインマネジメント力を養っていきます。
- 5 特別研究では、2年間にかけて課題に向けて調査・分析・研究を行い、修士論文及び修士制作について探求していきます。

10-3 アドミッション・ポリシー

大学院では、学部と同様にディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの全面的見直しを行った。特に、保健福祉学研究科栄養学専攻においては講座の再編に伴い、同専攻のポリシーを全面的に改定した。改定の結果は、次年度のアドミッション・ポリシーに反映させる予定である。

10-4 保健福祉学研究科

看護学専攻では、名越恵美准教授の指導の下で大学院生が、がん看護の研究に従事し「化学療法を受けるがん患者の意思決定に関する研究の概観－国内文献からの検討－」が『キャリアと看護研究』第4巻1号に掲載されることとなった。高橋徹教授の指導の下で大学院生が重症患者のストレッチャー搬送の安全基準確立に向けた実験研究に従事し、その成果を日本看護技術学会でポスター発表した。また、高橋徹教授はギリシャで行われた16th International Symposium on Molecular Medicine（第16回国際分子医学シンポジウム）に招待され、岡山大学大学院との共同研究の成果を30分間講演し、その研究成果に対してThe Award for an Outstanding Achievement（卓越した業績賞）が授与された。なお、二宮一枝教授が指導した昨年度の修了生が修士論文を国際情報学会で発表し、学会誌に掲載されることになり、あわせて日本公衆衛生学会誌に投稿した「中山間地域在住高齢者におけるウォーキング行動の変容ステージに関連する要因」が研究ノートで採択された。国際保健看護論では非常勤講師（ネパール：トリブヴァン大学）の集中講義に学部生も参加し、次年度の国際保健看護論演習の打合せを行った。

栄養学専攻では、高橋吉孝教授の指導の下で、大学院生3名がロイコトリエンに対する単鎖抗体を利用した抗体治療薬の開発を目指す基礎研究に従事し、その研究成果の一部が国際学会誌Biochim Biophys Acta に2014年掲載見込となったほか、台北市の台北医科大学で2013年11月30日に開催されたシンポジウムSymposium on Advances of Biomaterials and Regenerative Medicineに招待され、30分間の講演を行った。また山本登志子准教授の指導の下で、大学院生が平成25年9月19日にスペインのグラナダにおいて開催されたIUNS 20th International Congress of Nutrition国際会議において「*ioscorea japonica* extract suppresses the expression of the related enzymes synthesizing lipid mediator prostaglandin E₂」の演題でポスター発表を行うとともに、平成25年11月11日にフランスのSaint-Jean-Cap-Ferratにおいて開かれた16th GEM/10th GERLI lipidomics meeting: from membranes to pathologies国際会議において「*Dioscorea japonica* extract suppresses COX-2 and mPGES-1 expression and has preventive effects against squamous cell

carcinoma」の演題で発表した。またそれらの成果は岡山県立大学保健福祉学部紀要第20巻に「マウスにおける生理活性脂質合成系をターゲットとした自然薯粉含有食の食品機能性」の論文タイトルで発表した。

保健福祉学専攻では、竹本与志人准教授の指導の下で、3名の大学院生の研究成果としてそれぞれ、日本認知症ケア学会誌 12 (3) : 583-592, 2013, 厚生指 60 (13) : 22-29, 2013, 日本在宅ケア学会誌, 17 (1) : 33-40, 2013 に掲載され、各種学会において9題研究発表を行い (内5題が大学院生筆頭者)、2名の大学院生がそれぞれ日本認知症ケア学会の2013年石崎賞を受賞した。また、保健福祉学専攻の教員が、英語による研究発表を行うための特別講義を3回開催し、大学院生に国際学会への参加を奨励した。

博士後期課程保健福祉科学専攻では、看護学大講座において、難波峰子教授の指導の下で、大学院生がネパールの看護の質に関する研究に従事し、その研究成果の一部が” Family caregiver perception of nursing care in Nepal: Qualitative Content Analysis”として The Journal of Nepal Nursing Council に掲載決定となった。荻野教授の指導の下で末梢静脈穿刺に関する研究に従事し、その研究成果の一部が “The characteristics of healthy adult with hardly palpable vein - Relations between easy venous palpation and physical factors”として International Journal of Nursing Practice に掲載された。また各種学会に院生が筆頭で4題発表し、投稿に向けて執筆中である。

また栄養学大講座において、山本耕一郎教授の指導の下で大学院生が、研究成果の一部を2014年2月9-13日にバンラデシュのダッカで開催された U.S.-Japan Cooperative Medical Sciences Program Regional Conference on Emerging Infectious Diseases 国際会議において「Screening of the genes required for Vibrio vulnificus infection by signature-tagged transposon mutagenesis」の演題で発表を行った。

保健福祉学大講座においては、中嶋和夫教授の指導の下で大学院生2名が、東アジア3カ国における高齢者及び家族のQOLに関する研究を行い、中国の広州で2013年に8月23日に実施された第11回国際高麗学会において口頭発表を行った。また、中村光教授の指導の下で、大学院1名が言語流暢性課題の遂行に関する研究を行い、韓国のソウルで2013年11月8日に実施された Korean Gerontological Society 2013 Autumn Seminar でポスター発表を行った。

10-5 情報系工学研究科

情報系工学研究科博士前期課程では、現在2年次生が電子情報通信工学専攻、機械システム工学専攻、人間情報システム工学専攻の3専攻体制で、また1年次生がシステム工学専攻として5領域(情報工学領域、電子通信工学領域、ヒューマン・ロボティクス領域、機械プロセス・エネルギー工学領域、人間情報工学領域)にいずれかに属しながら研究活動を展開している。新体制の移行期であるが特段の混乱なく教育・研究体制が維持できている。平成25年度の大学院博士前期課程学生による研究発表実績を表1に示す。

表1 博士前期課程の研究発表件数

発表内容	件数
査読付き学術論文	5
国際会議録	15
全国大会発表	99
支部大会発表	46
学術表彰・受賞	16

受賞の主な内容は、2013年 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS) に関する受賞が多く、特に優れた研究発表に送られる最優秀研究賞 1 件、優れた研究発表に送られる優秀研究賞 1 件、企画・運営の功績が認められた功労賞が 3 件である。その他として、平成 25 年度電子情報通信学会中国支部連合大会奨励賞が 2 件、平成 25 年度情報処理学会中国支部奨励賞が 1 件ある。これらはいずれも中国地区での活躍であるが、国際規模の受賞として、2014 RISP International Workshop on Nonlinear Circuits, Communications and Signal Processing, Student Paper Award が 1 件ある。これは国際会議に出席し、研究発表を通じて海外の研究者と交流を行い、優れた研究発表を行った結果であるといえよう。

博士後期課程では休学者が多いため本年度は必ずしもその活動は活発ではない。

表 2 博士後期課程の研究発表件数

発表内容	件数
査読付き学術論文	3
国際会議録	1
全国大会発表	3
支部大会発表	6
学術表彰・受賞	1

受賞の 1 件は平成 25 年度日本設備管理学会論文賞である。

今後は、外国人留学生の増加を指向し、国際交流を通じてよりグローバルな視点をもつ教育・研究が重要となる。

10-6 デザイン学研究科

デザイン学研究科では現在、国際交流を通じた研究活動は行っていない。

10-7 国際学術交流協定校

本学はこれまで英国国立バンガー大学 (平成 8 年)、英国セント・アンドリュース大学 (平成 8 年)、韓国又松大学校 (平成 17 年)、中国四川大学 (平成 19 年)、中国南昌大学 (平成 19 年)、中国延边大学 (平成 20 年)、中国東北師範大学 (平成 23 年度) と国際学術交流協定を締結している。国際学術交流協定校からの教員を迎えて、以下の大学院講義を実施した。

東アジア栄養学特論 (保健福祉学研究科博士前期課程栄養学専攻授業科目)

- ①期 日： 2013 年 (平成 25 年) 8 月 12 日 (月)～8 月 13 日 (火)
 2013 年 (平成 25 年) 8 月 22 日 (木)～8 月 23 日 (金)
 方定志 教授 (四川大学) が 8 月 12 日 (月) に 4 コマ、8 月 13 日 (火) に 4 コマを担当
 尹泓基 教授 (又松大学校) が 8 月 22 日 (木) に 4 コマ、8 月 23 日 (金) に 4 コマを担当

②受 講 者：保健福祉学研究科栄養学専攻博士前期 1 年次生 6 名

③講 義 者：尹泓基 教授 (韓国、又松大学校)、方定志 教授 (中国、四川大学)

④講義内容：

尹泓基教授は、韓国の伝統的な発酵食品、とくにキムチについて、分類や利点に関して講義し、また大豆の発酵食品について東アジアにおける主要な種類について

それらの栄養成分、関係する微生物、伝統的醗酵製品と現代における発酵食品との比較を行った。方定志教授は、1950年代以降の中国における食事パターンの変遷と栄養調査について概説して、中国及び日本における食事摂取の比較並びに遺伝的形質の特徴などについて講義を行った。両者ともいずれも英語で講義した。

また本学教員は、大学院生とともに国際交流協定校の研究者と共同研究を企画し、成果をあげている。平成25年度の課題名は次のとおりである。

(1) 課題名：動脈硬化原因酵素である白血球型12-リポキシゲナーゼの阻害作用を有する青山緑水中の強力な新規有効成分の構造決定

研究者：保健福祉学部栄養学科 高橋 吉孝, 伊東 秀之, 川上 祐生
四川大学生物・分子生物学科 方定志
本学大学院生 2名

成 果：以下の国際学会誌に論文発表を行った。

Ito H, Otsuki A, Mori H, Li P, Kinoshita M, Kawakami Y, Tsuji H, Fang DZ, Takahashi Y. Two new monoterpene glycosides from qing shan lu shui tea with inhibitory effects on leukocyte-type 12-lipoxygenase activity. *Molecules*. 18(4): 4257-4266, 2013.

(2) 課題名：韓国介護労働者のコミットメントとストレスが職務・職場継続意思に及ぼす影響

研究者：保健福祉学部保健福祉学科 原野かおり, 桐野匡史, 中嶋和夫
保健福祉学大講座 岡部一光, 李志嬉
群山大学福祉行政学科 嚴基郁
両備ヘルシア 張英恩

成 果：投稿中である

(3) 課題名：言語流暢性課題の遂行に関する多言語比較研究

研究者：保健福祉学部保健福祉学科 中村 光
保健福祉学大講座 李 多暉
又松大学校福祉学科 柳漢守

成 果：研究継続中

10-8 まとめと課題

本年度は、各研究科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの全面的かつ統一的な改正を行った。ただし、全研究科に係るディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー作成は、今後の検討課題とした。以下に各研究科のまとめと課題を記す。

10-8-1 保健福祉学研究科

保健福祉学研究科では、研究成果の院生や指導教員による国際学会ならびに国際誌での発表を積極的に行った。また、国際学術交流協定校との共同研究も成果が発表され実績を上げている。今後は、連携協定先の多様化を図るとともに、留学生受入れ体制の整備も課題となる。

10-8-2 情報工学研究科

情報系工学研究科では現在、国際交流を通じた研究活動として特段のものはない。しかしながら、連携大学である韓国又松大学校よりの学部編入生が、本研究科に進学することが決まっている。よって来年度以降は、本格的な交流を通じた活動が期待できる。また、大学院自体への留学生獲得を同時に課題としたい。

10-8-3 デザイン学研究科

デザイン学研究科では現在、研究活動及び国際交流は行っていないが、研究科として新たに連携協定のため、海外の大学を訪問し教員相互の交流を行った。

また、平成26年度には中国人留学生が2名在籍することもあり、連携大学を中心に共同研究及び交流を推進していきたい。

第2章 教育改革活動と成果

1 概要

近年の社会の要請は文部科学省（中教審大学分科会）の「学士力」、経済産業省の「社会人基礎力」に示されているように、大学生の具体的な能力の開発を大学教育に要求している。その様な社会的要求に応えるために、大学では様々な従来になかった新しい行動を起こす必要がある。大学教育を地域と連携させることやアクティブラーニングの実施は有効な方法の一つとして挙げられる。本学のFD活動は従来一定の活動を行って来たが、今後その土台の上に立って第2期中期計画における教育の「質の保証」を計る必要が生じている。来年度設置予定の大学教育開発センターの下でFD活動の活発化が期待される。教育力向上支援事業は、教員が全学教育、専門教育を問わず、個人、グループ、学科単位で教育の質を向上させるために申請する事業である。極めて意義のある事業であり、今後、そこから得られる成果を大学全体の知恵として共有してゆくことが望まれる。

2 FD 活動

2-1 概要

平成25年度のFD活動は、第2期中期計画初年度「教育の質の改善」のための取り組みとして、1) 相互授業参観、2) 授業評価アンケート、3) FD研修会、4) 学外研修会への参加、5) 卒業時アンケートを主な柱として実施した。相互授業参観に関しては、昨年度前期に開催したので、本年度は後期に開催し、公開科目の公平化を図った。さらに、授業参観への参加者を増やすため、昨年度までは学部単位で集計等を行っていたが、今年度はよりきめ細かく対応できるように、学科単位で行った。また、参観する授業を選ぶときの参考とするため、学生対象の授業アンケートで、各学科において上位となった授業に★印を付与する試みも行った。さらに授業参観期間中に、何度も教員に参加呼びかけのメールを送ることにより、参加率向上を図った。

また、FD研修会は例年2回開催しており、第1回は、教員の教育力向上をめざし、富山大学（元岡山大学）の橋本勝教授に依頼、授業やFD活動は学生と一緒に作るものである、という研修を行っていただいた。研修会後にアンケートを充実し、意見収集を図った。第2回目は例年県大祭の翌日に実施しているが、本年度はこの日が文化の日の代休となり、他に多くの教員が参加しやすい代替日が見つからなかったため、実施を見送った。

以下、各取組について、その詳細を報告する。

2-2 授業参観

(1) 平成 25 年度授業参観の位置づけと目的

今大学に求められている教育のあり方や学生の気質など変わりゆく環境に対応すべく、平成 25 年度の授業参観も、教育内容・方法の向上を図る機会を設けるという目的のもと、公開する教員及び参観する教員いずれの希望も尊重する形で相互授業参観を実施した。

本年度は、実施期間・方法については昨年度の取組を踏襲、参観実施時期については、公開科目の偏りの解決及び参加率向上を目的とし、前期から後期に移動した。

(2) 相互授業参観の実施方法について

1) 参観（公開）授業の開示

全ての専任教員は、公開する授業科目（授業形態は問わない）、公開日、時限を届け出る。

ただし、全学教育研究機構を兼務する教員は、全学教育科目の公開を前提とする。

2) 参観授業の選択

教員は参観希望授業を選択し、直接、公開教員に参観を申し込む。（FD 担当教員にも同時に送付する。）

3) 参観実施期間

平成 25 年 11 月 5 日（火）～11 月 22 日（金）までに実施する。

(3) 授業参観レポート

授業参観終了後、参観教員は下記の 2 項目についてレポートを提出し、公開教員に送付する。公開教員はこのレポートに対してコメントを記して参観教員に返信する（FD 担当教員にも同時に送付する）。この双方向フィードバックにより、個々の授業の背景や進め方について、より深い理解が得られるよう配慮した。2 項目は、以下のとおり。

1) 授業参観を通して参考となった点、工夫が見られた点

2) 今後の授業改善につながる助言等

(4) レポートの活用

上記のとおり、参観者からのレポートは公開教員に送付され、授業改善の参考に供した。

なお、レポートの内容は当事者以外にとっても有益な情報が含まれていることから、若干の調整（個人情報を除く等）を行って本稿に含めることとした。

(5) 各学部の授業参観実施結果

〔保健福祉学部〕

① 実施概況

実施状況を表 2.2-1 に示している。平成 25 年 11 月現在の学部教員の内訳は、教授 26 名、准教授 22 名、講師 6 名、助教・助手 16 名の合計 70 名（うち休職中 2 名）である。授業参観の参加教員数のまとめについて、分類法 A と分類法 B はそれぞれ教員職種による分類及び学科内・学科外となっている。なお、「学科内」は公開教員と参加教員の所属学科が同じであることを示している。

② 実施結果

保健福祉学部では、助教・助手を含む全教員に授業公開を募集した結果、最終的に 56 名の教員（前回 43 名）が授業を公開した。公開した授業について広く授業参観を募集し

たところ、授業参観された授業は30科目（前回19科目）で、担当教員総数は30名（前回22名）であった。その授業の内訳は講義22科目（前回12科目）、演習・実習・実験8科目（前回7科目）であった。また、参観した教員の総数は49名（前回34名）であり、学科内の教員が37名（前回23名）、学科外の教員が12名（前回11名）であった。なお、学部外の教員のうち、情報工学部から2名の教員が、そしてデザイン学部から4名の教員が参観した。

昨年度は前期授業の参観を実施したが、公開した教員数は43名であったのに対して、本年度は56名の教員が授業を公開した。前々回（一昨年度）の後期授業の参観では、55名が公開したので、これは単純に前期と後期の授業数の違い、あるいはその担当教員数の違いではないかと思われる。昨年度参観された授業科目数は19科目であったのに対して、本年度は30科目（一昨年度17科目）であり、大幅に増加した。さらに、参観した学科内の教員数も昨年度の23名から37名と大幅に増加したが、他学部からの参観教員数は昨年度の2名に対し6名であった。

以上のように、後期授業と前期授業の違いはあるが、本年度では、前回（昨年度）と比べて、教員の授業参観数及び参観授業科目数いずれも増加していた。

参観した教員は、当該授業の担当教員に授業参観レポートを提出し、当該授業担当教員は提出されたレポートに対して返答した。

以下に、授業参観レポート及び担当教員からの返答の内容をまとめた。レポートの内容は、「参考になった点・工夫が見られた点」と「改善につながる助言」に分類してまとめた。

◎参考となった点・工夫が見られた点

〈授業の展開・指導方法・教員の態度〉

- ・復習のための課題（プリント）を出し、次回に正解を説明する。
- ・小項目のまとめを英文で説明をする。
- ・最後に関連の国家試験問題で確認していた。
- ・科目選択理由を学生全員に自己紹介を兼ねて質問していた。
- ・配布資料の一部を空白にして配布し、穴埋めをさせることで知識の定着を図っていた。
- ・提示する資料の一部について、わざと誤りのまま提示して、間違いを探すことによって知識の定着を図っていた。
- ・テスト後の解説において、一方的な回答、解説ではなく、学生の知識を確認しながら、自ら教科書や参考書にあたって学習していく方式をとっていた点が、当該科目への動機付けや学習意欲の強化につなげていく手段として大変参考になった。
- ・分かったかどうか、個人名を呼んで聞いている。分かりにくいところについて、もう一度説明している。
- ・各講義内容の転換時に学生個人に理解度を確認していくことは、講義スピードも含めて参考になりました。
- ・説明の中で、皆さんで置き換えると・・・というように身近な例で説明されている点

- ・学生にとってわかりやすい言葉で説明されている点
- ・ビデオを振り返りながら、理論と実際を結び付けている点
- ・プロファイルシートに授業ごとの言いたいこと、聞きたいことを書いてもらい、学生がどのように感じているのかを把握したり、コメントを返したりされている点
- ・授業中に受講生各自または全員に向けて質問して、受講生の理解度を確認しながら、丁寧に講義を進められていた。
- ・授業の最後に、講義内容についてテスト形式で受講生に確認させ、さらにアンケートで受講生個々の理解度を確認されていた。さらに受講生全員に理解させるために、理解できなかった受講生を対象に、講義の後で補足説明する対応を取られ、きめ細やかに対応されていた。
- ・重要なところは強調していましたし、説明が丁寧だった。
- ・黒板の絵だけではイメージするのに限界があるので、やはり模型は必須だと思いました。
- ・受講者に適宜、質問を行い、理解度を確かめている点。他の授業で習うことも含めた質問であったため、包括的な知識の習得に繋がると思われ、参考になりました。
- ・理論的な説明と実際のデータがどちらも説明されていて、理解しやすい。
- ・各スライドを詳細に説明し、要所要所で大事な部分を繰り返し説明されていた点。
- ・これまで学んできたことについて質問をされ、学生にとっては緊張感が高いとは思いますが、その場で学生さんの理解度が確認され、それを繰り返し丁寧に説明され、わかりやすい。大事なところも繰り返し説明し、なおかつ総括もされ非常にわかりやすかった。
- ・居眠りをする学生は一人もなく、配布資料に熱心にメモしており意欲の高さが窺えた。
- ・小テストを講義前に実施して理解度を確認しているのはよいと思います。
- ・わかりにくい概念（フリップにより結合の方向がエクアトリアルからアキシシャルに変化するなど）は、実際に模型を学生に渡して理解を深めているのは素晴らしいと感じた。
- ・配布された資料に示された手順がわかり易かった。
- ・実演により示説されていたのが、理解の助けになっていた。
- ・導入時の問題提示による授業への動機づけおよび前回の学習内容の振り返りの実施。
- ・定位置に留まったままでの講義ではなく、教室全体を机間巡視しながら講義を進める。
- ・スライド画像の工夫（文字の大きさ、図の活用、標本写真の活用、ポイント部分の色分け、重要部分の空白→書き込みなど）
- ・最後に重要ポイントのまとめプリントの配付。
- ・学生の理解度を確認しながら、丁寧に進められていた。
- ・意味がわかり難い言葉や重要な単語について、語源を説明したり、わかりやすい言葉に言い換えることで理解を促されていた。
- ・複雑なメカニズムも分かりやすいイラストや図で示されていた。
- ・特に重要なおところについては、自分で説明出来るようにまとめ直してみるよう促されており、ポイントになる部分がわかりやすかった。
- ・二人の教員が連携して授業を進めておられた点。特に、学生が教員の説明を聞きながら

課題に取り組んでいる間、もう一人は学生のそばで理解度を確認しながら丁寧に指導されていた点が参考になりました。

- ・学生のニーズをよく理解し、対処していた。
- ・まず、小テストという形で前回の授業内容を復習させる機会を与えていたことは、効果的であると思われた。引き続き、教員が解説しながら学生間で採点させることもさらに理解を深めるために有効であると思われた。ぜひ、取り入れたい方法である。
- ・授業は教科書に沿って進められていたが、要所要所を適格に講義され、ゆっくりと板書することや分子模型を用いた丁寧な教授方法は学生の理解を一番に考えたものであり、私の見習うべき点である。私事であるが、パワーポイントを使った授業は情報過多となり、学生の理解がついて来ない反省がある。
- ・学生と質疑を繰り返して、理解度を確認しながら進行されていた。
- ・非常勤の先生と共に多くの学生の間をよくまわり、的確なアドバイスを出している点
- ・実習に関する説明は、専門的な内容が初学者にも理解しやすく配慮されていた。
- ・調理だけでなく衛生的な観点からも様々な工夫がなされていた。
- ・授業の初めに、スライドの問題に解答させて正解者に挙手させ、その日の授業テーマのポイントに当たる部分に関心を持たせる点
- ・教室を回って、学生に個別にマイクを向けて質問している点
- ・最後に出席票を兼ねて確認テストを出している点
- ・パワーポイントは、カラーでわかりやすい図がふんだんに使われており、理解が深まる。
- ・スライド1枚毎の要点がしぼられていて、わかりやすい。
- ・授業内容が配布されているので、学生は内容を理解しやすい。
- ・栄養管理する現場において、最も関心の高い食物アレルギーに関する講義で、その基礎から、食事にいたる応用について、わかりやすい講義内容であり、大変勉強になった。
- ・本講義内容は、一般向けの公開講座や講演などでも十分関心が持たれる内容である。

◎改善につながる助言

- ・授業の途中で、ここまでのまとめを説明されていましたが、口頭のみでなく、まとめのスライドを一枚加えるとよりわかりやすいのではないかと思います。
- ・模型の数は1列に1個は当たるように準備したほうが良いように思いました。
- ・班によって進行度や技術的な理解度が異なるところがあるように見受けられたので、助言を与えるようにするとよかったです。
- ・プリントの情報を整理し、メモ欄を確保することで、より理解しやすいプリントになる。
- ・情報を伝えるのみならず、学生の理解度に配慮して説明や実習をする必要性を感じた。
- ・教室の後ろの席に座っている学生が、スマホを何人かしていました。講義中に何度か教員が教室をまわられるとよい。
- ・話すときに一方向ばかり顔を向けているので一部の学生の顔しか見ていない。満遍なく見渡すようにするとよい。

- ・スライドの文字が小さいところがあり、後部席では文字が見えないところがありました。
- ・昨今スライド等で授業を行う教員が多いが、学生はノートも取らないで、映像をぼんやり見ていることが多い。板書とプリント資料等で授業を行うことで自主的にノートを取り、聴講している様子が見られ、新鮮でした。
- ・コミュニケーションを評価する指標（演習シート 11）が用意されていたが、この指標によってコミュニケーションを評価することの意味をもう少し時間をとって説明してもよい。
- ・一回ごとの振り返り時間（記録及び話し合い）が短く、記録を全て書けない学生や、意見を全て表出できない学生も居た。時間配分を工夫されたらと思いました。
- ・板書をもう少し増やした方がいいように思いました。
- ・写真やイラストがあると一層理解が進んだのではないか。
- ・学生の GW の際に、それぞれのグループで出た意見を発表させていた。その後、授業者はつぎの活動に移行したが、参観者は「もったいないな」という印象をもった。個人では十分ではない意見も、多くの学生から出されると、お互いに参考になる場合が多い。出された意見を「全体像」としてながめ、KJ 法などによって分類し、それぞれの集合を「観点」として提示することができるのではないか。
- ・授業の途中で、ここまでのまとめを説明されていましたが、口頭のみでなく、まとめのスライドを一枚加えるとよりわかりやすいのではないか。
- ・天井照明が、スクリーンのすぐ前にまであり、照明光の反射で、画面が白っぽくなり見づらかった。照明の一部を消すなどの対処が良いかもしれません。
- ・プロジェクタの元々の明るさが低いか、PC の設定だと思いますが、後ろからでは少しスクリーンが見にくいと感じました。また、白板も後ろからは見えにくかったと思います。
- ・本授業は、看護学科であれば一年次生に看護学を学ぶ上でのベースになる学問として履修を薦めたい。また二年次生に開講するならば、2 回目の臨地実習を経験しているので、看護の専門領域や現場を意識した内容を盛り込んでいただけることを希望する。
- ・看護学科の学生は履修できないので、時間割を見直すことを提案したい。
- ・デザイン学部の学生が聞いても良い内容なので、学部間連携の授業形態があっても良い。

③まとめ

- 1) 授業参観の実施は今年で 7 回目である。本年度は、保健福祉学部所属の教員 68 名のうち、56 名が公開した。実際に他の教員から授業参観を受けた科目数は 30 科目で、担当教員数は 30 名であった。公開科目数のうち参観された科目の割合は、56 科目のうち 30 科目（53%）と高いものではなかった。しかし、学科内の参観教員数は 37 名（昨年度 23 名）と大きく改善された。
- 2) 授業参観に対するレポートには「参考となった点・工夫が見られた点」及び「改善につながる助言」及び「授業公開教員からのコメント」の項目について報告された。今後の授業改善に有効な助言として、スマホをいじっている学生に対する注意や、時間割の

見直しなどの新しい提案がなされており、それらを有効に活用することが望まれる。

3) 保健福祉学部では授業参観率が大幅に向上しており、この傾向を維持していきたい。

表 2.2-1 公開授業と参観の概要（保健福祉学部）

公開対象の科目			計	分類法A				分類法B		
科目名	氏名	形態		教授	准教授	講師	助教	学科内	学部内	学部外
【看護学科教員による科目】										
看護学方法論Ⅳ	荻	講義	2				2	2		
母性看護学Ⅱ	北村	講義	1		1					1
看護学方法論Ⅲ	岡山	講義	2		1		1	2		
老年看護学Ⅱ	實金	講義	1	1				1		
女性のライフサイクルと助産	岡崎	講義	1			1		1		
小児保健実習	沖本	実習	1	1					1	
基礎英語Ⅱ	杉村	講義	1	1				1		
地域看護管理論	二宮	講義	2		2			2		
臨床病態Ⅰ	高橋	講義	3	1	1		1	3		
小計			14	4	5	1	4	12	1	1
【栄養学科教員による科目】										
基礎有機化学	伊東	講義	3	2			1	3		
応用栄養生理学	高橋	講義	1	1				1		
栄養学各論Ⅱ	木本	講義	2		1		1	2		
みちかなバイオテクノロジー	山本	講義	1	1					1	
健康情報演習	吉村	演習	1			1		1		
健康情報演習	川上	演習	1			1		1		
スポーツ栄養学	山下	講義	2				2		1	1
調理学実習Ⅰ	我如古	実習	4	2	1		1	3		1
小計			15	6	2	2	5	11	2	2
【保健福祉学科教員による科目】										
ターミナルケアⅡ	原野	講義	4	2	1		1	3		1
福祉国家論	増田	講義	2			1	1	2		
【全学】音楽の鑑賞	岡崎	講義	1			1				1
保育内容Ⅰ	佐藤	演習	2		2			2		
ソーシャルワーク演習Ⅱ	山本他	演習	1		1			1		
教育相談	京林	講義	1		1				1	
ソーシャルワーク演習Ⅰ	竹本	演習	1	1				1		
教育心理学	樟本	講義	2	1			1		1	1
児童福祉論Ⅰ	周防	講義	2	1	1			2		
エルゴノミクスの基礎	中村	講義	1	1				1		
心理学入門	樂木	講義	1			1			1	
保育原理Ⅰ	池田	講義	1	1				1		
介護コミュニケーション技術論Ⅰ	谷口	演習	1			1		1		
小計			20	7	6	4	3	14	3	3
合計			49	17	13	7	12	37	6	6

〔情報工学部〕

①実施状況

授業を領域別に分類した場合の実施状況を表 2.2-2-1 に示す。昨年までの分類体系を踏襲し、同表では授業科目を I～VI の 6 つの群に分類している。I 群は理系基礎科目である数学と物理、II 群はソフトウェア系科目、III 群は工学系基礎科目、IV 群は実験・演習科目、V 群は専門を深化させる科目、及び、応用的色彩が濃い科目、VI 群は「学部教育への準備」を除く全学教育科目並びに教職に関する科目である。参加教員数については職位と所属によって分類した。所属の分類については、参観教員が公開教員と同じ学科か、情報工学部内の他学科か、あるいは、他学部にも所属するかによって分類した。

平成 25 年 12 月時点の情報工学部教員数は、教授 21 名、准教授 21 名、助教 14 名の計 56 名である。授業を公開した教員は 53 名であり、割合は 95%であった。なお、複数名で担当する演習形式の授業は全教員を公開者とみなした。これら情報工学部教員の公開授業を情報工学部から 35 名（いずれも延べ数）が参観した。他学部からの参加者はいなかった。一方、他の教員の授業を参観した情報工学部教員の数は 37 名であり、うち 3 名が他学部の授業を参観した（下表参照）。全教員に対する割合は 66%である。

表 2.2-2-1 情報工学部教員の科目群別参観者数の年度別変化

参観科目群	H25 年 (11 月)	H24 年 (6 月)	H23 年 (10 月)	H22 年 (11 月)	H21 年 (12 月)	H20 年 (6 月)	H19 年 (11 月)
I. 数学と物理	0	3	5	2	5	1	8
II. ソフトウェア	0	4	0	2	4	5	11
III. 工学系基礎	3	3	2	2	3	12	12
IV. 実験・演習	22	11	13	13	8	4	6
V. 専門的教育	6	13	12	14	8	23	10
VI. 全学教育等	3	1	0	7	8	9	6
他学部	3	5	3	2	0	0	0
合計	37	40	35	42	36	54	53

授業公開教員数は例年並み、参観教員数は横ばいである。カテゴリー別では「実験・演習」の参観者が増加している。公開者・参観者とも若手が多いことから、若手の間で授業改善への意識が高いことが読み取れる。また、「他学部」については他学部への参観者数、他学部から情報工学部への参観者数ともに横ばいである。

②実施結果

先に述べたように、授業を参観した教員は「参考となった点・工夫が見られた点」と「改善につながる助言」の 2 項目からなるレポートを授業公開教員に提出し、これに対して授業公開教員が返答するというやりとりが行われた。参観教員から授業公開教員に提示され

た 2 項目の内容は主に以下の 5 つに分けられる

- 1) 授業の展開（進め方），指導方法，教員の態度（話し方など）
- 2) 宿題・レポート
- 3) 教材やその提示方法，板書
- 4) 内容
- 5) 設備等

以下では，参観教員からの具体的なレポート内容について「参考となった点・工夫が見られた点」と「改善につながる助言」の項目ごとに紹介する。

◎参考になった点，工夫が見られた点

〈授業の展開・指導方法：全般〉

- ・講述する流れにストーリー性がある。
- ・実験項目については十分に吟味されており，充実した内容になっていると感じた。
- ・実験の進捗や理解度を見ながら進められており，メリハリの利いた授業になっている。
- ・全体的に理解が間に合う速度でゆっくりと説明していた。
- ・授業中，簡単な問題を学生に当てて答えさせることで，適度な緊張感を出していた。
- ・板書速度が学生が追いついて行きやすい速度になるよう気を遣っている。
- ・適度に学生を指名することで緊張感を出している。
- ・定義や仮定について，ていねいに説明しており，教科書の対応式も明記してわかりやすく工夫されている。
- ・実験に使用するパラメータを学籍番号で決定しており，学生個別の実験データが得られる工夫があった。
- ・板書の文字の大きさは最後部席からも読めるように配慮されていた。
- ・説明に沿った課題，例，復習課題等を用いて分かりやすく説明されていた。
- ・重要な図面を選択して板書されており，後の説明においても，加筆しながらその図面を使うことで，学生がノートを取りやすい配慮がなされていた。
- ・煩雑な式が，一番後ろの席からでも，見やすい大きさと板書されていた。
- ・学生の質問に具体的な手順や説明を加えながら対応しており，進度の遅い学生に手厚い。
- ・現代的な言語を使用して，学習しやすいよう配慮している。

〈授業の展開・指導方法：前回の復習〉

- ・以前に講述した密接に関連した内容との関連性を強調しながら，講義を進めている。
- ・最初に現在の授業の進行状況を確認し復習をしている。
- ・最初に，教科書ページを明示している。また，前回の復習をして確認している。

〈授業の展開・指導方法：講義中の練習問題〉

- ・非常に例題が多く，ヒントを適度に与え，学生が理解しやすく考えられている。

- ・学生を当てて、質問し解答することで、受講生全員が聴く環境を作られている。
- ・関数を自作させて挙動を理解させるのは良いトレーニングになると思う。
- ・一章が終わる毎に課題を与え、学習の定着を図っている。
- ・学生から感想を得て、理解度の不足等をフォローしている。
- ・毎回の授業時間中に、演習問題を解く時間を確保されているのはとても素晴らしい。
- ・学生が自分で手を動かしてものを作れるのは、学生の自主性を引き出すことができている。

〈授業の展開・指導方法：講義の要点の振り返り〉

- ・講義の後、関連した練習問題を課し、理解の度合いを確認させて理解を深めさせている。
- ・実験中に、時々、重要な点をホワイトボードで説明されているところが良かった。また、個々の学生に質問を行い、理解度を確認している点も良かった。
- ・重要項目や復習のポイントを明示されている。
- ・時間の終わりに小テストをされて、学生の理解度をチェックされている。
- ・最後に講義の理解度を確かめ、講義内容を定着させるための小テストが行われ、添削答案が次の講義で返却されていた。
- ・時間の終わりに小テストをすることで、学生の理解度をチェックされていた。また、採点をした前回までの小テストを返却されており、学生が復習しやすい状況を作っていた。
- ・コンテストに向けてのロボット製作に学生同士が協力し、学生に対する教員・TAの質疑応答等のサポートにより、自主的に課題に取り組めるように工夫されていた。
- ・演習で用いていた学生への課題が面白そうな内容となっており、課題に取り組みやすい。
- ・演習開始後 30 分程度は小テストあるいは課題の時間となっており、学生が周囲と相談せず一人で考える時間が設けられている。
- ・プログラムの書き出しの部分のみ実演してみることで、学生がスムーズに演習を開始できるような配慮がなされている。
- ・成績評価における割合が、課題レポートに比べて授業内課題の方が大きく、実力が成績に反映されやすい評価方法となっている。
- ・本演習は、講義と実装方法の演習が一体化されていて、非常に理解が深まる。
- ・重要な事項を明確にしながら説明されていた点
- ・写真や動画、さらに実験データや理論などをうまく組み合わせた授業内容で、学生の興味を十分に引き出していた。
- ・心理学の基礎的な内容の講義でしたが、学生の興味を持続するように、身近なもの（調理）に置き換えたり、学部の特性に沿った例示をしたりしながらの説明で、理解を図られていた。

〈レポート・宿題〉

- ・演習問題について、学生から回収したままではなく、採点済みの答案用紙のコピーを返

- 却されているため、配布された解答例を見て、間違えた箇所を学生自身が確認できます。
- ・レポート課題等で学習内容の確認を行うとともに予習復習の遂行を促していた点。
 - ・あまり良くないプログラム例を示し、解説していた。

〈教材・教材提示〉

- ・PowerPoint 資料の投影先がホワイトボードであることを利用し、必要な説明を直接書き込むという効果的な説明方法がよかった。
- ・実際のトランジスタのパラメータを用いてイメージがつかみやすく説明がされていた。
- ・随時内容を更新する自作印刷物を教科書として、進歩の速い工学の世界に柔軟に対応。
- ・プログラミングの入門程度から実用サービスの初歩を繋ぐための段階の置き方や外部ライブラリ等の選定に感心させられた。
- ・Web 技術など身近なものと同リンクするよう課題が構成されている。
- ・黒板の板書は丁寧で文字は大きく、最後列からでも問題なく読めました。
- ・身近でありながらプログラムの基本が押さえられる課題が設定されている。
- ・ミニツペーパーを活用していた。
- ・身近な話題と関連付け、実例を挙げて説明することで学生の興味を引いており参考になった。
- ・実験指導書の内容が非常にわかりやすく記載されていた。
- ・学生 1 名に 1 台の実験機器が用意されており、学生の学習意欲を高める配慮がされていた。
- ・前回まで講義内容について丁寧に復習がなされており、学習の定着化に有効である。
- ・出席管理が学生証でひとりずつ、自動的に効率よく確認されており参考にしたい。（これは大学あるいは学科で用意しているシステムなのでしょうか？）

〈講義内容〉

- ・新しい言語である Ruby を用いて Web ベースのサービスを実装する段階まで体験的に学習させる点に大変興味を惹かれた。
- ・説明に沿った課題、例、復習課題等を用いて分かりやすく説明されていた。
- ・関数を自作させて挙動を理解させるのは良いトレーニングになると思う。

〈学生の態度〉

- ・学生の態度やモラルも注意深くチェックされ、すぐ注意されているのは非常に良い。
- ・ほとんどの学生が最後まで集中力を切らさず受講していたのが印象的でした。
- ・1 班 2～3 人と少なめで、全員が実験に参加している様子が見られた。
- ・私語が少なく、学生が真面目に取り組んでいる雰囲気がとても良かった。
- ・5 限にも関わらず、受講者数が多いのに驚きました。

〈設備・TA の活用〉

- ・少人数（2～3 人）のグループ編成であり，それぞれの学生が積極的に実験に取り組めるように配慮されていた。また，TA も雇用されており，指導体制も整っていた。
- ・受講学生に対する TA の割り当てをあらかじめ決めることで，TA が学生の理解の状況などを十分に把握することができ，効率的な指導が可能となっている。
- ・学生に対してのきめの細かい指導やアドバイスが行われている。

◎改善につながる助言等

〈授業の展開・指導方法〉

- ・練習課題の解説は，もう少し時間を置いた方がいい。
- ・事前準備として，過去のデータの削除などの準備をされていたほうがよかった。
- ・学生への質問で，答えが間違っているとき，わかった学生に答えさせると学生の参加意識がより高まるかもしれません。
- ・理解できたかの確認やフォローがあってもいいかも知れません。
- ・実験と関連する実際の応用事例が説明されていれば，より興味をもって実験を行える。
- ・関連講義とのリンクが図られていけばもっと有意義な授業になる。
- ・時間の関係で難しいとは思いますが，いい例や悪い例を全員（あるいはレベル別のグループ等）で共有する時間があれば良い（他人のプログラムを読むのも練習になる）。
- ・学生同士でそれぞれの設計について議論できる場があれば，その題材についてどのような設計が適切であるかさらに理解が深まる。
- ・設計物に関しての，学生の設計指針を明確化させるとともに，評価についても，発表会等での議論等により，学生に社会ニーズの高い本技術に高い興味や向上心を植え付けていける。
- ・他大学との情報交換等を積極的に進めれば，より高いクオリティの演習を目指せる。

〈レポート・宿題〉

- ・3 週間分の実験を 1 通のレポートにまとめて提出させるというお話でしたが，課題が多くなるということでしたので，2 回または 3 回に分けてレポートを提出させると良い。

〈学生の態度〉

- ・授業中，講義室への出入りの多い学年ですね。学生自身の自覚の問題です。
- ・説明中，関係ない web ページを閲覧している学生・寝ている学生が数名いたようでした。定期的に TA を歩かせてみるとよい。
- ・学生が教室後方に固まって座っており，もっと前方に座らせるようにする。
- ・学生への問いかけ，インタラクションを増やす。

〈設備・TA の活用〉

- ・演習室の環境によるものだが、プログラムの動作を確認しながら実行できるデバッグツールなどがあると学生の理解に有効に思う。
- ・情報工学部の教員間でプログラムの演習問題をシェアし合えるような仕組みがあると、課題の作成に便利になる部分もあると思いました。
- ・教員の負荷を減らすために、TA の雇用が必要。

③まとめ

実験や演習の公開授業が多く、参観者も多かった。他の学科からの参観も多かった。これは助教が自分の演習の参考にしようと他学科の実験・演習の参観に行くケースが多いためと思われる。一方、講義については、参観者ゼロの公開授業が多い。これは、座学では工夫の余地が少ないうえ、数学が多く抽象的である、内容の想像がつく、などの原因によるものと思われるが、参観者を増やす努力が必要であろう。

表 2.2-2-2 公開授業と参観の概要 (情報工学部)

公開対象の科目			参観教員数							
授業科目名	教員	形態	計	分類法A				分類法B		
				教授	准教授	講師	助教	学科内	学部内	学部外
【情報通信工学科教員による科目】										
情報通信工学実験 IB	國島	実験	2				2		2	
情報通信工学実験 IB	武次	実験	2				2	2		
情報通信工学演習 B	坂口	演習	1				1		1	
基礎電磁気学	末岡	講義	3	1	1		1	2	1	
基礎電磁気学	坂本	講義	1				1		1	
波動情報システム	岸原	講義	1	1					1	
情報通信工学実験 IIIA	荒井	実験	3	1	1		1	3		
波動工学	福島	講義	1		1			1		
電子回路(スポーツ)	大久保	講義	1		1				1	
半導体工学 II	伊藤	講義	2	1	1			2		
情報通信工学実験 IIIB	滝本	演習	1		1				1	
小計			18	4	6	0	8	10	8	0
【情報システム工学科教員による科目】										
ソフトウェア演習 II	横川	演習	2	1			1	1	1	
回路デザイン演習	佐藤	演習	2	1			1	2		
システム創造プロジェクトII	福田他	演習	2	2				2		
ソフトウェア演習 I	天寄他	演習	2				2	1	1	
小計			8	4	0	0	4	6	2	0
【スポーツシステム工学科教員による科目】										
機構学	井上	講義	1				1	1		
スポーツの科学	高戸	講義	2	1	1			2		
心理学入門	迫	講義	1	1				1		
システム設計実験	島崎他	実験	1		1			1		
スポーツ計算科学演習	大山	演習	2	2				2		
ソフトウェア演習 II	山内	演習	2				2	2		
小計			9	4	2	0	3	9	0	0
合計			35	12	8	0	15	25	10	0

[デザイン学部]

①実施概況

(デザイン工学科)

デザイン工学科の教員総数は、授業公開時に休職者1名を除いて計19名(教授:6, 准教授:8, 講師:1, 助教:3, 助手:1), 授業公開教員:延べ17名(2科目を公開した者がいるため, 実数は16名), 参観教員:延べ7名(2科目を参観した者がいるため, 実数は6名)であった。

授業の公開を申告した者の実数16名は全体の84%, 授業を参観した者の実数6名は32%(教授:2, 准教授:1, 講師:1, 助教:2)であった。

(造形デザイン学科)

造形デザイン学科の教員総数は、授業公開時に休・停職者2名を除いて計20名(教授:8, 准教授:7, 講師:2, 助教:2, 助手:1), 授業公開教員:20名, 参観教員:13名であった。

授業の公開を申告した者の実数20名は学科教員全員, 授業を参観した者の実数13名は65%(教授:5, 准教授:5, 講師:1, 助教:2)であった。

両学科を通じて、最も多くの参観者を集めた科目は「ITメディア論(嘉数彰彦教授)」だった。

②実施結果

レポートの設問1「授業参観を通して参考になった点, 工夫が見られた点」を「授業の内容と構成」「教材の内容と提示方法」「指導技術」に大別すると, 主な指摘は以下のとおりである。

◎参考になった点, 工夫が見られた点

〈授業の内容と構成〉

(工学)・「小規模多機能福祉拠点」というテーマは, 私達の身近な生活の共有の観点から, 理解しやすく, 興味深い, 未来志向的なテーマとして, とても良かった。

(工学)・Homework未提出者に対してペナルティをキチンと課していること。

(造形)・重要な点を何度も授業中に繰り返し, 印象深く強調された点, ポイントを掴みやすい。

(造形)・復習・次回の予告もあり, 授業の内容が定着しやすい。

(造形)・学生の発表(コメント)時間を短時間に区切ったことで, 学生自身が制作のねらいや反省点がわかりやすく話すことができるようになったように感じた。

(造形)・先に十分な説明を行い, 興味を持たせると共に, 注目点を明らかにしている。

(造形)・学生にワークショップを体験させながら幼児教育のあり方や, どのようなポイントがあると子どもが興味を持ちやすいのか等の要点が分かりやすく説明されていた点。

(造形)・時間内に学生プレゼン, 講義, 演習を組み込んでいる。

- (造形)・実例や自分の体験を交え解りやすい説明であった。
- (造形)・最近の動向を踏まえての説明であった。
- (造形)・理論をより実践につなげるために演習課題も組み込まれている点。

〈教材の内容と提示手法〉

- (工学)・来年度以降に進展する製品デザイン系演習と情報デザイン系演習のアプローチの違いが実際に把握でき、将来的なデザイン教育計画の具体的な策定について有意義な経験となった。協力頂いた授業担当教員には感謝を申し上げたい。
- (造形)・質問後、かなり考える時間を学生に与えておられた。私はすぐに解答を言ってしまう方なので、待つことの大切さを感じた。
- (造形)・課題の目的や、自己作品の確認をさせるために、記録用プリントを配布している点。
- (造形)・映像を用いて具体的な事例についての説明を試みようとしていた
- (造形)・映像素材としてYouTubeを利用することで、自宅でも復習できる配慮がなされていた。
- (造形)・実践的なアドバイスが体験の中で紹介されており、学生が子どもに向けてワークショップを行う際に、問題となりそうな箇所へのフォローがされていた点。
- (造形)・身近な例で理解を深める工夫をしている。
- (造形)・より知的好奇心の高い学生には原著の書籍など図書館での自主的学びを促している点。

〈指導技術〉

- (工学)・学生をグループに分けて発表させることは効果的であった。
- (造形)・一枚の用紙で学生の卓上名札を作成させ、名前を呼んで指名されたこと。
- (造形)・名札と出席表と発言チェックを兼ねている三角折りの用紙に感心しました。
- (造形)・学生に発言を促すことで、その本質はコミュニケーションにあることを講義の進行に取り入れながら、無理なく学生に理解させているのが印象的でした。
- (造形)・解説も英語で行っていること。中級を履修している学生のせいかな、一定のやる気を持っており、英語での解説が自然に受け入れられていた。
- (造形)・学生のコメントの中から、キーワードを取り上げそこを起点に講評をすすめる方法。
- (造形)・学生一人ひとりに他の学生の作品に対する意見を書かせていた点。
- (造形)・出席簿代わりに名札をつくり、更にそこに授業での発言回数に応じて捺印し、授業への学生の積極的参加を促すとともに公平かつ効率的な評価方法を実践されている点。
- (造形)・授業に参加することが学生の義務という最初の教員と学生のコンセプトの一致が感じられ、学生が積極的に参加しているし、教員も発言が苦手な人には作図等の場面で参加して等と学生の気質にも配慮し、学生の参加を促している点。

◎今後の授業改善につながる助言等

(工学)・自分以外の学生発表と、そのやり取りについては、学生がノートに記載しない傾向がありました。これは本授業に限らず、現在の大学生全体に想定できる問題です。本学全体のキャリア教育のあり方として（多くの大学で大学での教育の態度やメモの重要性、レポートの書き方等の授業が全学科目のキャリア教育として実施されている）、就業力育成の観点からも全学的な学習態度の育成は急務と思えます。

(工学)・教室の日当たりが必ずしも良くない事も有り、十分に暖かい環境が確保できていた様には感じられません。ここ数日の天候を考えますと、例え11月の初頭であっても暖房が無ければ、授業環境の確保が極めて困難と思われれます。早急に全学的な対応が求められると思います。

(工学)・テクニカルな用語について、少し難解に思える部分も有りました。来年度以降はコース教育の領域教育への統合が予定されており、一層の用語の解説への留意が必要。

(造形)・発言をポイント制にされ、学生が発表をよくしていた。

(造形)・ポイント制は回数の確認と表として纏めるのが大変な作業だと思います。何か良い方法をお持ちでしたら、教えていただきたいと思いました。

(造形)・50人という人数の多い場合の講評の際、観ている側の学生の集中力を維持させることが難しい。限られた時間の中で工夫することは難しいと思いますが、気分やリズムを変えるとといった方法も考えられるのではないかと。

(造形)・事前説明でも十分に理解できるが、内容が多岐にわたっているため、それぞれのポイントごとに具体的事例に関する映像などを見せたほうが、イメージ力が弱い、あるいは知識が不足している学生にも理解させやすいかもしれない。

(造形)・メモすべきポイントをその都度指摘する方が、居眠り防止に繋がるかもしれない。

(造形)・赤色レーザーポインタを使用されておられましたが、できれば緑色に変更された方がよい。緑色の方がコントラストが高く見易いらしい。

(造形)・スライドの本文テキストの文字がやや小さい。後方の席からは若干見づらかった。

(造形)・後方の席に数人寝ている学生がいた。学生に緊張感を持たせる工夫があるとよい。

(造形)・最後に学生同士で作品を鑑賞または発表する時間を設けてもよい。

(造形)・スクリーンの位置（プロジェクション画面との位置関係）に注意。

(造形)・スクリーンの文字はもう少し大きい方がよい。青バックに墨文字は読み取りにくい。

(造形)・動画の画面はフルスクリーン表示の方がよい。

(造形)・受講者各自の発表がなされていたが、小さなテーマを設定してから、それより大きめのテーマとして発表をまとめさせた方がよいと感じた。デザインの感性的な面として情緒的であるのは良い所だと感じた。発表内容については、発表者自身の語彙の少なさに左右されており、その情緒的な部分の良い面が現れていないと感じたので、まずは制限的な部分でまとめることを行い、そののちに少し大きめのテーマに取り組むとよい。

(造形)・重要なキーワードの一般的な定義に相当する説明があると、内容が整理できる。
(造形)・プレゼンテーションに関することを理論的に学生に伝えることは非常に難しいと
常々感じているが、今日の講義をとおして、基本理論を示すだけでなく、演習を講義で
も併用していくことで、学生の理解度・到達度を確認しながら進めていくことが可能だ
と学ぶことが出来た。

③まとめ

デザイン工学科においては、授業公開率は高かったが、公開期間を長く設定したにもか
かわらず参観率が低いままに推移した。この理由として、教員内に、参観はすでに一巡し
た、参観すべき、あるいは参観したい授業はすでに参観した、という感覚が醸成されてい
るのではないかと推測される。参観教員延べ7名中、他学科、他学部の科目を参観した者
が、延べ3名であったことが、その推測を裏付ける。(公開科目のうち、学生による授業評
価の高い科目をそれと判るように明示したが、参観者を増やすことにおいてほとんど効果
は無かったと判断される。)

造形デザイン学科の授業公開率は100%であったが、公開期間を長めに設定した上、参観
を促す事前の告知を数回行ったにも関わらず、参観率は65%でとどまった。この理由とし
て、デザイン工学科と同じく、参観すべき、あるいは参観したい授業がないという意識が
あったのではないかと推測される。これは、授業評価の高い科目を明示したにも関わらず、
効果がなかったことから伺える。また、学校運営業務が重なり、参観する時間が取れない
という声もあった。

デザイン工学科及び造形デザイン学科においては、4コマ連続の実習科目があり、教員
によってはこの種の科目を半期に2科目担当するなど、空きコマがもともと少ないケース
があり、しかも時間割全体が大きく再編成されない限りは、自分の空きコマとその時間帯
に開講されている科目のコンビネーションは毎年同じである、という状況に変化が生じな
い。

来年度は、新カリキュラムに従う学生が2年次に進級し、実習科目を含めて新科目が増
え、時間割も再編されるため、この状況に変化が生じ、授業参観率の改善が期待される。

表 2.2-3 公開授業と参観の概要 デザイン学部

公開対象の授業科目			参観教員数							
授業科目名	教員	形態	計	分類法A				分類法B		
				教授	准教授	講師	助教	学科内	学部内	学部外
【デザイン工学科教員による科目】										
設計製図 IV	福濱	演習	2	1			1	2		
立体構成演習	金丸	演習	1				1	1		
英会話 II	ブル初	演習	2	1	1					2
プロダクトデザイン実習 IV	村木	実習	1		1			1		
プロダクトデザイン実習 IV	奥野	実習	1		1			1		
小計			7	2	3	0	2	5	0	2
【造形デザイン学科教員による科目】										
デザイン材料演習 II	難波	演習	2		2			2		
保育内容 I (造形表現)	関崎	実習	2		1		1	2		
テキスタイルデザイン実習 II	島田	実習	1	1				1		
グラフィックデザイン実習 II	野宮	実習	1				1	1		
プレゼンテーション論	助川	講義	3	1	2			2		1
インタラクティブデザイン I	山下	講義	2	1	1			1	1	
中級英語 II	佐野	講義	2	1	1			1	1	
色彩計画演習	山下	演習	2		1	1			2	
ITメディア論	嘉数	講義	4	1	3			1		3
小計			19	5	11	1	2	11	4	4
合計			26	7	14	1	4	16	4	6

2-3 授業評価アンケート

本学では、FD活動の一環として、平成15年度に授業評価アンケートを試行し、平成16年度より定期的（毎学期末）に授業評価アンケートを行っている。授業科目ごとの集計結果は各授業担当者にフィードバックし授業改善に活用してもらうとともに、これらのデータに基づいた評価尺度の妥当性・信頼性の検討、評価得点の経年変化の吟味など統計的分析も随時行っている（教育年報2004, 2005, 2006参照）。また、組織的（学部・学科・コース・カテゴリー別授業科目単位等）な教育改善の資料として用いられてもいる。ここでは、前年度の報告（教育年報2012）以降の平成24年度後期と平成25年度前期の授業評価アンケート結果の概要を述べる。

なお、平成21年度に本学全教員を対象に「『学生による授業評価アンケート』の改善に関する調査」を実施した（集計結果の詳細は、教育年報2009参照）。平成24年度後期及び平成25年度前期の授業評価アンケートの結果は、以下の6項目に基づく3年目の比較になる。

授業評価アンケート共通6項目

-
- | | |
|----|------------------|
| 問1 | 受講して知的刺激を受けましたか |
| 問2 | 真剣に受講しましたか |
| 問3 | 教員の熱意が感じられましたか |
| 問4 | 学生の理解度に注意していましたか |
| 問5 | 授業の進め方は丁寧でしたか |
| 問6 | 総合的に判断して満足しましたか |
-

（1）授業評価アンケートの実施方法・活用方法

原則として全授業科目（非常勤講師担当科目を含む）を評価対象とするが、学外実習をともなう科目や履修者が4人未満の科目などは、本学統一様式によるアンケート対象からは除いた。全授業科目で共通に行う6項目の他に、学部・学科及び全学教育研究機構独自の項目が設定されている。ここでは共通6項目のみを扱うこととする。

アンケートは授業科目ごとに全受講生を対象として無記名・自記式（5段階評価、マークシート方式）で学期末に実施した。回収されたアンケートは評価委員会が集計し、後日、統計処理した資料を授業担当者に送付している。学部・学科・コース・授業科目によっては、これらの資料に基づいた授業改善策などの検討が行われている。

（2）アンケート集計結果の概要と課題

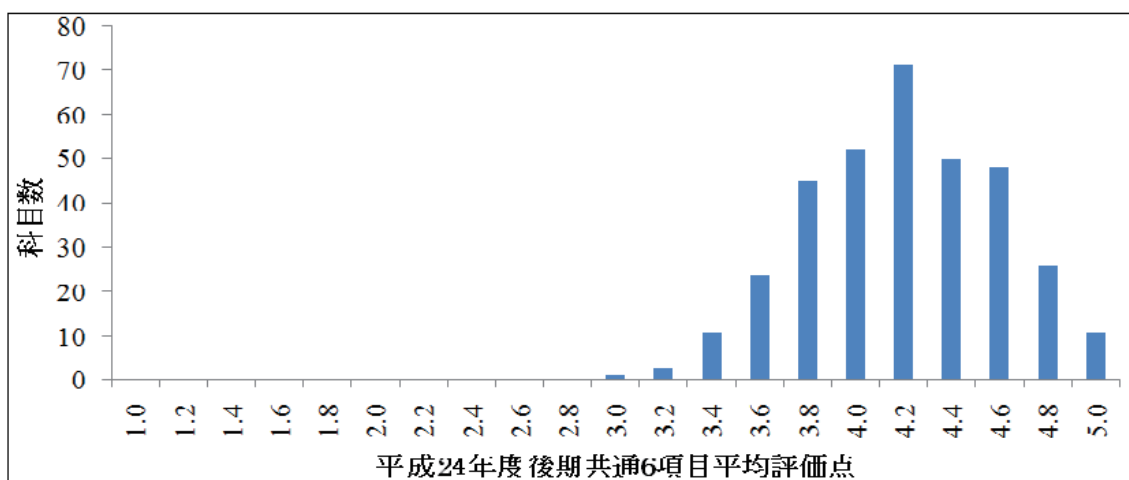
平成24年度後期の実施科目数は342科目（実施率97.7%、延べ実施教員数169人、延べ受講者数12,404人）であった。平成25年度前期の実施科目数は380科目（実施率96.4%、延べ実施教員数168人、延べ受講生数15,189人）であった。なお、実施教員数は授業担当代表教員でカウントしている。

平成24年後期と平成25年度前期に実施した授業評価アンケートの平均評価点の分布を

図にヒストグラムで示す。前回報告した平成 23 年度後期と平成 24 年度前期の共通 6 項目の全科目平均得点は 4.07 (SD=0.42) , 4.09 (SD=0.41) だったが、今回の点はそれらとほぼ同じである。

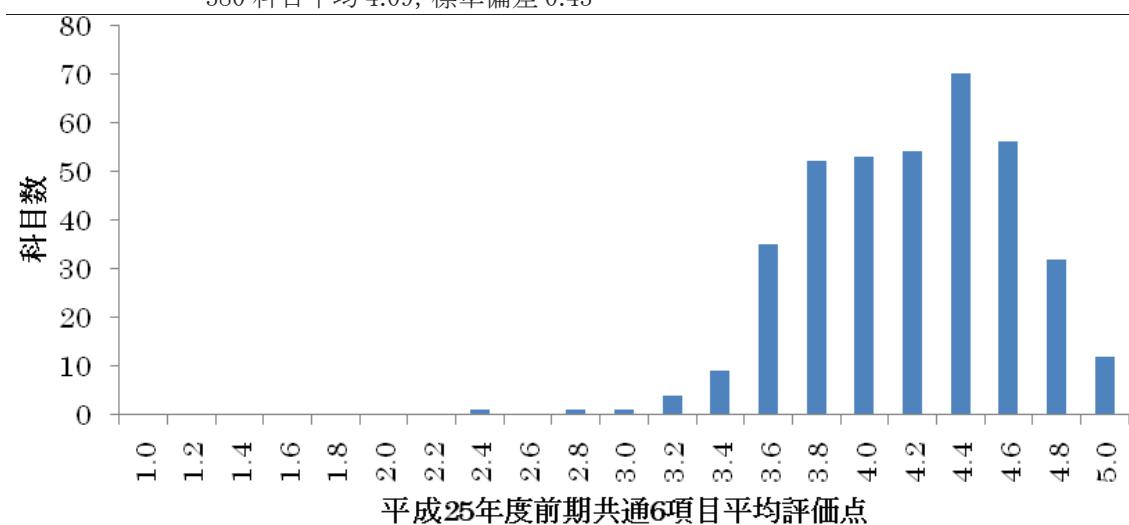
平成 24 年度後期「授業評価アンケート」集計結果

対象科目数 350 科目 実施科目数 342 科目 (実施率 97.7%)
 登録学生数 15,267 名 実施学生数 12,404 名 (実施率 81.2%)
 対象教員数 174 名 実施教員数 169 名 (実施率 97.1%)
 (うち、本学対象教員数 127 名 実施教員数 126 名)
 342 科目平均 4.09, 標準偏差 0.40



平成 25 年度前期「授業評価アンケート」集計結果

対象科目数 394 科目 実施科目数 380 科目 (実施率 96.4%)
 登録学生数 17,963 名 実施学生数 15,189 名 (実施率 84.6%)
 対象教員数 176 名 実施教員数 168 名 (実施率 95.5%)
 (うち、本学対象教員数 126 名 実施教員数 125 名)
 380 科目平均 4.09, 標準偏差 0.43



授業評価アンケートの自由記述部分について

1 自由記述の数実施科目 380 科目中の 64%にあたる、244 科目に記述されており、全 914 件の自由記述があった。(一科目当たり最大 25 件)

2 各教員へのフィードバック

自由記述については、本人分の全ての記述を各教員へフィードバックしている。

3 自由記述の例

- ・授業で使うスライドを配ってもらえるので、授業が聞きやすかった。
- ・とてもいねいな説明でわかりやすかった。
- ・先生の熱意を感じました。とても良い授業でした。
- ・楽しかったです。自分の実力のなさを知ることができました。
- ・分かりやすく面白い授業でした。ありがとうございました。
- ・出席はきちんととってほしい。
- ・自分中心の授業ばかりで、もう少し学生の意見を聞いて欲しい。
- ・宿題を出すならば、レポートのようにしっかりと採点するべきだと思う。
- ・話がつまらないので、もっと刺激のある授業にしてほしい。

4 学生へのフィードバック

学内専用(在学生)ホームページへ次の 3 点を掲載することにより、学生へフィードバックした。

(1)集計結果の概要

(2)自由記述について、全ての記述を各教員へフィードバックしていること。

(3)重要なものについては、大学として適切な対応を行うこと。

2-4 FD研修会・講習会

- 1 日 時 平成 25 年 9 月 17 日 (火) 14:20～15:50
- 2 場 所 学部共通棟 (北) 8201 講義室
- 3 参加者 教職員 94 名 (うち事務職員 11 名)
- 4 講 師 富山大学 大学教育支援センター 橋本 勝 教授
- 5 演 題 学生参画型FDと授業改善の融合を目指して
～楽ティブラーニング／UD／新・橋本メソッド～

6 概 要

- ・学生参画型FDを展開するには、理屈ではなく感性で、他大学を利用する、やりながら考えること・・・等がコツ.
- ・もっと気軽に楽しめるアクティブラーニング (楽ティブラーニング) を目指してもいいのではないかとの発想で、「楽しい授業」を構想することが重要.
- ・教員一人ひとりに、また、岡山県立大学にマッチした「楽ティブラーニング」が必ずあり、それを探ることがFDの目的.
- ・楽ティブラーニングの代表例が橋本メソッド (多人数討論型授業), その進化形が新・橋本メソッドで、毎回メンバーを変えてより多くの知的刺激を受けることに主眼を置く.
- ・大切なのは、教員が学生と一緒に授業を楽しむ姿勢, 教育は学生と一緒に創る知的営為で、教育サービスの提供者・受容者という関係ではなく、協働で創り上げる関係.

平成 25 年度FD研修会アンケート集計結果 (2013. 9. 17)

保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	事務・部署	その他
28	22	17	11	2

教授	准教授	講師	助教	助手	管理職	管理職以外
17	23	6	13	4	0	7

無回答 10

1.講演についてご意見を聞かせてください(n=80) 参加者名 94名／アンケート回収率 85.1%

1) 今回の講演のテーマについて

1. とても満足	2. 満足	3. どちらとも いえない	4. 不満	5. とても不満
11	46	20	2	1

2) 講師の説明について

1. とても満足	2. 満足	3. どちらとも いえない	4. 不満	5. とても不満
14	51	12	1	1

無回答 1

3) 講演の長さについて

1. とても長い	2. やや長い	3. ちょうどよい	4. やや短い	5. とても短い
5	16	55	4	0

4) 講演全体について

1. とても満足	2. 満足	3. どちらとも いえない	4. 不満	5. とても不満
11	43	23	2	1

2. 今回の FD 講習会は全体を通して有益だったでしょうか (n=80)

1) 有用性について

1. とても有用	2. 有用	3. どちらとも いえない	4. あまり役に 立たない	5. 全く役に 立たない
11	45	20	3	1

<主な理由>

- ・ 学生と共に授業を作っていく事の重要性を理解できた.
- ・ 授業の視点の置きどころがはっきりしたと感じる.
- ・ 学習意欲の低い学生に対しての対応のヒントを頂きました.
- ・ 今の本学にはない考え方に触れられて新鮮だった.
- ・ 担当講義の内容検討に参考になりました.
- ・ いかに学生に当事者意識をもたせられるか考えさせられた.
- ・ 導入としては良いが、具体的な内容説明がもう少し欲しかった.
- ・ 明快で分かり易かったです。現実的には学生主体の取り組みも難しいです.

3. 今後、ご自分の授業で橋本メソッドを活用するお考えはありますか。 (n=80)

1) 活用する考えについて

1. 是非活用 したい	2. できたら活用 したい	3. どちらとも いえない	4. あまりその気 はない	5. 全くその気 はない
4	29	29	4	3

無回答 11

<意見>すでに自分流で実施している.

4. 今回の FD 活動に対する感想、意見を自由にご記入ください

<主な感想・意見>

- ・ 学生参画型 FD に興味を持った.
 - ・ 理想的な教育の方法を実践していることがすごいと思いました。しかも、大人数 100 人を超えてというのが驚きでした。できるかどうかは分かりませんが、何を教えるべきかということとバランスをとって、自分なりの授業を作っていきたいと思いました.
 - ・ 私は講義を担当はしていませんが、専門教科の実習を担当しています。学生の主体性ということも含め、学びの主権者としてきちんと尊重することなく、学びの強制を求めていることもありました。(楽)ということを学生に考えられるよう、学生にどうあると実習が(楽)しめるのか、一緒に考えていこうと思います.
- 何よりも大学教員として学生と共に頑張ろうと思いました。ありがとうございました.

- ・ 人と話が出来る授業のあり方. 学生が主体になれる授業などヒントがあった.
- ・ 意識的に割愛されたようでしたが, 授業の工夫 (内容) 自体の紹介もいただきました.
- ・ メソッドの実践映像があれば, より理解できたように思います.
- ・ 講師以上の先生と助教・助手では, 教育で担う役割も違うと思うので, それぞれ分けて実施していただければいいなと思います.
- ・ 「学び方」の学び (含む課題発見) に関する科目から導入を検討しても良いのではないかなと思った.
- ・ 講演の組み立て, 演出等が以前受けた講演 (個人的に) に近いものがあり, あまり新鮮さを感じなかった.
学生参画型のFDは, 少人数ではあるが実践している. 小規模では可能だが, 大学全体となると難しいと感じる.

5. 今後のFD研修会について, とりあげてほしいテーマがあれば, 具体的にご記入ください.

<意見>

- ・ 橋本メソッドの具体的な実践内容.
- ・ 大学教育の本質について深く考えさせるような講演を聞きたいと思います.
- ・ アクティブ・ラーニングの具体例.
- ・ 必修の授業に対して学生がどうしてもやる気がない場合はどうすればよいか.
- ・ 学生が生き生きと学んでいると評価される授業担当者 (学内外) の事例報告など.
- ・ 「実学」を推進するための参考となる講演など.
- ・ 学生参加型FD活動の実践を期待しています.

<その他理由・感想・意見>

2. 今回のFD講習会は全体を通して有益だったでしょうか

1) 有用性について

- ・ 授業の教え方のヒントになった.
- ・ 分かりやすかったから.
- ・ 自分が今まで考えていたこと, 求めていることとほぼ一致していたので, 進んでいく先に希望を見出すことができました.
- ・ 楽ティブラーニングについて, もう少しお聞きしたかったです.
- ・ 講義を担当されている主担当の先生がお聞きになられたほうが即活できるお話だと思いました.
- ・ 未知の事であったから.
- ・ 基本的なFD→アドバンスド型FD, 転換のヒントがあった.
- ・ 今後の参考になった.
- ・ 今まで知らなかった事柄だった
- ・ 岡山大という近くの大学の事例を聞いた点は良かった.
- ・ 言わんとすることはわかったが, 具体的なイメージがつかめなかった. 参考図書を読んで判断したい.
- ・ 専門教育に関わる教員に対して刺激があったとすれば有用.
- ・ FDの概要説明 (知識取得) レベル, 具体的理解を得ることが出来なかった.
- ・ 本学においても活用の可能性は高い為.
- ・ 既に同質の授業を行っているから.

- ・ 今後のFDのあり方について考えさせられた。
- ・ 授業のやり方についてのヒントがあった。
- ・ 事務系職員には不要であると思われる。
- ・ FDに対する知識（学生・市民の参画）を得ることができました。
- ・ 具体的なお話の実例を伺いたかったです。

4. 今回のFD活動に対する感想、意見を自由にご記入ください

<主な感想・意見>

- ・ もう少し具体的にお聞きしたかった。しかし、ヒントもありました。“楽しい授業”を考えてみたいと考えます。質疑のような内容はおもしろく思いました。
- ・ 橋本メソッドを使った授業の動画があると、なお、イメージがはっきりしたことと思います。
- ・ 橋本先生のお考えは理解できました。共感できました。私の授業に対する考えと似ていると思いました。90分のうち後半は橋本メソッドの具体例をうかがいたかったです。具体例を1つでもうかがうことができれば活用に向けて考えられたと思います。漠然としていたことが文字で表現されていたのですっきりしました。ありがとうございました。
- ・ 教員はどうしても良い見本を提示して教育するという方法を選ぶ傾向がありますが、最後に先生が回答して下さった内容を参考にさせていただきます。
- ・ 橋本メソッドについても聞きたかった。
- ・ 具体例なども説明があり楽しく参加させて頂きました。
- ・ 講義の内容について1例を具体的な内容でききたかった。
- ・ 予備知識がなかったので消化不足。
- ・ 教養教育向けならこれで良いのかもしれない。リベラルアーツを積極的に捨てた輩が失った物の大切さを分からず復興させても、さして意味ある結果にもならないのでは。
- ・ 具体的にはよく分かりませんでした。方向性としては賛成できました。
- ・ 授業法としての橋本メソッドの話も聞きたかった。
- ・ 橋本メソッドの具体的内容を聞きたかったです。
- ・ 工学系の先生は学生が好き勝手にテーマを発案することにあまり興味がないような気がする。というのも、おうおうにしてまだ知識の浅い学生に問題を創らせても教員から見れば浅い話しか出てこないからであり、それなら最初から基礎をガチガチに固めて管理した方がトータルではタメになると考えているように感じる。
- ・ FDとUDのとらえ方の違いによって、対外的な評価が変わるとは思えないですが、本学が一体となってあり方を考える良い機会かと思いました。
- ・ 学生参画型FDのコンセプトや有効性は実感できたような気がします。ただ、具体的にどうしたらいいかを考えると正直なところよく分かりません。⇒質疑応答の中に多くヒントがありました。ありがとうございました。
- ・ 具体的な内容について伺いたかった。
- ・ 質疑応答でわかってきた。
- ・ FD活動を「学生参加型FD」を主にその必要性和推移・展開について話していただいた。しかし、具体性に乏しく、「狙い、プラン、実行、成果」について理解できなかった。学生成長のポイントは、「授業を受けること」と「仕事をする事」と同じく認識する

ことにあるのではないか。その意味でFD向上のポイントは経営マネジメントにおける人づくり，出来る人材づくり，のポイントが大いに参考になると思う。

- ・ 優れた講師を選んで頂き，FD委員の皆様，担当事務局の皆様に感謝申し上げます。
- ・ 講義の時間が短かったのが難しいかもしれませんが，この講義自体も橋本メソッドで実施して頂き，橋本メソッドを体験してみたかったです。
- ・ 実績については十分ご説明をいただいたので，具体的な中身をご紹介いただけたら更に良かった（橋本メソッド，UDトーク）講師の先生の技術を目でみるのが良かった。抽象的な説明が多いということは「方法論」と言うには無理がある気もする（教員が広く実践するためにはなるべく定式化できた方がいい。）
- ・ 「橋本メソッド」について，もう少し具体的な説明を聞きたかった。
- ・ 学生が主体となって授業を作る点については同感であるが，学生が考えただけでは，学問としての展開がなされない（にくい）ものとなるのではないか。それでは学生の自己実現を満たすことにならないと思われる。
- ・ 学生が客観的な評価をどうするのか。いまの学生は夢がないとも聞く。学生の資質がまず問われるところではないか。
- ・ 大学における職務経験が短いこともあり，FDについて自分の業務に結び付けて聴くことがまだできませんでした。
- ・ 授業の具体的な手法の話や，大学内で実働（導入）に至るまでの大学内でのお話や流れなどをもっと詳しくお伺いしたかったです。
- ・ FDは“「学生・教員・職員」の連携”という根本的な部分が本学では達成できているのだろうか。“学生参画型”を取り入れる以前の段階なのではないだろうかと感じた。
- ・ 話が非常に分かりやすく最後まで楽しく聞くことができました。学生参画型FDや学生発案授業は非常に興味深く，本学でも実現できたら面白いと思います。
- ・ 本学では，学生の意見・要望は単なる「不平不満やワガママ」と思われがちで，本気で生の声を聞き，より良い大学に改善しようという意識が弱いので，そうではない「学生と大学は協働で創るもの」という視点を多くの教職員が耳にただけでも有益な時間になったのではないかと思う。

2-5 学外研修

(1) 岡山大学 FD 活動「桃太郎フォーラム XVI」

日時：平成 25 年 9 月 20 日（金）9:30～15:30

会場：岡山大学 創立五十周年記念会館・一般教育棟

FD 活動の参考にするため、岡大 FD 活動「桃太郎フォーラム XVI」に FD 委員長磯崎が参加。

1 午前：アクティブ・ラーニングの特別講演とシンポジウム

- 特別講演：林一雅氏から東大教養学部のアクティブ・ラーニング施設の紹介。
- シンポジウム：アクティブ・ラーニングについて、塚本真也教授と薬学部の学生の話があった。
 - ・教授の話：アクティブ・ラーニングと言っても、学生まかせにすることはよくない。
 - ・学生の話：授業の効率を考えると、すべての授業ですべての時間にアクティブ・ラーニングを行う必要はない。学生も望んでいない。

2 午後：授業評価アンケートの分科会（座長：山下登教授）

- 現行のアンケート項目は 8 つあるが、相関が高く、主成分分析によると 1 次元で十分。そこで 5 段階評価は総合評価ひとつにして、良い点・悪い点を選択式にする方向で検討中。
- 板書や発声などの技術的な問題は、中間アンケートを行って、早めに修正すべきである。
- オンラインのアンケートでは、自由記述欄への記入が少ない。
- 語学系は 5 段階で 4 以上、数学系は 4 未満になる傾向があり、教員評価への導入は慎重にすべき。
- 学生の成績の平均点と授業評価アンケートの平均点の間には相関がない。
- 教育学部 3 年の学生からの意見
 - ・学生はアンケートの意義がわからない。授業の改善にどう生かされているかが学生にわかるようにしてほしい。
 - ・学生はアンケート疲れしている。アンケートに答える時間も短すぎる。アンケート中に見まわらないでほしい。
 - ・何を「普通」と考えるかは個人差があるので、ちゃんと定義してほしい。

(2) 第11回創価大学FDフォーラム

日時 平成25年12月14日(土) 12:30~16:50

会場 中央教育棟 AB102 教室 主催 創価大学

後援 大学コンソーシアム八王子, 全国私立大学FD連携ネットワーク, 学術・文化・産業ネットワーク多摩

岡山県立大学より, スポーツシステム工学科高戸教授が参加。
プログラム

12:30~13:20 ラーニング・コモンズ” SPACe” 見学

第1部 アクティブ・ラーニングを支援する本学の取り組み

13:20~ 開会, 馬場 善久 (創価大学学長)

13:30~ SPACe 設立経緯, 西浦 昭雄 (総合学習支援センター長)

14:00~ 具体的活動紹介, 山崎めぐみ (総合学習支援副センター長)

第2部 アクティブ・ラーニングを保証するカリキュラム設計

15:00~ 関西国際大学の取り組み, 濱名篤 (関西国際大学学長)

16:20~ 質疑応答

16:50, 閉会, 寺西宏友 (副学長・学士課程教育機構長)

第11回創価大学FDフォーラムに参加した。創価大学では2013年9月に中央教育棟(地上12階, 地下3階)が完成したのにもない, 既存の教育・学習支援センターから学習支援部門を独立・拡充し, 学士課程教育機構内に総合学習支援センター(Student Performance Acceleration Center, SPACe)を設置した。面積は約2,000㎡で, 協同学習, 語学学習, 自習, PC, 学習相談, 日本語・英語ライティング支援, 図書館サービスなどの機能を集約している。学習支援担当の事務機能も同一空間内に統合することで, ワンストップのサービスを提供している。半年間の運用で, 平日は2,000人超の利用(学生数8,143人)。個別自習エリアよりも協同学習エリアから埋まっていく。調査の結果, 授業外学習時間が約1時間増えたことなどが報告された。

第2部では「主体的な学びのための教学マネジメントの構築」と題して関西国際大学学長 濱名篤先生の講演があった。主体的な学びを創造するアクティブ・ラーニングが注目されているが, 専門教育課程において導入が進んでいるとは言いがたい。経験学習重視の流れの中で注目されているHIP(High Impact Practice)型の教育方法について, 関西国際大学での事例を用いながら, 分かり易く解説していただいた。ナンバリングによるカリキュラムマップの作成, HIPによる教育方法の充実, ルーブリックを用いた学修成果の測定など耳慣れない言葉もあったが, 大変参考になった。その後, 会場からも質問や発言があり活発な議論が行われた。

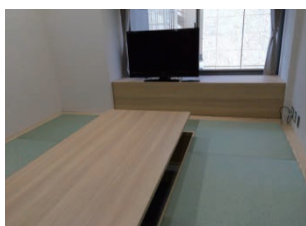


写真1 掘りごたつ形式の協同学習スペース

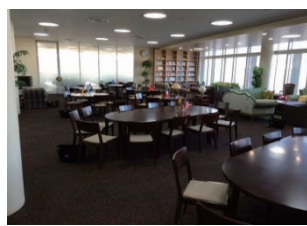


写真2 語学学習スペース



写真3 語学学習スペース 少人数でリラックスして英会話の学習ができるスペースをいくつか設置

2-6 卒業時アンケート

本学では、平成 15 年度から、卒業時に「卒業時アンケート」を実施し、集計結果は毎年の「教育年報」に報告している。平成 18 年度には「卒業時アンケートの信頼性と妥当性」の検証を行い、アンケート項目の再構成を行った(検証の詳細は「教育年報 2006」を参照されたい)。以下に平成 24 年度卒業時アンケートの集計結果の概要を述べる。詳細は付録 B に掲載する。

(1) 平成 24 年度卒業時アンケート

卒業生全員を対象に、無記名・自記式によるアンケート(マークシート方式)を卒業式の直後に実施した。対象者数は 365 人、回答者数は 339 人(保健福祉学部 130 人、情報工学部 126 人、デザイン学部 83 人)、回収率は 92.9%であった。

アンケート項目は、基本属性や全般的満足度のほか、以下の「教養的成長」、「専門的成長」、「総合的成長」の 3 領域を問う合計 21 項目で構成されている。

アンケート項目群	注) 回答は 5 段階評価
問 4～ 8. 次の全学教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか。 問 4. 「コミュニケーション (語学教育)」系は、 問 5. 「人間と文化の理解」系は、 問 6. 「現代社会に生きる」系は、 問 7. 「科学技術と環境」系は、 問 8. 「健康の維持・増進 (体育を含む)」系は、	
問 9～12. 次の学部教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか。 問 9. 「学部教育への準備」系は、 問 10. 学部教育科目の講義は、 問 11. 実験・実習・演習は、 問 12. 卒業研究は、	
問 13～20. あなたが在学中に身につけた能力について尋ねます。 問 13. 社会の一員として生きる力は、 問 14. 基礎学力は、 問 15. 専門的な知識と技術の広がりは、 問 16. 創造的に考える力は、 問 17. 自らをみがき発展させる力は、 問 18. コミュニケーションの力は、 問 19. ソーシャルスキル・ビジネスマナーは、 問 20. 職業人 (プロ) となる意識は、	
問 21. 全般的に本学の教育は満足でしたか。	

(2) アンケート集計結果の概要

表 2.6-1 は、アンケート項目を3領域の成長感と「全般的な満足度」に集約して、卒業生全体の回答の分布状況を示したものである。

表 2.6-1 アンケート結果の概要（卒業生全体の回答の分布状況）

	保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	全体
教養的成長（問 4～8）	62.3～65.3	56.8～64.7	60.1～63.6	56.8～65.3
専門的成長（問 9～12）	75.8～80.8	73.5～78.1	82.4～82.5	73.5～82.5
総合的成長（問 13～20）	72.2～73.9	59.4～65.3	70.2～71.1	59.4～73.9
全般的満足（問 21）	77.7	68.1	77.6	74.1

※5段階評価の1(否定)を1, 5(肯定)を100と換算した値を示す。

学部や項目により多少の相違はあるが、本学の教育を通じての成長感を領域別に見ると最も肯定的に捉えられているのが「専門的成長(学部教育及び「学部教育への準備」系, 問9～12)」である。学部教育科目の中では「実験・実習・演習」と「卒業研究」への満足度が高い。

一方、「教養的成長(問4～8)」は3領域の中では評価が低く、学生の認識の中では、自己の成長に結びつけにくい様子が窺える。

「総合的成長(問13～20)」の領域では、学部間や項目間の相違が比較的大きい(詳細は付録Bを参照)。「専門的知識・技術の広がり(問15)」は身についたと感じている学生が多い一方、「ソーシャルスキル・ビジネスマナー(問19)」に関しては他の項目に比べて評価がやや低い結果となっている。

本学での修学に関する「全般的な満足度(問21)」については、否定的回答は少なく全体としては75.8%の卒業生が「やや満足」又は「大いに満足」と回答している。しかしながら問21に関しては、前年度と比較すると情報工学部で約5ポイントの低下となっている。この要因については詳細な調査が必要であろう。次に、自由記述であるが、回答総数339件のうち僅か2件あるのみであり、その内容は「岡山県立大学に来て本当によかったです!!(栄養学科)」と「プログラミング言語等は実技をやったほうがやっぱり分かり易い。(情報システム工学科)」であった。

2-7 まとめと課題

教員は普段他の教員がどのような授業をしているのか見る機会がほとんどなく、授業参観は貴重な機会である。今年度はすでに述べたように、参観する教員の数を増やそうと、いくつかの試みを行ったが、以下のような課題が残った。

①★印の付与について

学生アンケートで上位の授業に付ける★印については、何件つけばよいのかについてFD部会で議論したが、まとまらず、各学科に任せることにした。学生アンケートの結果を見ながらやってみると、以下のような学科があり、★の付与は意外に難しかった。

- ・学生アンケートで上位の授業がほとんど公開されておらず、公開されているものの中から選ぶと、その学科の平均的な点数でしかない。
- ・多くの科目の点数が僅差なため、どこで切ればよいか迷う。
- ・複数教員による授業で、公開授業の表に書かれている教員名と昨年の授業アンケートの教員名の記載が異なるため、同一科目か判断できない。また、複数教員の授業には、ゼミのように、各教員が個別に授業を行っているケースと、一緒に行っているケースがあり、学生アンケートの表だけからでは判断がつかない。

②取りまとめ作業の学部から学科への移行について

今回の結果によると、学科への作業の移行により、参観教員数が増加したのは保健福祉学部だけであり、明確な効果があったとは言えないが、保健福祉学部で増加した理由を解明する価値はあるかもしれない。

自分の見たい授業を見るのではなく、関連科目の先生に参観授業を割り当てるような仕組みが必要かもしれない。

また、取りまとめ作業は自動化が可能であり、FD担当教員が集計に費やす貴重な時間を考えれば、このような単純作業は早急に自動化すべきである。この場合、学科FD委員の役割は、消極的な教員への呼びかけだけになる。

本年度もFD活動が例年通り行われたが、様々な課題が挙げられている。課題は技術的な問題からFDの実施理念、FD活動のフィードバック等多岐に亘っている。今後は、「教育の質の保証」を図り、「学士力」「社会人基礎力」等の能力の効果的付与を目途とし、課題を設定してFD活動を深化させることが望まれる。

3 教育力向上支援事業

3-1 目的

教育力向上支援事業は各学部、学科が自ら既存教育方法や授業の改善及び新規な教育上の試みを行って、全学教育や専門教育において教育効果を向上させるために設定された事業である。経費が配分される事業の範囲は広く様々な試みが可能な、自由度の高い事業である。また、本年度からは海外で行われる授業に対して教員及び学生に対する旅費等援助が可能になり、従来学部教育にのみ配分されていたが、大学院における教育にも配分されることとなり、その活用効果が期待される。

3-2 本年度実施事業及び来年度実施予定事業

平成 21 年度より設けられた「教育力向上支援事業」を平成 25 年度も引き続き実施し、教育研究活動委員会で承認を受けた 13 件の事業について、計 5,170 千円を配分した。採択された事業名及び代表担当者等は次のとおりである。

番号	継続/ 新規	事業の主な対象 (科目分類等)	代表者名	事業名
(1)	継続	デザイン学部	難波久美子	クラフト系デザインにおける高大連携プログラム
(2)	継続	デザイン学部	森下眞行	三次元造形システムを活用したモノづくり造形教育プログラムの開発
(3)	新規	保健福祉学部	二宮一枝	看護実践能力向上に向けたブレンディッドラーニングシステムの構築
(4)	新規	保健福祉学部	岸本妙子	全学教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる食文化及び栄養学教育の推進
(5)	新規	保健福祉学部	中村 光	岡山県立大学に適合した保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発
(6)	新規	デザイン学部	熊澤貴之	社会連携による建築まちづくり教育の実践
(7)	新規	デザイン学部	兒玉由美子	新しいエコエネルギーのデザイン教育-エコ発電技術教育とデザインのコラボレーション-
(8)	新規	デザイン学部	金丸敏彦	ものづくり工房運営についての調査研究
(9)	新規	デザイン学部	ブルネリ・アンソニー	「専門英語」を通して学生の英語力を活性化する

(10)	新規	デザイン学部	山下万吉	IT コンテンツデザインコースにおけるプロジェクトを用いた教育プログラムの実施
(11)	新規	デザイン学部	助川たかね	課題発見能力の涵養に向けた「双方向ケース教育」推進を支えるシステムの設計と実践
(12)	新規	全学教育研究機構	杉村寛子	中級英語必修化に向けての多読教育プログラムの再検討
(13)	新規	全学教育研究機構	朴 貞淑	使える役に立つ実践的な韓国語を身につける学習支援

来年度（平成 26 年度）の教育力向上支援事業を募集した結果 30 件の申請があり、その内、継続が 5 件、新規が 22 件採択された。教育研究活動委員会で承認を受けた 27 件の事業に、計 9,440 千円を配分予定である。採択された事業名及び代表担当者等は次のとおりである。

番号	新規/ 継続	事業の主な対象 (科目分類等)	代表者名	事業名
(1)	継続	全学教育研究機構	杉村寛子	中級英語必修化に向けての多読教育プログラムの再検討(2年目)
(2)	継続	保健福祉学部	山口三重子	看護実践能力向上に向けたブレンディッドラーニングシステムの構築
(3)	継続	保健福祉学部	岸本妙子	全学教育と専門教育の連携によるグローバル社会に対応できる食文化及び栄養学教育の推進
(4)	継続	保健福祉学部	中村 光	岡山県立大学に適合した保健・医療・福祉の多専門職連携教育プログラムの開発
(5)	継続	デザイン学部	金丸敏彦	ものづくり工房運営についての調査研究2
(6)	新規	全学教育研究機構	ブルネリ・アンソニー	クラスマネージメント・システム(Moodle)の導入と英語力養成のための調査研究
(7)	新規	全学教育研究機構	朴 貞淑	使える役に立つ実践的な韓国語の学習支援
(8)	新規	全学教育研究機構	綾部誠也	体育授業の教育効果向上と活力ある学生生活の支援を目的とした健康スポーツ推進センターの整備
(9)	新規	保健福祉学部	名越恵美	成人看護学急性期におけるシミュレーション教育効果の検証

(10)	新規	保健福祉学部	二宮一枝	看護専門職のためのグローバル・ラーニングシステム構築
(11)	新規	保健福祉学部	新田陽子	韓国食文化学
(12)	新規	保健福祉学部	山本耕一郎	英語による専門教育の実施とその方法の開発
(13)	新規	保健福祉学部	佐藤和順	リアリティショックを克服し就業継続できる力量を有した保育者養成のプログラム開発
(14)	新規	情報工学部	石井 裕	卒業生による講習会「県大吉備塾」の実施
(15)	新規	情報工学部	但馬康宏	プログラミング教育における解法組立てと問題分析能力を養う教材およびカリキュラム開発
(16)	新規	情報工学部	福田忠生	ものづくり関連授業の総合的理解度の向上に向けた教育方法の検討
(17)	新規	情報工学部	井上貴浩	スマートプロトタイピングのための学習強化プログラムの開発
(18)	新規	デザイン学部	岩本弘光	建築・デザイン海外研修による国際交流推進と建築・教養教育の充実
(19)	新規	デザイン学部	尾崎 洋	新領域教育に対応した技術アドバイザー制度導入とプロトタイピングデザイン技術教育の実践
(20)	新規	デザイン学部	兒玉由美子	岡山外語学院の留学生と本学学生を対象にした慶應義塾大学大学院経営管理研究科指導陣による英語セミナーの開催
(21)	新規	デザイン学部	森下 眞行	デザインパテントコンテストを活用した実践型創造力創出教育プログラムの開発
(22)	新規	デザイン学部	檜尾 聡美	ものづくり専門教育のグローバル化に向けた取り組み
(23)	新規	デザイン学部	関崎 哲	教養教育としての美術鑑賞の内容明確化と具体的プログラムの開発・実践事業
(24)	新規	デザイン学部	山下 万吉	ITコンテンツデザインコース及びビジュアルデザイン領域におけるプロジェクトを用いた教育プログラムの実施
(25)	新規	全学的/学部間課題	佐藤洋一郎	ビブリオバトルによる読書推進とコミュニケーション能力向上プログラム開発
(26)	新規	全学的/学部間課題	迫 明仁	学生相談室の認知度向上を目途とする環境構築の試み
(27)	新規	全学的/学部間課題	齋藤美絵子	情報工学部・デザイン学部合同による「対話型発想教育プログラム」の実施

3-3 まとめと課題

教育力向上支援事業が本年度から事業の対象が大学院にも広がったこと、海外渡航費の一部援助を可能としたことにより、学部、大学院におけるグローバル教育にはずみがつくことが期待される。特に大学院では学术交流など学部にしてより国外での授業等が多くなる可能性があることから、グローバル教育促進において時宜を得た変更であったと考えられる。今年度は過去数年に比して非常に多くの申請があったが、これは教員が新たな教育の方法開発や方法の深化を意図してのことと推測される。今後は、事業の成果をより詳しく公表し学科、学部のみならず全学で共有することも必要と考えられる。また、大学のFD活動に直結するような申請については、今後その申請を奨励するとともにFD活動の一部として実施することも課題として挙げられる。

付録

A. 入試統計（学部・大学院）

A-1 学士課程

一般入試

単位：人

学部	学科	平成24年度						平成25年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	28	192	109	32	29	3.4	28	168	109	31	31	3.5
	栄養学科	30	99	96	34	28	2.8	30	140	139	39	28	3.6
	保健福祉学科	42	151	76	49	42	1.6						
	保健福祉学科社会福祉学専攻							28	144	90	34	29	2.6
	保健福祉学科子ども学専攻							14	92	67	16	15	4.2
	学部計	100	442	281	115	99	2.4	100	544	405	120	103	3.4
情報工学部	情報通信工学科	37	613	347	106	43	3.3	37	721	396	103	45	3.8
	情報システム工学科	37	794	434	148	62	2.9	37	1,171	651	112	37	5.8
	スポーツシステム工学科	25	307	174	60	38	2.9	25	540	353	54	29	6.5
	学部計	99	1,714	955	314	143	3.0	99	2,432	1,400	269	111	5.2
デザイン学部	デザイン工学科	30	81	80	34	34	2.4	30	65	64	32	30	2.0
	造形デザイン学科	38	108	105	42	40	2.5	38	103	100	42	39	2.4
	学部計	68	189	185	76	74	2.4	68	168	164	74	69	2.2
合計		267	2,345	1,421	505	316	2.8	267	3,144	1,969	463	283	4.3

○倍率＝受験者数／合格者数

○保健福祉学科は平成25年度から専攻別の募集

推薦入試

単位：人

学部	学科	平成24年度						平成25年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	12	42	42	13	13	3.2	12	41	41	14	14	2.9
	栄養学科	10	26	26	12	12	2.2	10	39	39	12	12	3.3
	保健福祉学科	18	34	34	18	18	1.9						
	保健福祉学科社会福祉学専攻							12	19	19	12	12	1.6
	保健福祉学科子ども学専攻							6	19	19	6	6	3.2
	学部計	40	102	102	43	43	2.4	40	118	118	44	44	2.7
情報工学部	情報通信工学科	13	26	26	13	13	2.0	13	27	27	15	15	1.8
	情報システム工学科	13	31	31	13	13	2.4	13	28	28	14	14	2.0
	スポーツシステム工学科	15	23	23	15	15	1.5	15	17	17	15	15	1.1
	学部計	41	80	80	41	41	2.0	41	72	72	44	44	1.6
デザイン学部	デザイン工学科	10	19	19	10	10	1.9	10	14	14	10	10	1.4
	造形デザイン学科	12	37	37	14	14	2.6	12	35	35	14	14	2.5
	学部計	22	56	56	24	24	2.3	22	49	49	24	24	2.0
合計		103	238	238	108	108	2.2	103	239	239	112	112	2.1

○倍率＝受験者数／合格者数

○保健福祉学科は平成25年度から専攻別の募集

第3年次編入学試験

単位：人

学部	学科	平成24年度				平成25年度			
		志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
保健福祉学部	看護学科	16	16	5	2	12	12	4	2
	栄養学科	12	12	1	1	17	16	1	1
	保健福祉学科								
	学部計	28	28	6	3	29	28	5	3
情報工学部	情報通信工学科								
	情報システム工学科								
	スポーツシステム工学科								
	学部計								
デザイン学部	デザイン工学科	17	15	6	5	5	4	2	2
	造形デザイン学科	1	1	0	0	2	2	2	2
	学部計	18	16	6	5	7	6	4	4
合計	46	44	12	8	36	34	9	7	

○募集人員は、いずれも若干名

○保健福祉学科及び情報工学部3学科は平成24、25年度募集せず

A-2 大学院課程

博士前期課程・修士課程

単位:人

研究科	専攻	平成24年度						平成25年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	看護学専攻	7	5	5	5	5	1.0	7	7	7	5	5	1.4
	栄養学専攻	6	3	3	3	2	1.0	6	8	6	6	6	1.0
	保健福祉学専攻	7	7	7	7	6	1.0	7	6	6	6	6	1.0
	研究科計	20	15	15	15	13	1.0	20	21	19	17	17	1.1
情報系工学研究科	電子情報通信工学専攻	20	31	31	29	27	1.1	/	/	/	/	/	/
	機械情報システム工学専攻	20	36	35	33	31	1.1	/	/	/	/	/	/
	人間情報システム工学専攻	12	6	6	6	5	1.0	/	/	/	/	/	/
	システム工学専攻	/	/	/	/	/	/	52	57	56	53	50	1.1
	研究科計	52	73	72	68	63	1.1	52	57	56	53	50	1.1
デザイン学研究科	デザイン工学専攻	7	5	5	5	5	1.0	7	5	4	4	3	1.0
	造形デザイン学専攻	9	5	5	5	5	1.0	9	10	10	10	10	1.0
	研究科計	16	10	10	10	10	1.0	16	15	14	14	13	1.0
合計		88	98	97	93	86	1.0	88	93	89	84	80	1.1

○倍率=受験者数/合格者数

○情報系工学研究科は平成25年度から1専攻での募集

博士後期課程

単位:人

研究科	専攻	平成24年度						平成25年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科	保健福祉科学専攻	5	4	4	4	4	1.0	5	9	8	4	4	2.0
情報系工学研究科	システム工学専攻	6	3	3	3	3	1.0	6	3	3	3	3	1.0
合計		11	7	7	7	7	1.0	11	12	11	7	7	1.6

○倍率=受験者数/合格者数

B. 卒業時アンケートの詳細

調査項目：以下の集計表に示す 21 項目

調査時期：平成 25 年 3 月 22 日

調査対象：平成 24 年度卒業生（365 人）

回収率：92.9%（保健福祉学部 130 人，情報工学部 126 人，デザイン学部 83 人）

集計方法：学部別・項目ごとの有効回答の範囲内での単純集計

問 1. あなたの入学年は、

- ① 平成 23 年，② 平成 22 年，③ 平成 21 年，④ 平成 20 年，⑤ 平成 19 年以前

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	1	2	122	2	1	1
情報工学部	0	6	108	12	0	0
デザイン学部	2	4	69	5	2	1
全 体	3	12	299	19	3	2

問 2. 本学に合格した入学試験の種別は、

- ① 前・中・後期日程入試，② 推薦入試，③ 編入学，④ 再入学，⑤ 私費外国人留学生・帰国子女特別選抜・社会人特別選抜

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	84	40	4	1	0	1
情報工学部	85	40	1	0	0	0
デザイン学部	57	19	6	0	0	1
全 体	226	99	11	1	0	2

問 3. 卒業後の進路は、

- ① 就職（専攻と関連する職業），② 就職（専攻と関連しない職業），③ 進学（大学院・編入），④ 進学（再入学・専攻の変更），⑤ 未定・その他

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤	未回答
保健福祉学部	99	22	3	4	0	0
情報工学部	40	26	47	5	8	0
デザイン学部	43	12	9	3	16	1
全 体	182	60	59	12	24	1

問 4～21 については、次ページに一覧を示す（回答は 100 点換算で表示している）。

平成24年度「卒業時アンケート」の集計	看護学科				栄養学科				保健福祉学科				情報通信工学				情報システム				システム工学				スポーツ・デザイン学科				情報工学部				デザイン学部				全体		備考(前年度全体)	
	看護学科		栄養学科		保健福祉学科		情報通信工学		情報システム		システム工学		スポーツ・デザイン学科		情報工学部		デザイン学部		全体		備考(前年度全体)																			
	対象者数	回答者数	回答率(%)	65.3	62.3	63.0	56.8	60.0	64.7	60.1	63.6	60.2	60.6	61.6	62.0																									
【教養的成長】 次の全学教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか																																								
「コミュニケーション(語学教育)」系は																																								
「人間と文化の理解」系は																																								
「現代社会に生きる」系は																																								
「科学技術と環境」系は																																								
「健康の維持・増進(体育を含む)」系は																																								
教養的成長の平均																																								
【専門的成長】 次の教育科目群(主に学部教育に関するもの)は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか																																								
全学教育科目群「学部教育への準備」系は																																								
学部教育科目の講義は																																								
実験・実習・演習は																																								
卒業研究は																																								
専門的成長の平均																																								
【総合的成長】 あなたが本学在学中に身につけた能力について尋ねます																																								
社会の一員として生きる力は																																								
基礎学力は																																								
専門的な知識と技術の広がり																																								
創造的に考える力は																																								
自らをみがき発展させる力は																																								
コミュニケーションの力は																																								
ソーシャルスキル・ビジネスマナーは																																								
職業人(プロ)となる意識は																																								
総合的成長の平均																																								
【全般的満足】 全般的に本学の教育は満足でしたか																																								
全般的に本学の教育は満足でしたか																																								
注)アンケートの集計結果は、5段階評価の1(否定)を1、5(肯定)を100と換算した値を示す																																								

C. 全学的就職支援の実施状況

C-1 就職ガイダンスの実施状況

実施日	ガイダンスの内容	実施機関等	参加学生数
6月20日	進路・就職ガイダンス	(株)リクルートキャリア	51
6月27日	公務員試験ガイダンス	東京アカデミー岡山校	31
10月10日	就職ガイダンス	(株)シーズ	130
10月17日	業界研究講座	(株)リクルートキャリア	107
10月24日	企業魅力発見講座	(株)ビザビリレーションズ	88
11月 7日	エントリーシート対策講座①	(株)マイナビ	146
11月21日	面接マナー講座	おかやま若者就職支援センター	103
12月 5日	エントリーシート対策講座②	(株)マイナビ	85
12月12日	面接克服講座	大学就職相談員	75
12月19日	求人NAVI操作説明会 就活ゼミ	(株)ジェイネット (株)山陽新聞社	23
1月 9日	公務員試験ガイダンス	東京アカデミー岡山校 総社市, 岡山県警人事担当者	32
1月16日	1・2年生向進路・就職ガイダンス	新卒応援ハローワーク	39

C-2 自己分析検査等の実施と解説

実施日	検査名	実施機関等	受検学生数
7月 4日	自己分析検査	(有)学匠	38
7月11日	自己分析検査解説講座	(有)学匠	
10月28日～ 11月 5日	職業適性診断	(株)リアセック	86
11月28日	職業適性診断解説講座	(株)リアセック	

C-3 各種模擬テストの実施

実施日	試験名	実施機関等	受験学生数
4月20日	公務員模擬試験	東京アカデミー岡山校	15
7月18日	SPI+一般常識・時事Web模擬テスト	(株)マイナビ	29
11月14日	SPI模擬テスト	(株)ジェイ・ブロード	57

C-4 就職活動バス（合同企業説明会へのバス）の運行

運行日	合同企業説明会参加場所	主催者	参加学生数
12月15日	大阪（インテックス大阪）	(株)マイナビ	64

C-5 就職相談員による就職相談

相談日	相談時間	内 容 等
毎週 月曜日 火曜日 金曜日	12:00～17:00 10:30～15:30 10:30～15:30	<p>キャリアカウンセラーの資格を有する就職相談員による各種相談を実施</p> <p>◇相談内容等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就職活動のすすめ方 ・履歴書・エントリーシート等に関する相談 ・模擬面接 ・各種就職ガイダンスの補講 など <p>◇H25年度相談件数</p> <ul style="list-style-type: none"> ・469件

D. 国際交流

本学は中期目標として「海外の大学との間で、国際共同研究を行っている教職員や学生の幅広い分野での相互交流を推進する。」「国際交流協定を締結する大学を必要に応じて拡大する。」「学生の海外研修を推奨するとともに、留学生の受入と派遣を進める。」とされている。これまで学術交流協定校である英国国立バンガー大学、韓国又松大学校、中国四川大学へ短期語学・文化研修として学生を派遣してきた。一方、平成19年度から海外から日本語学・文化研修の目的で学生を受け入れるようになった。

本年度は、英国への語学研修に9名が参加したが、韓国及び中国への語学研修は応募者が最少催行人数に満たなかったため、中止となった。なお、研修費用の更なる低廉化を図るべく、本学からの助成を定率（1割）から研修費用に応じた定額へ変更した。

本学で開催する日本語学・文化研修は、韓国又松大学校及び南海大学より16名の学生の参加があった。

また、本年度より新たに、オーストラリア連邦南オーストラリア州アデレード大学が実施する研修への派遣及び海外で企業視察や文化体験などを行う香港スタディツアーを企画し、それぞれ14名、5名が参加した。

・英国語学・文化研修の実績概要

①期 間：平成25年8月29日（木）～9月20日（金）

②研修内容：英国国立バンガー大学における英語力向上と英国文化体験など

③参加学生：9名（最少催行人数7名）

④費用実績：395,095円*

上記の費用には往復航空運賃、空港税・燃油特別付加運賃、授業料、ホームステイ費、フィールド・トリップ（交通費）及び諸経費などが含まれている。

・韓国語学・文化研修の計画概要

①期 間：平成25年8月8日（木）～8月16日（金）

②研修内容：又松大学校（韓国大田広域市東区）にて韓国語力向上と又松大学校学生との交流、韓国伝統文化体験など

③募集人数：10名（最少催行人数5名、応募人数2名）

④費用：74,800円*

上記の費用には往復航空運賃、授業料、宿泊代、食費、見学費及び見学に伴う交通費などが含まれている。

・中国語学・文化研修の計画概要

①期 間：平成25年9月7日（土）～9月20日（金）

②研修内容：四川大学（中国四川省成都市）にて中国語力向上と中国文化体験など

③募集人数：10名（最少催行人数5名、応募人数1名）

④費用：99,800円*

上記の費用には往復航空運賃、授業料、宿泊代、施設見学費、諸経費などが含まれている。

・南オーストラリア州アデレード語学・文化研修の実績概要

①期 間：平成26年3月1日（土）～3月23日（日）

②研修内容：アデレード大学（南オーストラリア州アデレード市）における英語力向上と文化体験など

③参加学生：14名（最少催行人数8名）

④費用実績：348,000円*

上記の費用には往復航空運賃、空港税・燃油特別付加運賃、授業料、ホームステイ費、ソーシャルアクティビティ（交通費）及び諸経費などが含まれている。

※費用は、本学及び後援会からの助成金を除いた金額となっている。

・日本語・文化研修の実績概要

①期 間：平成25年7月30日（火）～8月7日（水）

②研修内容：主として本学と国際交流協定を締結している海外の大学の学生を対象に、日本語講座の開講、本学学生や地域住民との交流、岡山県内の産業・史跡・文化財見学等を行い、研修を通じて学生の日本語能力の向上や相互理解を深めるもの

③参加人員：16名

・日本語・文化研修の実施結果

本年度は、韓国又松大学校及び韓国南海大学から16名（男性5名、女性11名）の学生が研修に参加しており、幼児教育学科、社会福祉学専攻、鉄道車両システム学科など多様な分野の学生を受け入れた。本年度の研修は、次のプログラムにより実施しており、昨年に引き続きホームステイを企画して地域住民との交流の充実を図った。

月日 (曜日)	10:00～10:50	11:00～11:50	13:00～13:50	14:00～14:50	15:00～15:50	16時以降	備考
7月30日 (火)	開講式	日本語講座	日本語講座	日本語講座	休憩	県立大学学生との交流会	
7月31日 (水)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	自由行動	
8月1日 (木)	岡山の産業視察・観光 (三菱自動車工業(株)水島製作所, 鷺羽山, 瀬戸大橋, 倉敷美観地区)						
8月2日 (金)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	ホームステイ	
8月3日 (土)	ホームステイ						
8月4日 (日)	ホームステイ						
8月5日 (月)	自由行動		12:40～ 総社市長表敬	13:40～ 総社市内の名所探訪(鬼ノ城, 備中国分寺) 17:30～ 総社市民館ハングル語講座生との交流会			
8月6日 (火)	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	日本語講座	県立大学 歓迎会	
8月7日 (水)	日本語講座	日本語講座	修了式				

・香港スタディツアーの実績概要

①期 間：平成26年3月1日（土）～3月6日（木）

②研修内容：中華人民共和国香港特別行政区及び広東省深圳市における企業視察、文化体験、香港大学学生との交流及び授業参観など

③参加学生：5名（最少催行人数5名）

④費用実績：63,000円*

上記の費用には往復航空運賃、空港税・燃油特別付加運賃、宿泊代及び諸経費などが含まれている。

※費用は、本学及び後援会からの助成金を除いた金額となっている。

E. 高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入

E-1 講師派遣

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
玉野光南高等学校	玉野光南高校	デザイン学部	教授	嘉数 彰彦	情報革命！情報の発信者として何をすべきか	40	2	H25.6.14
岡山一宮高等学校	岡山一宮高校	保健福祉学部	准教授	名越 恵美	看護師の仕事とがん看護の広がり	37	1	H25.6.19
		保健福祉学部	教授	木本 眞順美	よくわかる食物アレルギーのお話	34		
		情報工学部	教授	稲井 寛	インターネットの基盤技術	49		
玉野光南高等学校	玉野光南高校	情報工学部	助教	荒井 剛	プログラミングの学習と実践 ～Androidアプリを作ろう～	40	1	H25.6.25
		情報工学部	助教	滝本 裕則				
林野高等学校	林野高校	保健福祉学部	准教授	名越 恵美	看護師の仕事とがん看護の広がり	31	1.2.3	H25.7.16
倉敷南高等学校	倉敷南高校	保健福祉学部	准教授	中村 孝文	ユニバーサルデザインとバリアフリー	78	1.2	H25.9.17
		情報工学部	准教授	福田 忠生	数値解析を用いたものづくり	37		
		デザイン学部	教授	吉原 直彦	「なるには」スキル以外に必要なもの	3	2	H25.9.24
笠岡高等学校	笠岡高校	保健福祉学部	准教授	渡邊 久美	看護の世界	19	2	H25.10.1
		保健福祉学部	教授	山本 耕一郎	食中毒とは何か？	5		
倉敷古城池高等学校	倉敷古城池高校	保健福祉学部	准教授	岡山 加奈	感染予防の原則－手指衛生－	39	2	H25.10.3
		情報工学部	准教授	佐藤 洋一郎	コンピュータ工学とその魅力	41		
玉野光南高等学校	玉野光南高校	情報工学部	教授	伊藤 信之	無線通信技術とLSI	12	2	H25.11.25

E-2 生徒の受入

高校名	実施場所	担当学部	教員名		講義内容等	受講人数	学年	実施日
総社高等学校	岡山県立大学	デザイン学部	教授	森下 眞行	デザイン基礎※	16	2	H25年9～11月
			教授	山下 明美				
			助教	朴 貞淑				

※ 講義内容等の※印は連携講座(高校が単位認定を行うことができるもの。)

F. 高等学校への講師派遣及び生徒の受入（高大連携協定以外）

F-1 講師派遣（校内ガイダンス）

月 日	高等学校名	受講者		内 容
		学年	人数	
5月1日	岡山県立井原高等学校	2,3	49	大学全体の説明
5月23日	岡山県立津山工業高等学校	2,3	2	デザイン学部の説明
9月14日	清心女子高等学校	1,2	37	保健福祉学部の説明
10月17日	香川県立高松桜井高等学校	1,2	58	栄養学科の説明
10月21日	岡山県立倉敷中央高等学校	2	13	大学全体の説明
10月25日	金光学園高等学校	1,2	56	情報工学部の説明
1月27日	岡山県立倉敷中央高等学校	1	23	保健福祉学部の説明

F-2 生徒の受入

月 日	高等学校名等	訪問者		内 容
		学年	人数	
7月27日	岡山県立玉野光南高等学校	1	7	情報工学部概要説明、施設見学
10月10日	岡山県立岡山御津高等学校	1	5	デザイン工学科概要説明、施設見学
10月25日	岡山県立倉敷工業高等学校	1	44	デザイン学部概要説明、施設見学

※ 訪問者数には引率教員等を含む。

G. 学生・クラブの表彰

G-1 学生の表彰

保健福祉学部	看護学科	4年	三木 真彩菜	2013年度 総社市奨励賞
	保健福祉学科	4年	古橋 昌子	平成25年度社会福祉士養成校協会会長表彰
			江尻 睦	平成25年度保育士養成協議会会長表彰
			小林 奈津美	平成25年度介護福祉士養成施設協議会会長表彰
保健福祉学研究科	保健福祉学専攻	2年	中尾 竜二	日本認知症ケア学会 2013年石崎賞
		1年	杉山 京	日本認知症ケア学会 2013年石崎賞
情報工学部	情報通信工学科	4年	吉田 俊宏	2013年度 総社市奨励賞
			寺田 貴俊	平成25年度 電子情報通信学会中国支部連合大会 奨励賞
			山本 航	日本オペレーションズ・リサーチ学会中国・四国支部 支部長賞
	情報システム工学科	4年	亀井 光	「学生ケータイあわ〜ど2013」ケータイアイデア部門 優秀賞
			松島 正典	2013年度 総社市政策提言賞
情報系工学研究科	システム工学専攻 (博士前期)	1年	難波 侑矢	2013年 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS) 最優秀研究賞
			国井 達彦	2013年 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS) 優秀研究賞
				2013年 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS) 功労賞
				2014 RISP International Workshop on Nonlinear Circuits, Communications and Signal Processing, Student Paper Award
			有田 里美	2013年 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS) 功労賞
			宮崎 雅之	2013年 IEEE 広島支部学生シンポジウム (HISS) 功労賞
			漆原 巧治	第22回 計測自動制御学会中国支部 奨励賞
			上野 将太	平成25年度 電子情報通信学会中国支部連合大会 奨励賞
			諏訪下 敦規	平成25年度 電子情報通信学会中国支部連合大会 奨励賞
	岡田 俊也	平成25年度 電気学会中国支部 奨励賞		
	電子情報通信工学専攻	2年	高橋 勝	平成25年度 電気学会中国支部 奨励賞
	機械情報システム工学専攻	2年	伊藤 祥平	電子情報通信学会中国支部 学生会活動 功労賞
				第7回 エンターテイメントと認知科学シンポジウム 優秀発表賞
				第8回 コンピュータ大貧民大会 敢闘賞
			荻野 真奈美	平成25年度 情報処理学会中国支部 奨励賞
北浦 宏将	平成25年度 軽金属学会中国四国支部 奨励賞			
山本 真大	平成25年度 仁科賞			
システム工学専攻 (博士後期)	2年	村井 聡紀	平成25年度日本設備管理学会 論文賞	
デザイン学部	デザイン工学科	4年	大島 志穂	(社)日本建築学会「全国大学・高専卒業設計展示会」選定作品

造形デザイン学科	3年		(一社)岡山県建築士事務所協会 優秀卒業作品コンクール 優秀賞	
		蒔田 涼子	(社)日本建築学会中国支部 平成25年度優秀卒業設計作品賞 (一社)岡山県建築士事務所協会 優秀卒業作品コンクール 会長賞	
		廣瀬 友紀	(一社)岡山県建築士事務所協会 優秀卒業作品コンクール 優秀賞	
		山本 和輝	(社)日本建築学会中国支部 平成25年度「構造賞」(卒業研究賞)	
		鳴尾 梓歩	日本インテリア学会中国・四国支部 優秀作品賞	
		石川 潮美	建築新人戦実行委員会 建築新人戦2013 1次選考100選入賞	
		乾井 郁香	AXIS 第8回金の卵オールスターデザインショーケース 大学選抜部門 選抜	
		小原 千佳	AXIS 第8回金の卵オールスターデザインショーケース 大学選抜部門 選抜	
		西村 麻里	AXIS 第8回金の卵オールスターデザインショーケース 大学選抜部門 選抜	
			平成25年度デザインパテントコンテスト 意匠登録出願支援対象者	
	奥田 悠人	平成25年度デザインパテントコンテスト 意匠登録出願支援対象者		
	佐藤 紗矢香	平成25年度デザインパテントコンテスト 意匠登録出願支援対象者		
	横山 沙代子	平成25年度デザインパテントコンテスト 意匠登録出願支援対象者		
	2年	塚原 開成	第21回アイリス生活用品デザインコンクール 学生奨励賞	
	3年	4年	石井 葉月	「学生ケータイあわ〜ど2013」ケータイアイデア部門 優秀賞
			大野 拓哉	2013年度 総社市奨励賞
		古賀 静里菜 迫口 恵理佳 古谷 明日香 高屋 美紀 矢野 萌子 安井 太郎	「全映協グランプリ2013」学生部門 優秀賞	
			「中四映連グランプリ2013」学生部門 最優秀賞	
			有光 彩	2013年 第18回アニメーション神戸 Webアニメコンテスト 一般の部 大賞
			延藤 由美加	AXIS 第8回金の卵オールスターデザインショーケース 大学選抜部門 選抜
			迫口 恵理佳	第2回晴れの国おかやま映像コンテスト 準グランプリ
			有光 彩	第2回晴れの国おかやま映像コンテスト 特別賞
			安井 太郎	第2回晴れの国おかやま映像コンテスト 特別賞
			岡村 美咲	第2回晴れの国おかやま映像コンテスト 入選
			岡本 光平	第2回晴れの国おかやま映像コンテスト 入選
			2年	砂田 幸代
		光藤 慈子		
		起 千明		第64回岡山県美術展覧会 デザイン部門 県展賞
		谷 優希		
	森本 早智			

			池上 萌々 林 史佳 大島 萌 羽田 はるな 藤田 智乃 三輪 紗弓 鍛冶 奈央香 三浦 麻結 今田 有香 宇野 星奈 勝長 星香 植木 のぞみ 曾川 優香 田村 江理 寺岡 沙紀 中井 勇歩 難波 祐士朗 井上 盛太郎 上田 倫子	第 64 回岡山県美術展覧会 デザイン部門 入選
デザイン学研究科	造形デザイン学専攻	2 年	渡辺 真利子 三浦 義広	第 64 回岡山県美術展覧会 デザイン部門 入選 現在形の陶芸 萩大賞展Ⅲ 佳作 第 22 回日本陶芸展 前衛部門 入選
全学部	全学科	1 年		平成 25 年度第 1 回日本語検定 団体表彰 文部科学大臣賞

平成 25 年度受賞の卒業生分 (卒業研究等を対象とする.)

デザイン学部	デザイン工学科	H25. 3 卒業	溝口 綾乃	JIA 全国学生卒業設計コンクール 2013 全国大会 最終選考 55 作品選定
--------	---------	-----------	-------	--

G-2 クラブの表彰

サークル名		大会名	成績等
陸上競技部	柏木 衿香	天皇賜杯第 82 回日本学生陸上競技対校選手権大会 (10,000m 競歩)	出場
	橋本 直之	第 67 回島根陸上競技選手権大会 (男子 5,000m)	優勝
水泳部	八杉 奨	第 60 回全国国公立大学選手権水泳競技大会 (50m 自由形)	出場
サッカー部		第 36 回中国大学サッカーリーグ 2 部 B	優勝 フェアプレー賞
サイクリング部 サエラ	諏訪下 敦規	サイクル耐久レース in 岡山国際サーキット 2013 (5 時間 MTB チーム)	優勝
	池田 裕一		
	三上 大輔		
	清原 健汰		
ロボット研究サークル メヒヤニカ		第 13 回レスキューロボットコンテスト	ベストチームワーク賞 (消防防災ロボット技術ネットワーク賞)

H. 委員会等協議事項

H-1 教育研究活動委員会

第1回（平成25年4月11日）

- (1) 岡山県立大学委員会専門委員会細則の一部改正について
- (2) 平成25年度国際交流推進助成費の募集について
- (3) 特別研究学生に係る岡山県立大学大学院学則の改正等について
- (4) 特別研究学生の上限設定に係る認可申請について
- (5) 全学講義について
- (6) 岡山県立大学学位規程の一部改正等について

第2回（平成25年5月1日）

- (1) 語学・文化研修に関する助成取扱要領の一部改正について
- (2) 英語・韓国語・中国語の海外語学研修に係る単位認定の取扱いについて

第3回（平成25年5月16日）

- (1) 平成26年度授業開講計画について(保健福祉学研究科栄養学専攻)について
- (2) 平成25年度後期交換留学生の募集について
- (3) 機関リポジトリの構築について
- (4) 平成25年度国際交流推進助成費について

第4回（平成25年6月13日）

- (1) 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）の策定について

第5回（平成25年7月11日）

- (1) 平成25年度国際交流推進助成費の追加募集について
- (2) 平成26年度岡山県立大学転学生出願要領について
- (3) 平成26年度岡山県立大学交換留学生出願要領について
- (4) 岡山県立大学学位規程の一部改正について
- (5) 学位論文(博士)の公表について
- (6) 平成25年度大学院授業開講計画（デザイン学研究科）について

第6回（平成25年8月23日）

- (1) 平成25年度国際交流推進助成費について

第7回（平成25年9月30日）

- (1) GPAについて

第8回（平成25年10月17日）

- (1) 平成26年度授業開講計画(大学院)に係る作業日程について
- (2) 平成26年度教務・学生生活関係スケジュール(大学院)について
- (3) 栄養学科24年度入学生に係る開講計画の変更について
- (4) 平成26年度全学講義について
- (5) ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーについて
- (6) 語学・文化研修に関する助成取扱要領の一部改正について
- (7) 平成25年度語学・文化研修等の実施計画(案)について

第9回（平成25年11月14日）

- (1) 平成26年度大学院授業開講計画等の作成について
- (2) 教育力向上支援事業取扱要綱の一部改正について
- (3) 平成26年度教育力向上支援事業について
- (4) 平成26年度シラバスの作成（大学院）について
- (5) GPA導入にむけての工程表等について

第10回（平成25年12月19日）

- (1) 幼稚園教諭免許状の取得特例制度に応じた授業科目の新設について
- (2) 授業科目（保健福祉学研究科）の新設について
- (3) 授業科目（情報系工学研究科）の新設について
- (4) 平成26年度全学講義について
- (5) ディプロマ・ポリシー(DP)及びカリキュラム・ポリシー(CP)について
- (6) 教育力向上支援事業について

第11回（平成26年1月9日）

- (1) 教育力向上支援事業取扱要綱の一部改正について
- (2) 教育力向上支援事業学生参加旅費助成取扱要領の制定について
- (3) 教育力向上支援事業に係る受付期間の延長について

第12回（平成26年1月20日）

- (1) 国際交流推進助成費取扱要綱の一部改正について
- (2) 国際交流事業学生参加旅費助成取扱要領の一部改正について
- (3) 平成26年度国際交流推進助成費等の募集について
- (4) 諸証明における英文表記について
- (5) 授業科目（保健福祉学研究科）の新設について
- (6) 平成26年度大学院授業開講計画について
- (7) 平成26年度大学院新入生オリエンテーション実施日程について
- (8) GPAについて
- (9) ディプロマ・ポリシー(DP)及びカリキュラム・ポリシー(CP)について

第13回（平成26年2月13日）

- (1) 平成26年度大学院履修案内について
- (2) 新しい成績評価（GPA制度）について

第14回（平成26年3月13日）

- (1) 平成26年度国際交流推進助成費について
- (2) 平成26年度臨時に設ける授業科目について（保健福祉学研究科）
- (3) 岡山県立大学履修規程の一部改正について
- (4) 岡山県立大学大学院履修規程の一部改正について
- (5) 平成26年度教育力向上支援事業について

H-2 教務専門委員会

第1回（平成25年6月13日）

- （1）平成25年度教務専門委員会開催日程について

第2回（平成25年7月11日）

- （1）平成26年度授業開講計画の協議スケジュール及び平成26年度全学教育科目の開講計画への要望等について
- （2）「大学コンソーシアム岡山」への提供科目の新設について

第3回（平成25年9月17日）

- （1）平成26年度全学教育科目の開講計画について
- （2）平成26年度学部教育科目の開講計画の作成について

第4回（平成25年10月17日）

- （1）平成26年度全学教育科目の時間割について
- （2）平成26年度学部教育科目の開講計画及び入学生の卒業要件について
- （3）平成26年度学部教育科目の時間割編成について
- （4）平成26年度教務・学生生活関係スケジュールについて
- （5）4年次生に係る年度末日程について
- （6）栄養学科24年度入学生に係る開講計画の変更について

第5回（平成25年11月14日）

- （1）平成26年度学部教育科目の時間割について
- （2）平成26年度全学教育科目の授業開講計画及び時間割について
- （3）平成26年度シラバスの作成について
- （4）平成26年度「大学コンソーシアム岡山」への提供科目について
- （5）GPA導入にむけての工程表等について

第6回（平成25年12月12日）

- （1）平成26年度臨時に設ける授業科目について
- （2）平成26年度履修案内の作成について
- （3）平成26年度「大学コンソーシアム岡山」への提供科目について
- （4）幼稚園教諭免許状の取得特例制度に応じた授業科目の新設について

第7回（平成26年1月20日）

- （1）平成26年度新入生オリエンテーションについて
- （2）平成26年度臨時に設ける授業科目について
- （3）GPAについて

第8回（平成26年2月13日）

- （1）平成26年度フレッシュマン特別講義について
- （2）平成26年度履修案内について
- （3）新しい成績評価（GPA制度）について

第9回（平成26年3月13日）

- （1）平成26年度全学教育科目の時間割及び授業開講計画について
- （2）平成27年度全学教育開講計画改訂に伴う開講期間等の周知について

H-3 学生生活委員会

第1回（平成25年6月14日）

- （1）平成25年度日本学生支援機構奨学生（定期採用）の推薦について

第2回（平成25年11月26日）

- （1）平成25年度日本学生支援機構奨学生（臨時採用）の推薦について
- （2）平成26年度日本学生支援機構奨学生（大学院予約採用）の推薦について

編集後記

本学は、平成 19 年（2007 年）に地方独立行政法人となり、平成 24 年（2013 年）3 月には第一期中期計画（平成 19～24 年）終え総括の年となりました。各年度はもとより平成 24 年度にまとめた 6 年間の総括におきましても、岡山県の設置した岡山県地方独立行政法人評価委員会において高い評価を受け、平素から教員各位及び学科・学部組織として教育活動におきまして、弛まぬ努力を積み上げて来られた結果として喜ばしく思う次第です。

平成 25 年度（2013 年）からは、第二期中期計画（平成 25～30 年）が開始され、第一期における成果や反省点を踏まえて新しい航海に出る年でもありました。また、法人化以降ずっと大学の指揮を執ってこられた三宮学長が退かれ、第二期中期計画初年度の平成 25 年度からは辻新学長が大学の舵取りをされることになり、第二期中期計画の新たな 6 年に向けて心機一転臨む年となりました。

教育年報は毎年発行しており、過去におきましても充実度を高めるための努力が連続と続けられてきております。本年度発行の「教育年報 2013」におきましては、上にも述べましたように、第二期中期計画の柱である、グローバル教育・研究、教養教育の重点化と教育改革、地域貢献等の様々な新しい見直しや試みを取り込むべく、目次の新設、配置変更を行い、今後に向けた更なる教育年報の充実に努めました。その中には‘専門教育における学生の学習支援’‘大学院における研究活動と国際交流’が新たに立てられました。

この様に、本年度の教育年報は内容の充実にに向けた取り組みがあったため、執筆に携わられた諸先生にはご多用のところ多大な時間を割いてご協力いただきました。また、教育に掛かる各種数値データ等の集計・処理や解説等につきましては、各事務班の皆さまにご協力いただきました。編集委員を代表して厚く御礼申し上げる次第です。

岡山県立大学評価委員会・教育年報担当 田内雅規

発行 〒719-1197
岡山県総社市窪木 1 1 1 番地
岡山県立大学
TEL 0866-94-2111
URL <http://www.oka-pu.ac.jp>

編集 岡山県立大学評価委員会
印刷 株式会社 プリント・ケイ